

ルドルフ・シュタイナー
人智学の光に照らした世界史

GA233

Die Weltgeschichte
in anthroposophischer Beleuchtung
und als Grundlage der Erkenntnis des Menschengesistes

yucca訳

今夕のクリスマス会議では、皆さんに地上の人類進化についての展望を示したいと思います、現代の人間というものをますます親密に強度に意識のなかに受け入れることに通じていくような展望です。全文明にとってこれほど重大きわまりないことが準備されていると申し上げてよいであろうまさにこの現代のような時代にあっては、深く考えるということをする人間なら誰しも、本来なら次のような問いを投げかけて然るべきでしょう、人間の魂の現在のよう形での現われ、現在のよう状態は長期の進化からどのようにして生じてきたのか、という問いをです。――と申しますのも、現在のものは、それが過去からどのように生じてきたかを理解しようとすることによって理解できるものになる、というのは実際否定できないことでしょうか。

さて、とは言えまさにこの現代においては、人間と人類の進化に関して非常に偏見に支配されています。まずはこう考えられております、歴史上の全時代を通じて人間は魂的一霊の生活に関しては本質的に今と同じようなものであった、と。確かに、狭義の科学的なものとの関連でこう考えられているのです、古い時代、人間は幼稚で、ありとあらゆる空想的なものを信じていた、そしてつい最近になってようやく人間は科学的な意味でほんとうに賢くなった、と。だが狭義の科学的なものというものを度外視すれば、今日の人間が有する魂状態をギリシア人もオリエントの人もおしなべてすでに有していた、と考えられています。細部においては魂生活における変遷ということが考えられるにしても、全体としては、歴史上の時代を通じて本来すべては今日と同様だったのだ、と。つまり歴史上の生活が先史時代へと流れるとすると、当時人間は正しいことは何も知らなかった、と言われます。さらに時代を遡ると、当時人間はまだ動物のような姿をしていた、と。つまり歴史を遡っていくと、魂生活はほとんど変わらないものと想像され、続いて霧のなかにぼやけた映像、そして、動物のような不完全な人間、いくらかなまじな猿のような存在、というわけです。

今日ほぼこのように思い描かれるのが常となっていますね。これはまさにとほうもない偏見に基づいています、と申しますのも、このような想定をすることで、現代の人間と比較的そう昔でない時代、そうですね、十一、十、九世紀の人間との間にもすでにどれほど深い違いがあるか、あるいは、今日の人間とゴルゴタの秘蹟の同時代の人々、あるいは今日の人間とギリシア人との間においても魂状態にどれほど大きな違いがあるか、これを認識する努力がなされてないからです。さらに、ギリシア文明を一種の植民地（コロニー）後期コロニーとしていたオリエント世界へと遡ると、私たちは現代の人間の魂状態とは全然異なる魂状態のなかに入っていきます。それで私はこれから、そうですね、およそ一万年ないし一万五千年くらい前にオリエントで生きていた人間が、ギリシア人も、また例えば私たち自身ともまったく異なった状態であったことを、事例で、実際の事例で皆さんに示したいと思います。

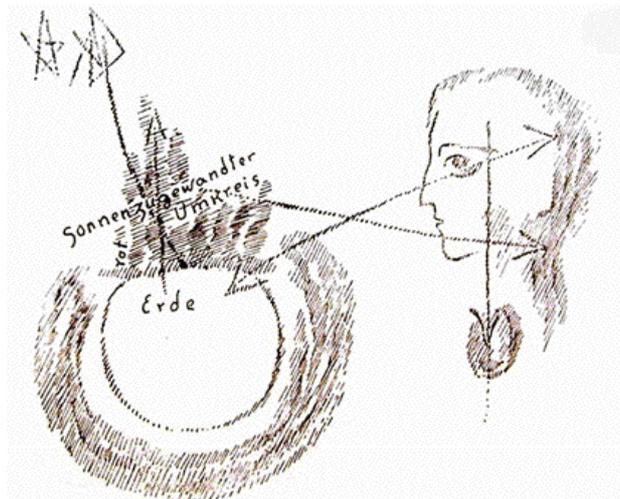
ひとつ私たちの魂の目の前に私たちの魂生活を据えてみましょう。私たち自身の魂生活から何かを取り出してみましょう。私たちは何らかの体験をします。諸感覚あるいは人格を通じて私たちは体験に参与するわけですが、私たちはこの体験から、理念を、概念を、表象を形成します。私たちはこの表象を思考のなかに保持し、表象はしばらくしてから記憶（想起[Erinnerung]）として私たちの思考から意識的な魂生活のなかにまた浮かび上がってくることでしょう。皆さんは今日、そうですね、もしかしたら十年前の知覚体験に遡る何らかの記憶体験をお持ちだとします。さてここで、それが実際何であるか正確に捉えてください。皆さんは十年前に何かを体験しました。そうですね、皆さんは十年前にある人たちのパーティーに出かけ、その人たちひとりひとりの顔その他のついて表象を得ました。これらの人たちが皆さんに何を話しかけたか、彼らと一緒に皆さんが何をしたか、云々を体験しました。これらは全て、今日像のかたちで皆さんの前に現われてくるでしょう。それは、たぶん十年前の出来事について皆さんのなかにあった内的な魂の像なのです。そして科学に従ってのみならず、ある普遍的な感情、当然のことながら今日ではもう極めて弱々しく体験されるだけとはいえたしかに存在している普遍的な感情に従って、体験を再びもたらすこのような記憶表象は人間の頭に位置づけられます。頭には、体験の記憶として現存するものがある、と言えるのです。

さてここで人類進化をかなり大きく跳躍しつつ遡ってみましょう、そしてオリエント地方の住人たち、今日の歴史で描かれる中国人、インド人その他は本来その後裔なのですが、この人々を眺めてみましょう。

つまり私たちは実際に何千年も遡るわけです。この古い時代の人間に目を向けてみますと、その生活からして当時の人間は、私が外的生活のなかで経験し、行なったことについての記憶は私の頭のなかにある、とは言いませんでした。――このような内的体験を人間は有しておらず、人間にとってそういうものは存在しなかったのです。人間はその頭を満たす思考も理念も持っていませんでした。今日我々は諸々の理念、概念、表象を有している、歴史上いつの時代にも人間は常にこれらを有していた、と思うのは現代人の皮相さです。――そうではないのです。

霊的洞察をもってじゅうぶん過去に遡ると、私たちは理念、概念、表象を頭のなかにまったく有しておらず、つまり頭のでこのような抽象的な内容を体験することがなく、皆さんにはグロテスクに思われるかもしれませんが、頭全体を体験していた人間に行き当たります。これらの人間は私たちの諸感覚に見られる抽象性に関わることはありませんでした。頭のなかで理念を体験する、というようなことを彼らは知りませんでした、けれども自分自身の頭を体験すること、これを彼らは知っていました。そして、皆さんがある体験にともなう記憶像を持つとき、この記憶像を体験に結びつけるように、皆さんの記憶像と外部にあった体験との間にある関係が成立するように、ちょうどそのように彼らは彼らの頭の体験を地球に、全地球に結びつけていたのです。彼らはこう言いました、宇宙（世界）には地球がある、宇宙には私がいて、私には頭が付いている。そして私が両肩の上に担っているこの頭、これは地球についての宇宙的記憶なのだ。地球は以前からあったが、私の頭は後からだ。けれども私が頭というものを持っていること、これが記憶なのだ、地球存在についての宇宙的な記憶なのだ。地球存在はなおも常にある、しかし人間の頭の全構成、全形態であるもの、これは全地球と関連している。――このように、古代オリエント人は自身の頭のなかにこの地球惑星そのものの存在を感じていたのです。古代オリエント人は言いました：神々は、自然界をともなう地球、数々の山河をともなう地球を、普遍の宇宙存在から創り出し、生み出した。一方この私は、両肩の上に頭を担っている。この頭は地球そのものの忠実な写し（模像）である。内部に血液の流れるこの頭は、地表の河の流れや潮流の忠実な写しである。地上で山脈の形に現われるものは、私自身の頭の中の脳形のなかに繰り返される。私は両肩の上に、地球という惑星の私所有の写しを担っているのだ。――現代人が記憶像を体験に関係づけるのとまったく同じように、古代オリエント人は自らの頭全体を地球惑星に関係づけていました。よろしいですね、人間の内部観照（内視 Innenanschauung）というのかなり異なっていたのです。

続けましょう。古代オリエント人が地球の周囲を知覚し観照のなかに捉えるとき、この周囲、つまり地球を取り巻く大氣的なものは、太陽と太陽熱及び太陽光に浸透されたものとして彼に現われます、そしてある意味で、地球の大気圏のなか太陽が生きてる、と行うことができるのです。地球は、自分から送り出す作用を大気圏に委（ゆだ）ね、自らを太陽作用に明かすことで、自らを宇宙万有に開きます。そしてこういう古えの時代には誰もが、自分が今まさに生きている地球の地域を、とくに重要なもの、とくに本質的なものと感じていました。しかも、そうですね、古代オリエント人は、地表のどこかの部分を、下は大地、上は太陽に向けられた周囲[の気圏]までを、自分の部分と感じていました。大地のその他の部分、左右前後、というのは、もっと普遍的な状態ではばやけていました（図参照、左部分）。



Sonnenzugewandter Umkreis:太陽に向けられた周囲 / Erde:地球

つまりたとえば、インドの地に住むある古代インド人が、このインドの地を彼にとってとくに重要なものと感じたとき、地上のそれ以外の部分、東方、南方、西方は全部彼にとって消え去りました。ほかの土地で地球（地）が宇宙空間にどのように接しているかということは、さしたる関心事ではありませんでした。それに対して、まさに自分が立っている土地は彼にはとくに重要でした（図参照、左、赤）。その地域における地球（地）の宇宙にまで延びる生が彼にとってとくに重要となりました。この特別な地で自分はどうに呼吸すればよいのか、これを彼は自分にとって特に重要な体験と感じました。今日人間は、特定の土地でどのように呼吸するか、と問うことはあまりありません。――もちろん人間は、より好都合なものであれ不都合なものであれ諸々の呼吸条件の影響下にあるのですが、これは意識のなかに受け入れられることはないのです。古代オリエント人はもともと、どのように呼吸すればよいかというまさにそのやりかたにおいて深い体験を有していました、そしてこれに関連するもうひとつのこと、地球が宇宙空間へとどのように接していくか、ということにおいてもそうでした。

地球全体であったもの、これを人間は自分の頭の中に生きているものと感じていました。けれども、この頭は、固い骨の壁によって、上、両側面、後ろに向かっては閉じられています。しかし頭には下に、胸郭に向かって、ある種の出口、ある種の開口部があります（前図参照、右）。古い時代の人間たちにとって、いかに頭が相対的な自由さをもって胸郭に向かって開いているかを感じることは、とくに重要なことでした。人間は頭の内的な構成を地球的なものの写しと感じました。地球を自分の頭と関係づけなければならないとき、人間は、周囲、つまり地球の上方にあるものを、自分のなかで下の方に向かうものと関係づけなければなりません。下に向かって開くこと、心臓の方向に向けられること、人間はこれを、周囲に連なることとして、像として、宇宙に向かう地球の開け（あけ）[Oeffnung]として感じました。そして人間が次のように言ったとき、それは人間にとって圧倒的な体験でした。私の頭のなかに私は全地球を感じる。この頭は小さな地球なのだ。けれどもこの全地球は、心臓を担う私の胸郭の中へと開いている。そして、私の頭と私の胸郭、私の心臓との間で起こること、これは、私の生から宇宙へと、太陽に向かう周囲へと担われていくものの写しである。――さらに、古代の人がこう言ったとき、それは重要な根本的な体験でした、私の頭のなかに、私のなかに、まさにここに地球が生きている、私が下降すれば地球は太陽に向かう（矢印を参照）、私の心臓は太陽の写しなのだ、と。

ここで人間は、古（いにし）えの時代における私たちの感情生活に相当するものに行き着いたのです。私たちはまだ抽象的な感情生活を有していますが、私たちの心臓については直接何も知りません。解剖学、生理学によって私たちは心臓についてなにがしかを知っていると信じています。けれどもこうして知られたことは、私たちが紙製の心臓模型について知っていることとおよそ変わらないのです。私たちが世界の感情体験として有しているものをかつての人間は持っていませんでした。その変わりに心臓体験を有していました。そして私たちが感情を、私たちとともに生きている世界へと関係づけていくように、ある人を好んでいるのか、ある人に反感を持って向かうのか、あれこれの花を好み、あれこれの花を嫌うのかを私たちが感じるように、つまり私たちが私たちの感情を世界に、とは言え、堅固な宇宙から空気のような抽象へともぎ離された世界、とでも言ってよいでしょうか、そう言う世界へと関係づけるように、そのように、古代オリエント人はその心臓を宇宙へ、すなわち地球から周囲へ、太陽へと向かうものに関係づけたのです。

そして、今日私たちはたとえば、私たちが歩くとき、私たちは歩きたい、と言います。――私たちは、私たちの意志が四肢のなかに生きているのを知っています。古代オリエントの人間は、本質的に異なった体験をしていました。今日私たちが意志と呼んでいるものを、古代オリエントの人間は知りませんでした。私たちが思考、感情、意志と呼んでいるものが古代オリエントの民族にもあったと思うのは、偏見にすぎません。断じてそういうことはありませんでした。彼らが有していたのは、地球体験であった頭体験、太陽までの地球に隣接する周囲の体験であった胸体験ないし心臓体験だったのです。太陽は心臓体験にあたります。さらに彼らには、四肢へと伸び、広がっていくという体験、両脚と両足、両腕と両手の動きのなかに自身の人間性を感じるということがありました。彼らはその動きのなかにいました。四肢へと伸びてゆくこの伸長のなかに内在して、彼らは単に地球の周囲の写し（模像）のみを見出していたのではありません、彼らはそこに人間と星界との関係の写しを直接感じ取っていたのです（前掲図参照）。私の頭のなかに私は地球の写しを見る。頭のなかで心臓目指して胸へと下に開いて広がっていくもののなかに、私は地球の周囲の写しを見る。私の両手両腕、両足両脚の力とを感じるもののなかに、彼方の宇宙空間に生きてい

る星々と地球との関係を写し取るものがある。

ですから、あの古えの時代の人間が今日そう呼ばれるであろうところの意志する人間として得た体験を言い表わすとき、私は歩く、とは言いませんでした。――そういう言葉では言い表わせなかったのです。私は座る、とも言いませんでした。――古い言葉のこういう精妙な内容をよく吟味してみるなら、私は歩く、と私たちが表現する事実に対して、古代オリエント人では、火星が私に衝動を与える、火星が私のなかで活動している、と表現されることがいたるところで見つかるでしょう。――前進するということは、両脚のなかに火星衝動[Marsimpulse]を感じることで、何かをつかむ、という手にともなう感情は、金星が私のなかで作用する、と表現されました。――何かを指すこと、乱暴な人間がほかの人をけ飛ばすことで何かを示そうとすることであれ、何かを指し示すことはすべて、水星が人間のなかで作用する、と言うことによって表現されました。座るということは人間のなかの木星活動でした。そして、休息するにせよ、怠慢のためにせよ、横たわるということは、土星の衝動に身を任せる、と言うことによって表現されました。このように人々はその四肢のなかに外部はるかに広がる宇宙を感じていたわけです。地球から宇宙の彼方へと歩みを進めると、地球からその周囲へ、星領域へと至る、ということを知っていました。頭から下へ降るとき、人間は自分自身の本質のなかで同じことを行なうのです。人間は頭においては地球のなかにいます、胸郭と心臓においては[地球の]周囲に、四肢においては外部の星宇宙にいます。

ああ、哀れなわれわれ現代人は抽象思考を体験するのだ、と私は申し上げたいのですが、ある観点からすればこう言うことはまったく可能なのです。それがどれほどのものなのでしょうか。私たちは抽象思考をたいそう誇りにしていますが、自らのきわめて利口な抽象思考に夢中になるあまり自分の頭のことを忘れていきます。私たちの頭というものは、私たちの最も利口な思考よりもはるかに内容豊かなのです。脳のただひとつの回旋ですら――解剖学も生理学も脳の回旋の驚くべき秘密について多くを知ってはおりません――人間の誰それかの最も天才的な抽象の学よりもすばらしく圧倒的なものです。――そしてかつて地球上には、人間が単にみすばらしい思考だけではなく、自分の頭を意識していた時代、人間が頭を、そうですね、私が思いますに、四丘体[Vierhugelkoerper]や視床(視丘[Sehhuegel])を感じていた時代、それらを人間が地球の特定の物質的な山の成り立ちを模写しながら感じていた時代があったのです。当時人間は単に何らかの抽象的な学説から心臓を太陽に関係づけていたのではありません、そうではなく人間はこう感じていたのです、私の頭と私の胸、私の心臓の関係のように、地球は太陽と関係がある、と。

それは、人間がその生全体をもって宇宙万有と、宇宙(コスモス)と合体していた時代でした。しかもこの合体は人間の生全体のなかに現われていました。とは言え私たちは、頭の代わりにみすばらしい思考を据えることによってこそ、思想的な記憶というものを得る状態に移ったわけです。私たちは、私たちが生きてきたものについての思考像を、私たちの頭の抽象記憶として形成します。思考を有さず、まだ頭を感じていた人にはこれはできませんでした。思考を持たないひとは記憶を形成することはできなかったのです。ですから、人々がまだ自分の頭を意識していて、思考、つまり記憶も有していなかった太古オリエントのあの地域に入っていくと、私たちにまた必要となってくるものが、特殊な形で見出されます。人間は長い間それを必要としませんでした。それで、私たちにそれがまた必要となるというのは、実際のところ私たちの魂生活のちょっとしただらしなさというものです。私が話しましたあの時代、私が話しましたように頭を、胸を、心臓を、四肢を意識していた人たちが生きていた地域に入っていきますと、いたるところで、地面に何か小さな杭が打ち込まれていたり、何かしるしになるものが立てられていたり、何かの壁に何かしるしが付けられていたり、といったことが見られます。人間の生きるあらゆる領域、あらゆる生の場所は目印だらけでした、当時まだ思考記憶というものがなかったからです。そこに建てられた目印を手がかりに、できごとをふたたび体験したのです。人間はまさに頭において地球と合体していました。今日人間はただ頭のなかにメモ(覚え書き)をするだけです――そして私が申しましたように、私たちは頭のなかにメモをとるだけではすまず、メモ帳その他にもメモをとるということをまた始めましたが、これもやはり申し上げましたように、魂のだらしなさ、というものです。私たちはますますメモ帳を必要とするようになるでしょうけれども、けれどもかつては、思考、理念というものがそもそも存在していなかったために、頭のなかにメモする、ということはありませんでした、それであらゆるところが目印だらけだったわけです。そして人間のこの自然に即した資質から、記念碑建造ということが生まれたのです。

人類の進化史に登場してくるものはすべて、人間の性質の内部から条件付けられているのです。記念碑を建造することのほんとうの深い根拠を、現代の人間はまったく知らないのだ、ということを知り直して認め

なくてはならないでしょう。現代人は慣行として記念碑を建てます。けれども記念碑というのはあの古い目印の名残なのです、当時人間はまだ今日のような記憶を持っておらず、何かを体験した場所に目印をつらえ、そしてふたたびそこにやってくるたびに、どういしかたであれ地球と結びついているものすべてを甦らせることのできる頭のなかでその体験を甦らせる、というやりかたに頼らざるを得なかったのです。私たちは頭が体験したことを地球に委ねる――これが古えの時代の原理でした。

私が申し上げたいのは、古代オリエントにおいて、太古の時代、つまりすべて記憶にのっとったものが本来的に、地上に記憶のしるしを建てることと結びついていた、場所化された（ひとつの場所に結びつけられた、局所化された）記憶（想起）[lokalisierte Erinnerung]の時代を認めなくてはならないということです。記憶は内部にはなく、外にあり、いたるところに記念碑や石碑がありました。人々は地面に記憶の目印を据えました。これが場所化された記憶[Gedaechtnis]、局所化された記憶（想起）です。

人間の内部に見られる記憶ではなく、人間と地上の外界との関係のなかで繰り広げられ、形づくられるかつての記憶に何かを結びつける、というのは、今日でもなお、人間のスピリチュアルな進化のためには本来非常に良いことなのです。例えば、私はあれこれを憶えておくのではなく、あちこちに目印をしておこう、と言うのは良いことです。――あるいは、私はあることについて、目印にしたがって内なる魂的な感受性を発達させるだけにしよう、と。私は部屋の一隅に聖母像を掛けよう、そしてこの聖母像が私の魂の前に現われることで、まさに私の魂が聖母に向けられるなかで体験されうるものを体験したい、と。――と申しますのも、私たちが少しばかり東方に行くだけでも、私たちが居間で出会う聖母像といったような調度品に対する繊細な関係が見られるからです。ロシアにおいてのみではなく、東欧の中部においても至るところでそうなのです。基本的にこれらすべては場所化された記憶の時代の名残です。記憶は外部の場所に固着していたのです。

けれども、人間が場所に結びついた記憶からリズム化された記憶[rhythmisierete Erinnerung]へと移行する第二段階はまた異なっています。つまり第一に場所化された記憶、第二にリズム化された記憶となっていきます。人間は今や巧妙に意識された技巧からではなく、自身の内なる本質から、リズムのなかに生きようという欲求を発達させます。人間は何かを聞くたび、聞いたものをあるリズムが生じてくるように自分の中で再生しようという欲求を発達させました。牛――モー[Muh]――を体験すると、人間はそれを単にモーではなく、モーモー[Muhmuh]と呼びました、あるいはもっと古い時代になると私が思いますにはモーモーモー[Muhmuhmuh]と呼んだでしょう。つまり、知覚したものを、あるリズムが生じてくるように積み重ねていったのです。今日においてもこのことをたどることのできる語形成がいくつかあります、たとえばガウガウ[Gaugauch]あるいはカックウ[Kuckuck]、といったものです。あるいは、語形成が直接順次並んでいるというのではなくても、少なくとも子どもたちの場合にはこうした繰り返しの形成する欲求がまだあるということはおわかりになるでしょう。これはまだ、リズム化された記憶がはびこっていた時代の遺産なのです、単に体験されただけのものは記憶されず、リズム化すること、つまり繰り返し、リズムカルな反復のなかで体験されたもののみが記憶されていた時代の遺産です。ですから並んでいるもの同士の間には、少なくとも類似がなければなりません、マン（人間[Mann]）とマウス（ねずみ[Maus]）、シュトック（杖[Stock]）とシュタイン（石[Stein]）というように。体験したものをこのようにリズム化すること、これは、あらゆるところでリズム化しようとする高度な憧れの最後の名残なのです、と申しますのも、場所化された記憶に続くこの第二の時代においては、人間はリズム化されなかったものを記憶にとどめることはなかったからです。そしてもとをたどればこのリズム化された記憶から、古来の全詩学[Verskunst]、韻文による文芸一般が発達してきたのです。次いで第三段階となってようやく、私たちが今日まだ知っている時間的な記憶[zeitliche Erinnerung]というものが形成されました。私たちはもはや空間としての外界には記憶の手がかりを持たず、もはやリズムにも頼ることはできません、時間のなかに置かれたものを後から再度呼び起こすことができるだけです。私たちのこういうまったく抽象的な記憶は、記憶進化のなかの第三の段階なのです。

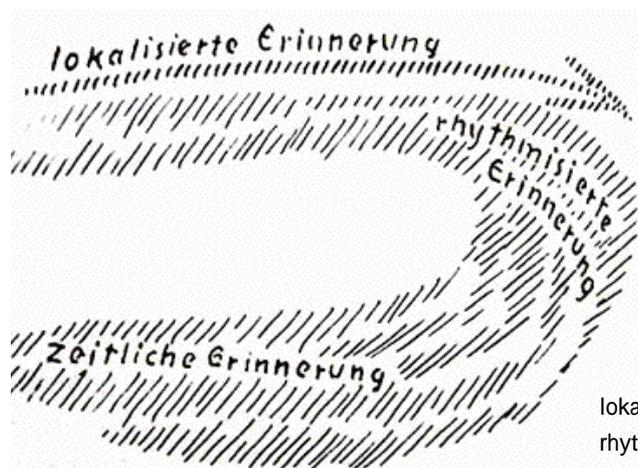
さて、人類進化のなかで、まさにリズム的記憶が時間記憶に移行する時点で正確に注目してください、現代人の痛ましい抽象性のなかで私たちに自明である時間記憶というものが最初に現われる時点で。時間記憶にあっては、私たちが呼び起こすものは像のなかに呼び起こされ、私たちはもはや、何かを再度生じさせたければ、なかばあるいは完全に無意識的な活動のなかでリズムカルに反復しながらそれを呼び起こさなければならない、という体験をすることもありません。リズム的記憶から時間的記憶へのこの移行

の時点を想定していただくと、古代オリエントがまさにギリシアへと植民してくるあの時点、歴史上、アジアからヨーロッパへと創設された植民地の成立として記述されているあの時点となるでしょう。アジアあるいはエジプトからやってきてギリシアの地に居を定めた英雄たちについてギリシア人たちが物語ることは、もともとはこういうことを意味していた物語だったはずで、つまり、かつて偉大な英雄たちがリズム的記憶が存在していた国を去り、リズム的記憶を時間的記憶、時間記憶へと移行させることのできる風土を探し求めていた、と。

これをもってギリシア精神（グリーヘントゥム）出現の時点が正確に示されます。と申しますのも、ギリシア精神の母なる地あるいは元なる地としてオリエントにあったものというのは、根本的にいってリズム記憶を発達させていた人々の地域だからです。そこではリズムが生きていました。そもそも古代オリエントというのは、人間がこれをリズムの地と思い浮かべるときにのみ正しく理解されるのです。そして楽園（パラダイス）というものが聖書がそうしているところまで元の場所に引き戻されるなら、つまり私たちが楽園をアジアに移すなら、もっとも純粋なリズムが宇宙を貫いて響き、リズム記憶であったものが人間のなかで再び燃え上がられ、リズムを体験する者としての人間がリズムを生み出す者として宇宙のなかに生きていた地域を私たちは思い浮かべたことでしょう。

みなさんがバガヴァッド・ギーターのなかに、かつてあの雄大なリズム体験であったものについてなおいくばくかを追感されるとき、ヴェーダ文学のなかにそれを追感されるとき、さらに西アジアの文芸と西アジアの文献の多くのものの中にもそれを追感されるとき、こういう現代の言葉を使うことが許されるなら、そこにはかつて全アジアを荘厳な内容で貫いていたリズムの余韻が生きています、地球の周囲の秘密として人間の胸郭のなかに、人間の心臓のなかに反映していたリズムの余韻が。そして私たちはもっと古い時代へと入っていきます、リズム的な記憶が場所化された記憶へと後退してゆく時代、人々が何かを体験したら目印を立ててそれを頼りとしていた時代です。人々がその場所にいないときは目印は用いられず、その場所にやってきたときに彼らは思い出さずにはいられませんでしたが、けれども人々が思い出したのではなく、目印が、地球が彼らに思い出させたのです。そもそも地球というものが、人間の頭をその写しとして持っているように、今や地上の目印も、場所化された記憶を有するこうした人々の頭の中に写し取られたものと呼び起こすわけです。人間はまさに地球とともに生きており、人間はまさに地球との結びつきのなかにその記憶を有します。福音書も、キリストが地面に何かを書き込むと伝えるある箇所でも、まだこのことを思い起こさせます（ 1 ）。

そして私たちは、場所化された記憶がリズム的記憶に移行する時点を確認することができます。それは、古アトランティスの沈没にともない、西から東へ、アジアに向かって、太古の後アトランティス民族たちが移動していく時点です。と申しますのも、ヨーロッパからアジアへと移動していくときに、今日大西洋の底にある古アトランティスからアジアに向かっての移動（図参照）がまずあり、それから文化がヨーロッパへと再び戻ってくるからです。アトランティス民族のアジアへの移動の際に場所化された記憶からリズム化された記憶への移行が起こり、リズム記憶はアジアの霊生活のなかで完成を見ました。次いで、ギリシアへの植民の際に、リズム的記憶から今日なお私たちが有しているような時間的記憶への移行が起こります。



lokalisierte Erinnerung: 場所化された記憶
rhythmisierte Erinnerung: リズム化された記憶
zeitliche Erinnerung: 時間的な記憶

アトランティスの大変動とギリシア文明の成立との間の全文明、歴史的にというよりは多分に伝説的、神話的に古えのアジアから私たちに響いてくるすべては、このように記憶が養成されてくるなかにあります。私たちは、とりわけ外的なものに目を向けることによって、つまり外的な文献を調べることによって、地上の人間の進化を学ぶのではありません、人間の内部に生きているものの進化発達に目を向けることによって、記憶力、記憶能力というような何かがいかに外から内へと進化してきたかに目を向けることによって学ぶのです。

こういう記憶力が今日の人間にとってどういう意味を持つのか、みなさんもご存じでしょう。みなさんも、人生の覚えておいてしかるべき部分を突然病的なしかたで消し去ってしまった人たちについてお聞きになったことがあると思います。私の親しくしていたある人は、次のようなことが起こったことによって死の前におそるべき運命を経験しました。ある日のこと彼は自宅を出て、駅である地点までの切符を買い、それから下車してまた切符を買いました。その間、切符を買うまでの彼の人生の記憶は一時的に彼の内部で消し去られていたのです。彼はすべてを賢明に行ない、知性はまったくもって健全でしたが、記憶は消えていました。その後彼は記憶を再び以前のものに結びつけることで、ベルリンの浮浪者収容施設にいる自分を見出しました、彼はそこに辿り着いていたのです。後に確かめられたことによると、彼はそうこうする間、この体験を以前の体験に結びつけることができないまま、ヨーロッパを半周の旅をしていたということです。彼が自分ではまったく分からずに、この浮浪者のためのベルリンの収容施設に着いたあとで、ようやく記憶が明るくなってきたのです。これは私たちが人生において出会う数多くの事例のひとつにすぎませんが、この例で、記憶の糸が私たちの誕生後のある時点までとぎれないままでなかったら、現代人の魂生活はいかに損なわれたものとなるかがわかります。

このことは、場所化された記憶を発達させていた人間の場合にはあてはまりません。彼らはそもそもこういう記憶の糸などというものを知りませんでした。けれども、自分の体験を思い出させてくれる記念物に土地のいたるところで囲まれていないとしたら、彼らが自分で建てた記念物にも、彼らの父たち、姉妹たち、兄弟たちその他によって建てられ、作りが彼ら自身のものによく似て見えるために彼らを親族のところに導いてくれる記念物にも囲まれていないとしたら、彼らは魂生活において不幸であることでしょうか、何か私たちが内部で自己[Selbst]を消し去ったときに私たちがなるような状態になるでしょうか。私たちが内的に私たちの健全な自己の条件と感じているものが、これらの人々にとっては外的なものだったのです。

人類におけるこの魂の変遷を私たちの魂の前に引き出してみることによってのみ、この魂の変遷が人類の歴史的進化において持つ意味へと至ることができます。こういうことを考察することによって、歴史ははじめて光を放ちます。それで私はまず最初に、ある特殊な例を手がかりに、人類の魂の歴史は記憶力に関しては何のようなものであるかということを示したいと思ったのです。さらに明日以降、このように人間の魂の学[Seelenkunde]から引き出される光で照らすことができはじめて、歴史上の出来事はその真の姿を表わすだろうということを見ていきたいと思います。

編集者註

- 1 福音書も[...]このことを思い起こさせます：ヨハネ8,6参照のこと。

昨日お話ししたことからおわかりいただけたと思いますが、地上の人類進化の歴史的経過について正しく観ることができるのは、異なる時代に存在していたまったく異なる魂状態に関わり合うことによるのみなのです。さらに昨日私は、本来の古オリエント、アジアの進化を限定し、アトランティス民族の後裔がアトランティスの大災害ののち西から東へ、徐々にヨーロッパへの道を見出し、アジアに定住するようになったあの時代を示唆しようとしてしました。アジアでこの民族を通じて起こることは、リズム的なものに慣れ親しんでいたこれらの人々の心の状態に強く影響されていました。最初はまだ、アトランティスにおいて完全なかたちで存在していた場所化された記憶の余韻、はっきりとした余韻が認められました。次いでオリエント進化の間に、リズム的記憶への移行が起こります。そしてみなさんに示しましたとおり、ギリシア進化とともにようやく、時間記憶への飛躍が始まります。

けれども、本来のアジア進化――と申しますのも、歴史が記述しているのはすでに退廃に至った状態 [Dekadenzzustände] だからなのですが――というものは、後の時代の人間とは全く別種の人間の進化であり、外的な歴史上の出来事といえども、あの古(いにし)えの時代にあっては、人間の心情のなかに生きていたものに左右される度合いが、後の時代よりもずっと大きかったのです。あの古えの時代に人間の心情のなかに生きていたものは、まさに全人のなかに [im ganzen Menschen] 生きていました。人間は今日のような分離された魂生活、思考生活というものを知りませんでした。人間の頭の内部の出来事との関連をもはやまったく感じられないようなこういう思考を知りませんでした。血液循環との関連をもはや知ることのないこういう抽象的な感情は知らず、頭の中の出来事として同時に内的に体験するような思考、呼吸リズム・血液のリズムなどのなかに体験するような感情のみを知っていました。人々は、分けられない統一されたものとしての全人を体験し感じていたのです。

けれどもこれらすべては、世界との関係、万有との、宇宙(コスモス)との、宇宙における霊的なもの及び物質的なものとの人間の関係が、後の時代とはまったく異なって体験されていた、ということに結びついています。今日の間は、地上において多かれ少なかれ、田舎で体験し、あるいは都市で体験します。人間は、彼が森として、河として、山として眺めるものに囲まれています、あるいは人間は、都市の外壁であるものに囲まれています。そして人間が宇宙的一超感覚的なものについて語るとき、それはいったいどこにあるでしょう。現代人はいわば、宇宙的一超感覚的なものを思い描かせてくれる領域をこれと言って示すすべを知らないのです。実際現代人にとってはどこであれ、とらえることも、つかむこともできないのです、これは魂的一霊的な意味で、とらえ、つかむことはできないということですが。あの古えのオリエント進化においてはそうではありませんでした、あの古オリエントの進化においてはそもそも、今日の私たちなら物理的環境とみなすであろう環境というものも、統一的に考えられた世界の一番下の部分にすぎませんでした。人間の周りには、三つの自然領域に含まれているもの、河や山その他に含まれているものがありました、これは同時に、霊と密に混じり合い、こう言ってよければ、霊が流れ込み、霊に織り込まれていました。そして人間はこう言ったのです、私は山と共に生きている、私は河とともに生きている、だが私は山の元素霊たち、川の元素霊たちとも、共に生きている。私は物質領域に生きているが、この物質界は霊的領域の体である。私の周りにはいたるところに、霊的世界が、最も下位の霊界がある、と。

私たちにとって地上的なものとなったこの領域は下にありました。人間はここで生きていました。けれども人間はまさに像(イメージ[Bild])のなかで(図参照) ちょうどこの領域(明色[hell])が上に向かって中断するところで、別のものが始まり(黄赤[gelb-rot])、この別のものへと下のものが移行していくこと、そしてさらにまた別のもの(青[blau])が、そして最後に、なお到達しうる最高のもの(オレンジ[orange])が続くということを思い描きました。そして、私たちの間で人智学的認識として慣れ親しまれているものに従ってこの領域を名づけようと思うなら――古代オリエントの生活においては別の名称がありました、それはともかく、私たちにおなじみの名称で呼びたいと思います――この上の部分はセラフィム、ケルビム、トローネの第一ヒエラルキア、続いてキュリオテテス、デュナーミス、エクスシアイの第二ヒエラルキア、そしてアルハイ、アルヒアンゲロイ、アンゲロイの第三ヒエラルキアとなります。



さて今度は人間の生きている場である第四の領域です、今日では私たちの認識に合わせて、対象としての自然、自然の経過のみが置かれています、この[当時の]人たちは、この領域で、自然の経過と自然の事物が水や土の元素霊たちに貫かれ織りなされているのを感じていました。そしてこれがアジアでした(図参照)。

アジアとは、まだ人間の生きた場であった最も下位の霊領域を意味していました。けれども、人間の日常的意識のためにある、今日の私たちの通常の見かたは、あの古えのオリエントの時代にはありませんでした。あの古オリエントの時代に、人々がどこかに霊なき物質を想像する可能性もあったなど考えるのはまったくばかげたことと言えるでしょう。あの古えの時代には、今日私たちが酸素、窒素について語っているようなことを考えることはまったくできなかったでしょう。酸素とは、すでに生命あるものを生き生きと励起させ、生命あるものの生を促進する作用をする霊的なものでした。窒素は空気中に酸素と混ざって含まれている、と今日私たちは考えていますが、窒素とは世界を貫いて織りなす霊的なものでした。窒素は生命ある有機的なものに作用することで、自らのうちに魂的なものを受け入れるようこの有機的なものを準備するのです。例えば酸素と窒素について人々が知っていたのはこれだけでした。そして人々はあらゆる自然の経過を霊的なものとの関連において知っていました、なぜなら、今日世間一般のひとがするような見かたはまったくなされなかったからです。こういう見かたのできた人々も若干いましたが、それは秘儀参加者、イニシエーションを受けた人たちにほかなりませんでした。それ以外の人々は、通常の日常的なものに対して、醒めてみる夢、ただし私たちにおいては異常な体験のなかにのみまだ存在しているような醒めてみる夢に非常によく似た意識状態を有していました。こういう夢とともに、人間は歩き回っていました。こういう夢とともに、人間は草原に、木々に、河の流れに、雲に近づきました、そしてこの夢状態で見たり聞いたりするような、そういうしかたですべてを見ていたのです。

今日の人間にとってはここで例えばどういふことが起こりうるか、ひとつ想像していただかなければなりません。人間が眠り込みます。突然この人の前に像[Bild]が、夢のなかで燃えるストーブの像が現われます。その人は火事だ!という声を聞きます。外ではどこかの火事を消すために消防自動車が走り去っていきます。いわゆる人間理性が無味乾燥に、そして通常の感覚的な見方がこの消防隊のふるまいから聞き取るものは、夢が人間に見せてくれるものから何とか離れていることでしょう。けれども、あの古代オリエントの人類が体験していたすべてはこのように夢のなかに流れ込んでいました。そこでは外部の自然領域のなかにあったものはすべて像に変化していました。そしてこの像のなかで人々は 水の、土の、空気の、火の元素霊たちを体験したのです。私たちのあのずだ袋眠り[Plumpsackschlaf]—文字通り袋のように横たわってまったく意識がなくなっているようなあの眠りのことを申し上げているのですが—、そういう眠りは当時の人間にはありませんでした。でもこういう眠りは現在よくありますね。けれども当時の人間にはそういう眠りはなく、彼らは睡眠中もぼんやりとした意識を有していました。彼らは一方において、今日私たちが言うように身体を休めるのですが、その間、彼らのうちで霊的なものが生き生きとした外界となって活動し始めました。そしてこの活動のなかに第三ヒエラルキアであるものが知覚されたのです。通常が目覚めての夢状態、すなわち当時の日常的な意識のなかでは、アジアが知覚されました。第三ヒエラルキアは眠りのなかで知覚されました。そして、この眠りのなかに、さらにぼんやりとした意識が沈ん

でることがありました、そのひとの体験を心情のなかに深く刻みつける意識です。つまり、このオリエント民族は、このようにすべてがイマジネーションや像へと変化していく日常的意識を有していたのです。このイマジネーションや像は、あのもっと古い時代、つまりたとえばアトランティス時代やレムリア時代、あるいは月紀のものほどリアルではありませんでしたが、ともかくも、このオリエント進化期にもまだ存在していました。

つまり当時の人々はこうした像を有していたのです。さらに彼らは、睡眠状態において、次のような言葉で表わすことのできたものを有していました、つまり、通常の地上的状态から眠りに落ちると、私たちはアンゲロイ、アルヒアンゲロイ、アルハイの領域に入っていく、それらの存在たちのもとで生きる、という言葉で。魂は生体から自らを解き放ち、高次ヒエラルキアの存在たちのもとで生きるのです。

同時にはっきりと理解されていたことは、アジアに生きている間、ひとはグノームたち、ウンディーネたち、ジルフェたち、サラマンダーたちと、すなわち土、水、空気、火の元素霊たちとともにあり、肉体を休める睡眠状態では、第三ヒエラルキアの存在たちを体験していて、同時に惑星的な存在とともに、地球に属する惑星系のなかに生きているものとともに体験していた、ということです。――けれども、第三ヒエラルキアが知覚されていた睡眠状態のなかに、さらにまったく異なる状態が入り込んでくることができました、眠っているひとがその時、まったく見知らぬ領域が私に近づいてくる、それはいくらか私を引き受け、私を地上的状态からいくらか引き離す、と感ずるような状態です。第三ヒエラルキアのなかに移されている間はまたこれが感じられることはないのですが、このもっと深い睡眠状態がやってくると、こう感じられるのです。もともと、この第三の種類の睡眠状態の間に起こることについては、はっきりとした意識があったことはありませんでした。けれども、人間の全存在を深く深く貫いて、第二ヒエラルキアから体験されたものが入り込んできたのです。人間はこれを目覚める際に心情のなかに感じ、こう言いました、私は、惑星状態を超えて生を持つ高次の霊たちから祝福された、と。――このときこの人間は、エクシアイ、キュリオテテス、デュナーミスを含むあのヒエラルキアについて語ったのです。――今私が皆さんにお話ししていることは、基本的に古代アジアではいわばふつうの意識状態でした。つまり、目覚めながらの眠り、眠りながらの覚醒と、第三ヒエラルキアが入り込んでくる睡眠、という二つの意識状態は、すでに最初から誰もが有していたものでした。そして若干の人々に、特別な生来の資質により、さらにこのより深い眠り、第二ヒエラルキアが人間の意識のなかに入り込んで活動するこの眠りが到来したのです。

そして秘儀に参入した人々、彼らはさらにまた別の意識状態を獲得しました。どういう意識状態でしょう？それはまさに驚くべきものです。当時の秘儀参入者たちはどういう意識状態を獲得したのか、という問いに答えるなら、――その答えは、今日皆さんが日中いつも有している意識状態です、ということになります。――皆さんは人生の二年目、三年目の頃に自然なしかたでこの意識状態を発達させます。古代オリエント人は、自然にこの状態に到達することは決してなく、意図的にこれを育成しなければなりません。古代オリエント人は、これを、目覚めながら夢見ている、夢見ながら目覚めている状態から育成しなければならなかったのです。この目覚めながら夢見、夢見ながら目覚めている状態で動き回っていたとき、古代オリエント人は、今日私たちが鋭い輪郭のものとして見るものを多かれ少なかれ象徴的にのみ与えてくれるだけの像をいたるところに見ていました、しかし他方で秘儀参入者たちは、今日人間が通常の意識で毎日見ているように事物を見る、というところまで到達していたのです。当時秘儀参入者たちは、この発達させたばかりの意識を通じて、今日小学校でどの生徒も学んでいるようなことを学ぶ、という状態に達していました。[今日との]違いは、内容が異なっていたということではありません。とは言え、今日のような抽象的な活字というようなものは当時にはありませんでした。文字は、宇宙の事柄や経過と もっと親密に関わり合っていた特性を示していました。けれどもともかくも、書くこと、読むことを学んだのはこの古えの時代では秘儀参入者たちだけでした、なぜなら、書くこと、読むことを学ぶことができるのは、今日自然なものである知性に即した意識状態においてのみだからです。

つまり、当時のありようそのままの人間のいるこういう古オリエント世界がどこかに再び出現し、今日のような魂のありかたのまま皆さんがこれらの人たちのなかに歩み入る、と想像なさるなら、皆さんは全員当時の人々にとっては秘儀参入者だということになるでしょう。違いは内容上のことではありません。皆さんは秘儀参入者でしょうが、皆さんが秘儀参入者だと知られた瞬間、皆さんは当時の人々から可能なかぎりのあらゆる手段によって土地から追い立てられるでしょう、なぜなら、当時の人々は、秘儀参入者

は今日の人間たちが知るように物事を知ることが許されないということをよく知っていたからです。たとえば――当時の見方をこういうイメージで特徴づけます――、当時の人々の見解にしたがえば、今日の時代の人間が書くように書くことができる、ということは許されませんでした。当時のある心情のなかに入り込んでみたとして、その心情（の持ち主）がこのような似非（えせ）秘儀参加者、すなわち現代の普通に利口な人間と対面するとしたら、あの時代のその人はこう言うことでしょう。この人は書くことができる、この人は何かを意味する記号を紙に書き付けている、しかも、このようなことをしながら、意識してさえない、こういうことを行ないながらも、こういう行為は神秘的な宇宙意識の委託を受けた状態でのみ許されるのだ、という意識が内部にないなどというのはどれほど悪辣きわまることかを。何かを意味する記号を紙に書き付けてよいのは、手の中で、指の中で神が働きかけている、神が魂のなかで作用している、だから魂がこの字母の形を通じて自らを現わすのだ、と意識しているときだけだ、そういう意識がないとは。――この、内容の違いではなく、人間による事態のとらえ方の問題ということ、これが、内容的には同じものを有している現代人と古えの時代の秘儀参加者とがまったく異なっている点です。今度新版の出した私の著作『神秘的事実としてのキリスト教』（1）を読み返していただければ、冒頭すぐに、古代の秘儀参加者の本質とは本来この点にあったことが示唆されていることがおわかりでしょう。そして本来、宇宙進化においては常にそうなのですが、後の時代に自然なしかたで人間のなかに成長するものは、それ以前の時代には秘儀参加によって獲得されなければならないのです。

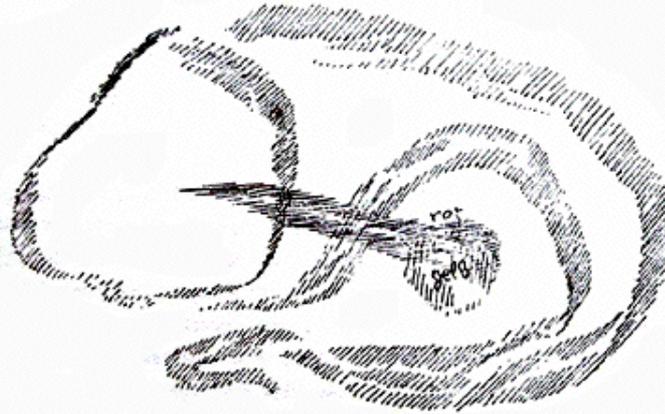
このようなことをお話しすることで、皆さんは、こうした先史時代の進化段階の古オリエントの心情のありようと、後になって文明のなかに登場してきた人間との根本的な相違を感じ取ってくださるでしょう。最も下位の天をアジアと呼んでその名のもとに自らの土地を、自らを取り巻く自然を理解していたのは別の人類です。最後の天がどこにあるか人々はよく知っていました。今日の見方と比較してごらん下さい、現在の人間が、自分を取り巻くものを最後の天とみなすことがどんなに少ないか。たいていの人々はこれを最後の天とみなすことはできません、この最後の天に先行する天も知らないからです。

さて、おわかりのように、この古えの時代には霊的なものが自然存在の内部深くまで入り込んでいます。とは言っても、私たちはこれらの人々のもとで、現代において少なくとも私たちの大多数にとって野蛮きわまりなく思えるであろうものに出会います。当時の人間にとって、誰かが今日ものを書くときのような気持ちで書くことができたとしたら、それは恐ろしく野蛮なことに思えるでしょう。それは彼らにとっておおよそ悪辣なことに思えるでしょう。しかし逆に現代の大多数の人間にとって、あのアジアの地で、西から東へと遠く移動していったある民族が、先住の別の民族をしばしば非常に残酷に支配し、土地を征服し、人々を奴隷にしたのはまったく当然であった、ということが非常に野蛮に思えるのは確かです。そもそもこれが広い範囲にわたって全アジアを通じてのオリエント史の内容なのです。これらの人々は今特徴をお話ししましたような、高度なスピリチュアルな観照をしていましたが、他方でその外的な歴史は、ほかの地を絶えず侵略し、その民を隷属させることで過ぎていきました。このことはたしかに現代の多くの人間にとって野蛮に思えます。そして今日では何らかの侵略戦争があるとき、その際、その戦争を弁護する人々でさえ、心にまったくやましいところがないわけではありません。侵略戦争の弁護からも、まったくやましいところがないわけではない、ということが察せられます。当時においては、ほかならぬ侵略戦争に対して、人々は心にいささかもやましいところはありませんでした、しかも、この侵略はそもそも神の意志によるものだ、と見なされていたのです。そして、のちになってから平和への憧憬としてアジアの大部分に広がったものは、本来、文明の後期の産物[Spaetprodukt]なのです。これに対してアジアにとっての文明の早期の産物[Fruehprodukt]とは、他の土地の絶えざる侵略と人々の奴隷化です。先史時代を過去に遡れば遡るほど、こういう侵略は数多く見出されます、クセルクセスや同様のひとたちがしたことも、こういう侵略の影にすぎません。

けれどもこの侵略原理の根底には、何か確固たるものがあります。当時の人々においては、皆さんに描写いたしましたあの意識状態によって、人間の他の人間に対する関係も世界に対する関係も、今日とはまったく異なった状態にあったのです。地球の諸民族の何らかの違いは、今日その原理的な意味を失っています。当時その違いは今日とはまったく異なるしかたで存在していました。そこで、ひとつ、しばしば現実にあったことを、例として私たちの魂の前に据えてみることにしましょう。

ここ左にヨーロッパ地域（下図）、右がアジア地域だと考えてください。侵略民族（赤）は、アジアの北方からもやってきたかもしれませんが、アジアのどこかの地域に広がり、人々を隷属させました（黄色の

Tafel 4



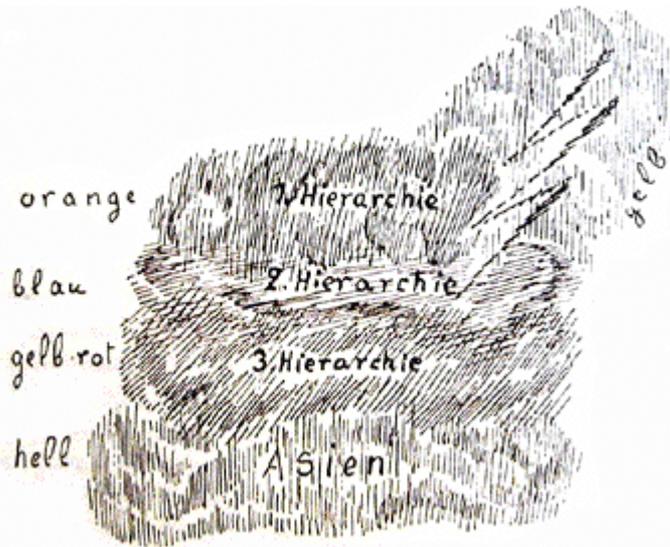
実際そこで何があったのでしょうか？実際の歴史進化の流れを定めたこの場合においては、侵略行為をする人々というのは常に、民族あるいは種族として、若かったのですー若く、青春の力にあふれていました。さて、現在の地球進化の人間の場合、若いとはどういうことでしょうか？現在の地球進化の人間の場合、若いということは、その生のどの瞬間にも死の力を自らのなかに担っているということ、人間の死にゆく経過を必要とする魂の力をまかなえるだけの量の死の力を担っている、ということです。私たちは私たちのなかに、芽吹き芽生える生命力を有していますが、この力は私たちを思慮深くさせず、私たちを気絶させ、意識を失わせます。解体する死の力もまた常に私たちのなかで作用していますが、死の力はいつも睡眠中に生命力によって克服されます。その結果私たちはまさに人生が終わるときのみ死の力のすべてをこの一度の死のなかに総括するわけですが、この死の力が絶えず私たちのなかになければなりません。この死の力が思慮深さを、意識をもたらすのです。これがまさに現代の人類の特徴です。あの若い種族、若い民族は、あまりに強い生命力に悩まされていました。そういう人間は絶えずこういう感情を持っていました、私は始終、私の血を肉体の壁に向かって押しつけ続けている。私は血を押しとどめることができない。私の意識は思慮深くなるうとはしない。私は若さのゆえに私の人間性のすべてを発達させることができない、と。

もちろん普通の人々はこんなことは言いませんでしたが、当時まだこの歴史的経過全体を導き方向づけていた秘儀に参入した人たちは、このように語りました。このようにこうした民族は、自らのうちに、あまりに多くの若さを、あまりに多くの生命力を有していて、思慮深さを与えてくれるものはあまりににわずかしか持っていませんでした。それから彼らは出かけて行って、もっと古くからの民族が住んでいた地域を侵略しました、古い民族はすでに退廃状態に達していたために、すでに何らかのしかたで死の力を自らのうちに受け入れていたのですが、出かけて行ってこの古い民族を支配したのです。侵略者たちと奴隷にされた人々との間に、血縁関係が生じる必要はありませんでした。侵略者たちと奴隷にされた人々との間で魂の内部で無意識に演じられたものは、若返らせる作用をしましたし、思慮深さに向かわせる作用もしました。今や奴隷を所有しその土地に城を築いた侵略者も、自分の意識への影響を必要としているだけでした。侵略者はこの奴隷たちに意識を向けさえすればよかったです、すると、気絶への憧れのうちに魂が和らげられ、とでも申しますか、そして意識が、思慮深さが生じてきたのです。

今日私たちが個人として達成しなければならないものが、当時は他の人々との関係のなかで達成されたのです。堂々と登場するけれども若く、完全な思慮深さには到達していない民族よりも多くの死の力を有していた民族、そういう民族がいわば自分の周囲に必要だったのです。若い民族は、ほかの民族を征服することによって、自分が人間として必要としているものへとよじ登っていったのです。このように、これらしばしばぞっとするような、今日の私たちには野蛮に思える古代オリエントの闘いは、人類進化全般の衝動にほかなりません。これはなくてはならないものでした。これらの今日の私たちには野蛮に思えるぞっとするような戦闘の数々がなかったとしたら、人類は地上で進化することはできなかったでしょう。

けれども秘儀に参入した人たちは、すでにもう今日の人間が見るような世界を見ていました、ただ、それに結びついていたのは異なった魂状態、異なった心情でした。彼らにとって、今日私たちが感覚によって知覚する際に外的事物を鋭い輪郭で体験するように、秘儀参入者たちが鋭い輪郭で体験したものは、彼

らにとってはいつも、神々からやってきたもの、人間の意識のために神々からやってきたものでした。



よろしいですか、そうですね、稲妻が起こったとしましょう。ありありと思い浮かべてみましょう。さて、今日の人間は、皆さんもよくご存知のとおり、まさしく稲妻を見るように稲妻を見ます（図参照、上）。古い時代の人間はそのようには見えませんでした。彼が見たのは生きた霊的存在たちが動いていくようす（黄）で、稲妻の鋭い輪郭は完全に消えていました。それは、宇宙空間の上あるいはそのなかを前へと押し進んでいく霊存在たちの行軍あるいは行進でした。稲妻そのものは彼には見えませんでした。彼が見たのは宇宙空間を漂っていく霊たちの隊列でした。秘儀参加者とは言えば、彼もまたほかの人々と同様にこの行軍の列を見ましたが、彼のなかで開発された観かたにとっては、隊列の像が徐々にぼやけそして消えていく一方で、稲妻が今日誰もが見ているような姿で現われてきたのです。今日誰もが見ているような自然は、古えの時代においては秘儀参加によって獲得されなければなりませんでした。けれどもひとはこのことをどのように感じていたのでしょうか？今日の人間が認識や真理を感じる時のような無頓着さでこれを感じるということはまったくありませんでした。このことはまったくもって道徳的一撃（落雷）とともに [mit einem moralischen Einschlag] 感じ取られていたのです。秘儀の入門者たちに起こったことを観るなら、私たちはこう言わなければなりません、彼らは、のちには自然の流れによって誰もが到達できる自然観に導き入れられた。厳しい内的試練と試しを通過したわずかの者のみがこの自然観に導かれた。けれども彼らはまったく自然に即してこのような感情も持っていた、ここに通常の意識の人間がいる、彼は空気中を行進してゆく元素霊たちの隊列を見ている、という感情を。しかしこのように観ることにより、通常の意識の人間には人間の自由意志が欠けていた。彼は神的—霊的世界にすっかり身を委ねていた。—と申しますのも、この目覚めながら夢見、夢見ながら目覚めている状態においては、意志は自由な意志として生きるのではなく、神的な意志として人間のなかに流れ込んでいたからです。そして、このイマジネーションから今や稲妻がやってくるのを観た秘儀参加者は、これをこう感じました、彼の導師を通じてこう語ることを学んだのです、私は、宇宙において神々なしでも動くことを許される人間でなくてはならない、神々はこの人間のために宇宙内容を不確定なものなかへと投げ出すのだが、そういう人間でなくてはならない、と。—イニシエーションを受けた人々にとって、彼らが鋭い輪郭のなかに観たものはいわば、神々によって投げ出された宇宙内容でした、秘儀参加者は神々から独立するためにそれに近づいていったのです。

これは何らかの調停する要因がなかったら耐えられない状況であったろう、ということがおわかりでしょう。けれども調停する要因はありました。と申しますのも、秘儀参加者は、神に見捨てられ、霊に見捨てられたアジアを体験することを学ぶ一方、他方においては、第二ヒエラルキアにまで達する意識よりもさらに深い意識状態を知ることになったからです。秘儀参加者は、神のいない世界に、セラフィム、ケルビム、トローネの世界を知ることになったのです。

アジア進化のある特定の時期、ほぼ中間期頃—時期についてはもっと厳密にお話しすべきでしょうが—、これらの人々、つまり秘儀参加者たちの意識状態というのは以下のようなものでした。彼らは地上

を歩き回り、地球領域についてほぼ現代人が見ているような光景を見ていたのですが、彼らは本来はこれを四肢のなかで感じていました。彼らは、自らの四肢が神の去った地球物質[Erdenmaterie]のなかで神々から解放されるのを感じました。しかしその代わりに、彼らはこの神々なき土地で、セラフィム、ケルビム、トローネという高位の神々に出会ったのです。秘儀参加者である者は、単に、森の像、木々の像であったあの灰緑色の霊存在たちのみならず、秘儀参加者である者は、霊なき森をも知るようになったのです、けれどもその代わりに調停するものがありました。つまり森のなかで、ほかならぬ第一ヒエラルキアに属するものたちに、セラフィム、ケルビム、トローネの領域からの何らかの存在に出会ったのです。

これらすべてが社会の成り立ちとして把握される、というのがまさしく古代オリエントの歴史的生成における本質的なことです。さらなる進化を促進する力は、若い種族と古い種族との間に調停を求める力で、その結果、若い種族は古い種族をもとで成熟することができます、支配された魂たちのもとで成熟することができるのです。このように遠くアジアを見晴らかしますと、私たちは至るところにこの、自分自身では思慮深くなることのできない若い種族が、侵略行為のなかに思慮深さを求めているようすを見出します。けれども私たちが眼差しをアジアからギリシアへと向けてみますと、状況はいくらか異なってくるのがわかります。ギリシアにおいても、ギリシア進化の最盛期にもう、年老いていくことをむろん理解していたけれども、この老いていくことを完全な霊性で浸透するということが理解できなかった民族がありました。私はしばしば聡明なギリシア人のあの特徴ある表明、影の国の王であるよりは上の世界で乞食であるほうがよい(2) という表明に注目を促さなければなりません。外なる死、及び人間の内にもある死と、ギリシア人はうまく折り合っていけません。けれども他方においてギリシア人はこの死を自分のなかに有していました。ですから、ギリシア人の場合、思慮深さは内に衝動として存在していたでしょうから、思慮深さへの憧れはなく、ギリシア人の場合死への不安があったのです。若いオリエントの民族はこういう死への不安を感じることはありませんでした、彼らは、民族として死を正しいしかたで体験できなかつたら、侵略に出かけていったからです。

けれども、ギリシア人が死とともに体験した内的な葛藤、これが内的な人類衝動となって、私たちにトロヤ戦争として伝えられているものに通じていきました。ギリシア人たちは、思慮深さを内部に獲得するために、ほかの民族のなかに死を捜し求める必要はありませんでしたが、まさに自分たちが死から感じ取っていたもののために、死についての内的な生き生きとした秘密を必要としていました。そしてこのことが、ギリシア人自身と、ギリシア人のアジアでの後裔である人々との、あの葛藤を招いたのです。トロヤ戦争は憂慮の戦争[Sorgenkrieg]、トロヤ戦争は不安の戦争[Angstkrieg]です。トロヤ戦争において、小アジアの祭司文化を代表する者たちと、内部に死を感じてはいるけれども死に対して何らなすべのないギリシア人たちが対峙し合っているのがおわかりですね。侵略に出かけていったオリエントのほかの民族は、死を欲していました、死を有していなかったからです。ギリシア人は死を有してはいましたが、死を扱うすべを知りませんでした。ギリシア人たちには、いくら死を扱っていくすべを知るために、まったく別の一撃が必要でした。アキレウス、アガメムノン、これらの人々はすべて、死を自らのうちに担っていましたが、死について何らなすすべがなかったのです。彼らはアジアを見晴らかしました。そして、アジアには逆の状態の民族が、真反対の魂状態の直接的な印象に悩まされている民族がいました。向こうにいたのは、ギリシア人のような強烈さで死を感じることはなく、根本において死を生に逆らう何かとを感じる人々です。

ホメロスは実際これを驚くべきしかたで表現しました。トロヤ人がギリシア人に対峙させられる至るところに――ヘクトールやアキレウスといった特徴ある人物をごらん下さい――、至るところにこの対立があります。そしてこの対立のなかに、アジアとヨーロッパの境界で起こることが表現されているのです。あの古えの時代においてアジアにはいわば死に対する生の過剰があり、死に憧れていました。ギリシア基盤のヨーロッパには、人間のなかになすすべを知られぬ死の過剰がありました。このようにヨーロッパとアジアは二重の観点から対立していたのです、つまり一方においてはリズム的記憶から時間的記憶への移行があり、他方には人体組織における死に対してのまったく異なった体験がありました。

今日は考察の最後にこの対立を皆さんに暗示することができただけですが、これをさらに明日詳しく考察していきましょう、人類進化にこのように深く食い入っているあの移行、アジアからヨーロッパへと移ってきて、これを理解することなしには、根本において人類の現代の進化におけるどんなことも理解することができないあの推移のことをよく知るために。

編集者註

1 『神秘的事実としてのキリスト教』：R・シュタイナー『神秘的事実としてのキリスト教と古代の秘儀』Das Christenthm als mystische Tatsache und die Mysterium des Altertums (GA8)

*邦訳 『神秘的事実としてのキリスト教と古代密儀』石井良訳 人智学出版社

2 影の国で王であるよりは... : ホメロス『オデュッセイア』第11歌 489-491 行、下界でのアキレウスの言葉。

ちょうど十三年前のこの日、私はシュトゥットガルトにおきまして、やはりクリスマスから新年にかけて連続講義を行ない(1)、今回と共通するところのあるテーマについてお話ししました。ただ、当時のテーマに沿って定められていた観点を、今回は少しばかり変えていかななくてはならないでしょう。

私たちの取り組みは、二回の導入的な講義で、歴史上の、とりわけ先史時代の進化が経過していくなかで、人類の心情および魂の状態が根本的に変化したということについての理解を私たちの魂にもたらすことでした。今回は、少なくともさしあたっては数千年以上前にさかのぼる必要はありません。皆さんもご存じのように、地球を襲ったいわゆるアトランティスの大災害以後、歴史的なものおよび有史以前のものにとって生じるきわめて重要な関係だと私たちが精神科学的に見なすものは、通常地球が氷結していく時代、初期氷河期、と呼ばれるものです。けれども当時はまだ、今日大西洋の海底を形成しているアトランティス大陸の沈没の最終段階が進行中でした。そしてこのアトランティスの大災害のち現代に至るまで、これについてはしばしば注意を促してまいりましたが、五つの大文化期が相次いで(2)起こりました、これらのうち最初のいくつかの文化期については、歴史的伝承はまったく残されていませんが。と申しますのも、あちらのオリエントにおいて文献に含まれているものは一々壮大なヴェーダや深遠なヴェーダ哲学においてさえ一々、常に原インド文化期、原ペルシア文化期として『神秘学概論』のなかでも話題にしましたあの文化期を示そうとするとき描写しなければならないものの余韻にすぎないからです。

さて、今日はその時代まで遡ることはせずに、ギリシア文化期の前の、私がしばしばカルデア・エジプト文化期と呼んできました時代に目を向けてみることにしましょう。私たちが注意を払わなければならないのは、アトランティスの大災害とギリシア時代の間のこの時代において、記憶の能力、人間の記憶力に関連して、そして人間の共同生活に関連して、大きな変化が起こった、ということです。私たちが今日持っているような記憶、この記憶により私たちは時間をさかのぼって何かを現実化することができるのですが、このような時間記憶[Zeitgedächtnis]というものは、この後アトランティス第三文化期にはまだ存在しておらず、当時あったのは、私が描写しましたようなリズム体験に結びついた記憶でした。そしてこの記憶は、アトランティス時代にとくに強く存在していた場所化された記憶から生じてきたものです、当時人間はそもそも現在意識しか持っておらず、人間が外界において見つけるか自分で建てるかした可能な限りのものを目印とし、この目印を通して人間は、単に自分自身の人格の過去のみならず、人類一般の過去とも関係を結んでいたのです。

けれども、単に直接地面にしつらえられたものだけが目印だったわけではありません、かなり古い時代においては天の星位、とりわけ諸惑星の星位もまた目印であり、この繰り返され、変化をともなって繰り返される星位から、人々は前の時代がどうであったかを知りました。ですからもともと古代人類の外的な場所化された記憶の育成にとっては、天と地が共に作用していたのです。

けれどもこの古代人類は、そのまったき人間としての組み立てにおいても、後の人類とは異なっており、この現代の人類とはなおさら異なっていました。現代の人類は、目覚めているとき自我とアストラル体を自分の物質体のなかにそれと気づかず担っていて、ほとんどの人はそもそも、その人自身よりずっと意味深い有機組織[Organisation]であるこの物質体が、エーテル体とならびアストラル体と自我組織を自らのうちに担っていることに気づいていないのです。皆さんはこの関係をご存じですね。けれども古代人類は、自身の存在という事実をまったく別様に感じていました。さて私たちが先の後(ポスト)アトランティス第三文化期、つまりエジプト・カルデア文化期へと遡っていきますと、私たちはそのような人類にまで戻っていきます。その頃人間は、目覚めているときさえ、まだ物質体的なものエーテル体的なもの外部で、高度に霊と魂として自らを体験していました。人間はこう区別することを知っていました、私はこれを、私の霊及び私の魂として一々私たちはこれを自我とアストラル体、と呼びますが一々有し、これは私の物質体および私のエーテル体と結びついている、と。人間はこういう二重の状態[Zweiheit]で世界を歩いていました。人間は自分の物質体とエーテル体を私(自我、イッチ[Ich])とは呼びませんでした、人間はまずもって自分の霊と魂のみを私(自我)と呼んだのです、霊的であり、下に向かって物質体およびエーテル体とある種のしかたで、しかし当人も関知している関係を結んでいたもののみを。そして人間は、この霊一魂的なもの、この自我とアストラル体のなかに、神的一霊的ヒエラルキアが押し入って来るのを感じてい

ました、ちょうど今日の人間が自然の物質が自分の物質体のなかに押し入ってくるのを感じるように。

人間はこの物質体のなかではこう感じますね、食物とともに、呼吸とともに、自分は外部の自然界の物質を取り入れているのがわかる、と。外界の物質ははじめは外にあって、それから人間の内部に入ります。これらの物質は人間に浸透し、人間の一部になる、という具合に作用するのです。当時人間は、自分の霊的一魂的なものが物質的一エーテル体的なものからの若干分離しているのを感じていましたが、次のようなことを知っていました、つまりアングロイ、アルヒアングロイから最高のヒエラルキアに至るまでの存在たちは、霊的にして物質（実質）的なもの[Geistig-Substantielles]であり、今や人間の霊的一魂的なものを通じて浸透しているこの霊的にして物質的なものが、こういう表現をしてよろしければ、人間の一部となる、ということを知っていたのです。ですから人間は、生のどの瞬間にも、私のなかには神々が生きている、とすることができたのです。――人間は自分の自我を、物質的、エーテル的実質によって下から組み立てられたものと解していたのではありません、そうではなく、人間は自我を、恩寵によって自分に贈られたもの、上から、ヒエラルキアの側からやってくるものとして把握していたのです。そして、人間は自分の物質的一エーテル的なものを、いわば荷物のように、乗り物のように、物質的世界で前進するために使う人生の車に似た何かのように把握していました。このことをふさわしいしかたで魂の目のなかにとらえなければ、人類進化の歴史上の経緯などはそもそも理解できません。

さて、私たちはさまざまな特徴ある例を手がかりに、人類進化のこの歴史上の経緯を追求していくことができるでしょう。今日はいわば私たちの前に一筋の糸を置いてみたいと思います、十三年前の当時にも、私は、これからお話ししようとするあの進化の最古の段階を示しているあの歴史的―伝説的文献（ 3 ）つまりギルガメッシュ叙事詩[Gilgamesch-Epos]を引合に出すことでこの糸に触れたわけです。このギルガメッシュ叙事詩はまさに一部が伝説的なのですが、申しましたように十三年前にお話ししましたこの経過を、今日はそれが霊的な観照から直接生じてくるようにお話ししていきたいと思います。

当時、西南アジア（近東）のある都市に――ギルガメッシュ叙事詩ではエレク[Erek]（ 4 ）と呼ばれています――昨日お話ししましたような、あの侵略者の性質の人々のひとりが見られました、昨日特徴づけされたあの魂状態と人間社会の状態からまさしく育ってきたあの性質の人々のひとりです。叙事詩はこれをギルガメッシュと呼んでいます。つまりここで私たちが関わり合うのは、今話題となっている時代において、ちょうど私が特徴づけたような性質を持っていた人物、それより前の時代からの古い人類の特性をまだ多く保っていた人物です。けれども当時このような人物は、自分がいわば二重の存在[Doppelheit]であること、つまり、神々が入り込んでくる霊的一魂的なものと、地球物質および宇宙物質つまり物質的実質とエーテル的実質が入り込んでくる物質的一エーテル的なものとの間で二面性を持っているということをはっきりと理解していました、そしてまた、このギルガメッシュ叙事詩が語る人物が生きていた時代において、まさに特徴的な人々、代表的な人々がすでにその後の人類進化への過渡期（移行期）にあったということもひとつの事実です。そしてこの移行というのは、比較的その直前の時代には霊的一魂的なものもとで上の方にあった自我意識[Ich-Bewusstsein]が、こういう表現をしてよろしいなら、体的―エーテル的なものなかに沈みこんでいった、ということなのですが、その結果、ギルガメッシュはまさしく、内部で神々を感じるののできる霊的一魂的なものに対して私[Ich]と言うのではなく、地上的一エーテル的なものに対して私と言い始めた人々のなかにあったのです。それがこの新たな魂状態でした。

私たちが話題にすることのできるこの魂状態のなかへと、霊的一魂的なものから自我が下降しました、体的―エーテル的なものなかに、自我は意識的自我として[als bewusstes Ich]下降したわけですが、この人物においては同時にまだあの古い習慣が、主としてリズムのなかで体験されたもののみを記憶のように体験するというあの習慣が残っていましたし、人間を思慮深さへと導くものを生み出すのは本来死の力だけなので、死の力に精通しなければならぬ、と感じていたあの感受性もありました。今、このギルガメッシュという人物において私たちが関わるのは、ある魂、つまり当時すでに数多くの受肉を経てきたけれども、私がたった今描写しましたような人間存在の新たな形式のなかに歩み入っていた魂、そういう魂なのですが、それによって、この人物は、物質的生存において、ある種の不確かさを自らのうちに担うことになったと申し上げたいのです。いわば侵略という習慣やリズム的記憶の根拠は、もはや地上にとって有効なものではなくなってきました。このように、この人物の体験はまったくもって過渡期の体験であったわけです。

そのため次のようなことが起こりました、この人物が古来の習慣から、ギルガメッシュ叙事詩でまさし

くエレクと呼ばれているあの都市を侵略によって占領したとき、この都市に紛争が生じたのです。最初この人物はこの都市で歓迎されず、よそ者と見なされました、都市で生じていた困難のすべてをひとりではうまく処理できなかったためもあるのでしょうか。ここで運命によってここに導かれたもうひとりの人物――ギルガメッシュ叙事詩ではエアバニ[Eabani]（ 5 ）と呼ばれています――が見出されます、私が『神秘学概論』に記述しました意味での、地球人類が一定期間過ごしたあの惑星生存状態から、比較的遅くなってから地上に降りてきた人物です。皆さんもよくご存じのとおり、地球進化の非常に早い時期に宇宙のさまざまな惑星へと地球から退いていた魂たちが、アトランティス時代に、あるものは早く、あるものは遅く、相次いで地球に降（くだ）ってきたのです。

ギルガメッシュにおいて私たちが関わっているのは、比較的早く地球にもどってきた個体で、私がお話ししている時代には多くの受肉を体験していました。やはりあの都市に導かれたもうひとりの人物において私たちが関わるのは、惑星生存状態に比較的長い間とどまり、遅くなってからやっとまた地球に赴いた、そのような個体です。十三年前に精神科学（霊学）の立場から歴史について行なわれた私の連続講義においては、このことはいくらか異なった観点から読まれなければなりませんでしたが、それでも。

さてこの人物は、ギルガメッシュと親密な友情を結び、それからふたりは共同して、小アジアの都市エレクに真に堅固な社会状態を作り出すことができました。このことが可能だったのはとりわけ次のようなことによります、つまり、この第二の人物が、あまり地球への受肉をしないことにより、地球外の宇宙での滞在で維持されてきたあの智のうち比較的多くを残していたからです。すでに前回シュトゥットガルトでも申しましたように、この人物には、一種の透視（霊視）[Hellsichtigkeit]、霊聴[Hellhoerigkeit]、明澄な（光明を得た）認識[Hell-Erkenntnis]がありました。そして、一方の人物のなかに存在していた古来の侵略習慣とリズム志向の記憶に由来するものと、もうひとりの人物の宇宙の秘密を見透す能力、この両者が合流することから、もう少し古い時代にはたいていそうであったように、西南アジアのあの都市に社会秩序が確立されていったのです。この都市には平和が訪れ、住民の幸福が訪れました、そして事実の経過全体を別の方向に導いたある特定の出来事が再び起こらなかつたら、まずすべては秩序を保っていたことでしょう。

あの都市には、ある種の秘儀が、ある女神の秘儀がありました、そしてこの秘儀は非常に多くの宇宙の秘密を保持していました。それは当時の意味において一種の総合的な秘儀[synthetische Mysterium]とでも申し上げたいものであり、すなわち、当時この秘儀のなかにアジアのきわめてさまざまな秘儀の啓示が集められていたのです。そしてさまざまな時代に、秘儀の内容は変更され、変容させられて、その地で保存され教えられました。叙事詩においてギルガメッシュという名を持つ人物は最初このことを理解できず、この秘儀の地を、矛盾だらけのことを教えている、と非難しました。それで、権威ある筋から――私がお話ししているこのふたりの人物は、何と云っても都市全体に秩序を与え管理した人物だったからですが――、つまり意味深い立場から秘儀が非難されたことによって、諸々の困難が生じ、これは結局、古代の秘儀において伺いを立てることのできたあの権威に、秘儀の祭司たちが伺いを立てる、という事態に通じていきました。古えの秘儀においては、高次ヒエラルキアの霊的存在たちに伺いを立てることが実際に可能だったのだということを、今日は皆さんも、いぶかしく思われることはないでしょう、昨日皆さんに申しましたように、古えのオリエントの時代にあつては、アジアは本来最も下位の天であり、この最も下位の天においても、人々は神的一霊的存在たちの実在を知り、これらの存在と交渉を持っていたからです。――とりわけ秘儀のなかでこういう交渉は続けられました。こうしてイシュタル秘儀の祭司職が、啓示（光明）[Erleuchtung]を得ようとするときふだん常に伺いを立てていたあの霊的な威力に伺いを立て、その結果、この霊的威力が都市に対して一種の刑罰を科する、という状況になったのです。

当時このことは、本来は高き霊的な力であるものが、エレクにおいて動物的な暴力として、不気味な動物的な力として働きかけた、と言うことで表現されました。――ありとあらゆるものが住民たちにやってきました、肉体的な病気、とりわけ魂の錯乱が。そして、ギルガメッシュの味方となった人物、叙事詩でエアバニと呼ばれている人物が、これらの困難のために死んでしまうという結果になるのですが、彼は、もうひとりの人物[ギルガメッシュ]の地上での使命を継続するために、死後も霊的にこの人物のそばにとどまりました。つまり私たちは、叙事詩においてギルガメッシュという名を担っているあの人物のその後の人生、その後の進化を、ふたりの特徴ある人物の間の共同はさらに続いた、というように理解しなくてはなりません、エアバニの側からギルガメッシュに靈感[Eingebungen]、啓示が与えられるということが起こった

のです。すなわち、ギルガメッシュは、彼自身の意志のみでひとり行為し続けたのではなく、ふたりの意志から、ふたりの意志の合流から行為し続けたのです。

このことをもって私は、この古えの時代にあってもまったくもってひとつの可能性であった何かを再度皆さんの前に据えたわけです。あの古えの時代、人間の心情は今日のそれのように一義的なものではありませんでした。したがって、感覚においても今日のような自由の体験というものは存在し得なかったのです。当時できたことは、一度も地上に受肉したことのない霊的存在が地上のある人物の意志を通じて働きかけるか、あるいは、ちょうどこのギルガメッシュの場合のように、すでに死を通過して死後の生[Postmorten-Leben]を送っている人物が地上の人物の意志を通じて話したり行為したりするか、いずれかでした。そしてギルガメッシュの場合もそうでした。こうしてふたりの意志の合流から生まれたものから、ギルガメッシュのなかに、彼が本来どのような歴史的状態にあるのか、ということについてのかなりはっきりとした認識が浮かび上がってきました。ギルガメッシュは、まさにインスピレーションをもたらしてくれる霊の影響によって、自我が死すべき物質体とエーテル体のなかに下降してきたということを知り始め、そしてギルガメッシュにとって、不死の問題が強く集中的な役割を演ずるようになってきました。ギルガメッシュの憧れのすべては、どうにかしてこの不死の問題の背後に至ろうとすることに向けられました。当時地上での不死について語るべきことを保管していた秘儀は、当初ギルガメッシュには明かされませんでした。これらの秘儀は、まだ伝統と、この伝統から現存する生きた認識の大部分を有していましたが、一方地上では古アトランティス時代の太古の叡智が有力でした。

けれども、かつて霊的存在として地上を歩き回っていたこの太古の叡智の担い手たちは、とっくに退き、月の宇宙のコロニーを建設していました。月は今日の科学が描写するような硬い凍結した物体だなどと考えるのは、子どもじみています。月は、とりわけ地球人類の最初の偉大な教師たちであったあの霊的存在たちの宇宙での滞在地でした、かつて地球人類に太古の叡智をもたらし、物理的天体としての月が地球を去って太陽系内に自らの位置を獲得した直後に、この月へと引き揚げていったあの存在たちの滞在地です。今日、イメージーション的認識を通じて、真に月を知る能力を持つひとは、この宇宙のコロニーのなかに、かつて地上で人類の太古の叡智の教師であったあの霊的存在たちをも知るようになります。これらの存在たちがかつて教えていたこと、そして人が自らこの太古の叡智とある種の関わりを持つことを可能にするあの衝動をも、この秘儀に保管されていました。とは言え、たとえば西南アジアのこの秘儀と、叙事詩の中でギルガメッシュと呼ばれている人物との間では、正しい結びつきはありませんでした。けれども、死後の状態でギルガメッシュとひとつになった友人の超感覚的な影響を通じて、ギルガメッシュのうちに内的な衝動が目覚めました、魂の不死性について何らかのことを経験できるようになる道を、世界のなかに探し求めようとする衝動です。

中世には、霊的世界について何かを体験したいと思えば、人間の内面に沈潜する、ということが一般的になってきました。近代においては、さらに内的な経過が普通になっている、と言ってよろしいでしょう。けれども、今お話ししているあの古えの時代においては、地球は、今日の地質学が記述しているようなあんな岩石の塊ではなく、生き生きと魂を吹き込まれた霊的な存在物なのだ、ということを入々はまったく正確に知っていました。――そして、ちょうど小さな生き物が人間の上を走り回るとき、その生き物が鼻や額の上、髪の毛を伝わって走り、この旅によって知識を獲得することで人間のことを知ることができるのと同じように、当時においては、人間は地球（大地）の上をあちこち歩き回ることで、さまざまな場所ですさまざまな土地の成り立ちから地球（大地）を知り、それを通じて霊的世界を洞察していたのです。人間は霊的世界を洞察していました、秘儀への接近が許されているにせよいなにせよ、洞察していたのです。ですから、ピュタゴラスや同様の人たちについて、彼らが認識の獲得のために大いに遍歴した、と語られる（ 6 ）のは、実際どうでもよいことではありません。この地球のさまざまな場所の、霊的―魂的―物質的地球のさまざまな形成のされ方から観察されうるものを、地球の成り立ちの多様性のままに受け取るために、人間は地を巡回したのです。今日、人間はアフリカやオーストラリアに旅行することができますが、見物の対象となる表面的なものを除いては、家にいて体験することに比べてさほど変わった体験をするわけではありません。と申しますのは、地球のさまざまな場所の間に存在する根本的な差異に対して、人間の感受性はまさに死に絶えてしまったからです。今お話ししている時代においては、この感受性は死んでおりませんでした。ですから、地上の遍歴を通じて不死性の問題の解明のための何かを得ようとする衝動は、ギルガメッシュにとって非常に重要な意味があったのです。

こうしてギルガメッシュは、遍歴の第一歩を踏み出しました。彼にとってこの遍歴は何と言っても、とてもとても重要な結果をもたらしました。彼は、近ごろよく話題になるとは言えその社会状況は当然ながら非常に変わってしまったある地域、つまりいわゆるブルゲンラント（*1）地方で、ある古い秘儀に出会いました、ブルゲンラントをツィスライターニエンの一部とするかハンガリーの一部とするか[最近]議論されましたが、つまりこのブルゲンラントの地で古い秘儀に出会ったのです。この秘儀の大祭司は、ギルガメッシュ叙事詩ではクシストロス[Xisuthros]（7、*2）と呼ばれています。ギルガメッシュは、ある古い秘儀に出会いました、古アトランティスの秘儀を純粹に受け継ぐ形式の秘儀です、ただし後の時代にはしばしばそうであったであろうように、もちろん変化してはいましたが。

そして実際のところ、この秘儀の地においては、ギルガメッシュの認識力を判定し、評価するすべが知られていました。人々は彼を出迎えようとした。当時秘儀参入の弟子たちの多くに課せられていた試練がギルガメッシュに課せられました。その試練とは、七日七晩を通じて完全に目覚めた状態で、ある種の黙想[Exerzition]をすることでした。ギルガメッシュにはそれができませんでした。そこで彼はこのような試練の代用品[Surrogat]に屈しました。この代用品というのは、服用して実際にある種の光明（啓示[Erleuchtung]）が得られる特定の物質がギルガメッシュのために調合された、ということです、例外を認める一定の条件が保証されないときはこの地方ではいつもそうだったのですが、たとえこれらの物質がある意味で疑わしいものであっても、調合されたのです（*3）。こうして今やギルガメッシュにある種の光明がもたらされました、宇宙連関への、宇宙の霊的な構造へのある種の洞察が。こうして、ギルガメッシュがこの遍歴を終えて再び帰還したとき、彼のうちには実際に高次の霊的洞察があったのです。

ギルガメッシュはほぼドナウ河に沿って遍歴し、ドナウ沿いを南方に向かって故郷へ、選ばれた故郷の地へと戻ってきました。けれども、彼は私が描写しました別のしかたではなく、あのいくらか問題の多いしかたでアトランティス後の秘儀への参入を授けられたために、この故郷の地に到着する前に最初の試みに屈服してしまいました、彼は都市に起こったことについて聞き、自分にふりかかった出来事についての恐ろしい怒りの発作に屈したのです。彼は都市に到着する前に、そのことを聞きました。恐ろしい怒りが沸き起こり、この湧き起こる怒りのために光明（啓示）はほとんど完全に曇らされ、彼は光明なしに到着する結果となりました。

とは言っても、そしてこれがこの人物の特別なところなのですが、死んだ友人との関係を保ち、この死んだ友人とともに、この死んだ友人の霊とともに、霊的世界をのぞき見る可能性、あるいは少なくとも霊的世界についての情報を得る可能性は、ひき続き失われませんでした。それでもやはり、イニシエーションを通じて霊的世界を直接見通す、あるいは死後の状態にある人物について情報を得る、というのは、別のことなのです。けれども、不死の本質への洞察のいくばくかがギルガメッシュのなかには残されている、と言うことはできます。――さて今度は、死後になし遂げられることから読みとってみます、死後に成し遂げられることというのは、当ても今も、次の受肉の意識のなかに働きかけます、まだそれほど強く働きかけるのではないのですが、意識のなかに働きかけるのです！生命のなか、内的な構成のなかへの働きかけはなるほど非常に強いのですが、意識のなかへの働きかけは強くはありません。

よろしいですね、私は皆さんに、ふたりの人物を描写しました、後アトランティス第三文化期のほぼ中頃の人間の霊状態をともに表わしていて、その生き方から、人間が二つの部分から成り立っていることが強く見て取れるような、まったくもってまだそのような生き方をしていた人物たちです。と申しますのも、一方のギルガメッシュは、自我意識が下降するという、自我が物質的-エーテル的なもののなかに沈み込むということを成し遂げた最初の人々のひとりであったにしても、この二元性をよく意識していたからです。もうひとりの人物は、地上に受肉したことがあまりなかったために、明澄な認識[Hell-Erkenntnis]を有していて、それによって物質、素材、などというものは存在せず、すべては霊的なものであって、いわゆる物質的なものというのは、霊的なものの別の形（フォルム）にすぎない、という洞察を得ていました。

皆さんはこのように思い描くことができるでしょう、人間の本質がこのように構成されていたのなら、今日考えたり感じたりしていることすべてを、[当時の]人間が考えたり感じたりすることができなかったのは当然だ、と。人間の思考や感情の全体がまったく違っていたのです。そしてこのような人物たちに近づくことのできたものは、今日私たちが学校で学ぶようなことではなく、今日の小学校や高等学校で学ぶことに似た何かでもありません、霊的、文化的、文明的に人間たちに近づいてきたものは、実に秘儀から流

れ出してきて、何らかのしかたであらゆる通路をとおってきわめて広汎に人々に告げられたのです。けれども本来それを育成するのは、秘儀の祭司である賢人たちでした。

さて私がお話ししている人物ふたりに独特なことは、私がたった今描写しましたあの受肉において、独自の魂の性質により、秘儀に、つまりまさに彼らの周囲にあった秘儀と親密になることができなかつた、ということです。ギルガメッシュ叙事詩でエアバニと呼ばれている者は、地球外に滞在していたことによって秘儀に親しんでいました。ギルガメッシュと呼ばれている者は、あるアトランティス後の秘儀において、一種のイニシエーションを体験しましたが、これは彼にその果実を半分しかもたらさませんでした。けれどもこのすべてが作用を及ぼして、これらの人物自身の存在のなかで、彼らを人間の先史時代に似せる何かが感じられるようになりました。ふたりはこう話し合ったことでしょうか、我々はいったいどうなったのか？地球進化にともない我々はふたりでいったい何をしてきたのか？我々はまさに地球進化を通じてこうなったのだ。我々はその時いったい何をしたのか？

ギルガメッシュが悩み、格闘した不死の問題、これは当時まさに人間の魂のなかにあったものを通じて、地上の先史時代の進化について欠くことのできない洞察と関わっていました。そして、地球の最古の進化段階、月状態、太陽状態云々の時期にすでにそこにいた人間の魂が、その後地上的になったものが自分に近づいてくるのをどのように見たか、ということについての洞察が同時になかったら、そもそも当時の感覚では、魂の不死について、考えたり感じたりすることはできませんでした。人は、自分は地球の一部である、自分自身を認識するためには自分と地球との関係を見通さなければならない、と感じていました。

さて、あらゆるアジアの秘儀のなかで培われていた秘密というのは、何をあいても宇宙的な秘儀であり、宇宙との関係のなかでの地球進化の経過をその教義と叡智の内容としていました。それはこれらの秘儀にまったく生き生きとしたしかたで現われ、人間のなかで理念となることができました、地球がどのように進化してきたか、そして物質の波とうねり、地球の諸力のなかで人間がいかにこれらの物質すべてとともに、太陽紀、月紀、地球紀を通じて進化してきたか、この概観が人間の前にもたらされました。この光景がきわめて生き生きと見せられたのです。

このような光景を人間に見せていた秘儀のひとつは、非常に後の時代まで維持されていました。それがエフェソス（エペソ）の秘儀の地（ 8 ）、エフェソスのアルテミスの秘儀の地です。このエフェソスの秘儀の地、それは、その中心に女神アルテミスの像を持つものでした。今日誰かがエフェソスのアルテミス女神の模造品を眺めても、乳房を露出した女性の姿というグロテスクな印象を持つだけでしょう、こういうことが古えの時代にはどのように体験されていたのか見当もつかないからです。古えの時代にはまさにこういうものを体験するということが重要だったのです。秘儀の入門者たちは準備を終え、それから秘儀の本来の中心に導かれました。このアルテミス像がこのエフェソスの秘儀の中心でした。入門者たちがこの中心に導かれると、彼らはこの像とひとつになりました。この像の前に立つと、人間はその皮膚の内部の何かである、という意識が中断されました。人間は、自分はこの像である、という意識を持ちました。彼はこの像と一体化したのです。そして、このようにエフェソスの神々と意識のなかで一体化することは、こういう作用を及ぼしました、つまり、人はもはや周囲の地球領域、石や木々や河や雲などを見ることはなく、アルテミスの像のなかに入り込んでいると感じることで、自分とエーテル界との関係を内的に観照するに至ったのです。人は自分が星々の世界と、星々の世界の出来事とひとつであると感じました。人は人間の皮膚の内部の地上的な物質性を感じず、自らの宇宙的存在を感じました。エーテル的なもののなかに自らを感じたのです。

そしてこのエーテル的なものななかで自らを感じることを通じて、人間の以前の地上生活の状態、そしてその地上生活そのものが、その人に明かされました。今日私たちは、地球を、すでに話しましたように、一種の岩の塊のように見えています、その表面の大部分を水に覆われ、酸素や窒素その他の物質が含まれ、とりわけ人間が呼吸のために必要としたりなどする物質が含まれる大気圏に囲まれた岩塊のように。そして今日、人間が通常で自然認識なるもののなかで思弁を繰り返す、観察し、観察を解釈するというのを始めると――、何か正しいことが明らかになる、というわけです！今日の状態に先行するもっとも古い時代におけるものというのは、霊視[Geistesschau]によってしか獲得することができません。けれども地球と人類の太古の状態（ 9 ）に関するこのような霊視が、エフェソスの秘儀の入門者たちには明かされました、彼らが神々の像と一体化したときにです。そのとき彼らは、今日地球の周囲の大気圏であるものがかつては現在のようではなく、今日の大気圏があるこの地球の周囲に存在していたものは、きわめて精妙な、

流動性－揮発性の[fluessig-fluechtig]卵白（蛋白質[Eiweiss]）、卵白実質[Eiweisssubstanz]であったことを知りました。すなわち、地上に生きていたすべてが生じるために、すべてのものはこの地球の上を流動し揮発していた卵白の力を必要としていましたし、その中で生きていたのです。そしてさらに観照されたことは、この卵白の中にある意味ですすでにあったもの、細かく分散された、けれどもいたるところで結晶化しようとする（図参照、赤系）傾向を持つもの、つまり細かく分散された状態で珪酸としてそこにあったものが、地球の一種の感覚器官であったことです、宇宙のいたるところからの影響を、イメージーションを自らのうちに受け入れる感覚器官です。このように、地上的－卵白状大気の珪酸の内容物のなかには、いたるところに、真の、外的なありようのイメージーションがあったのです。



このイメージーションは、巨大な植物有機体の形（フォルム）をとって、そしてこの、自らを地上的のものにとってのイメージーションと考えたものから、植物のようなものが発達してきました、のちに大気状の物質を受け入れることによって植物となるのですが、最初はまだ地球の周囲の揮発性－流動性のフォルムをとっています。それはあとになってから地面へと下降してきて、のちの植物類となりました。さらに珪酸含有物の外部には、このアルプミン大気の中へと、細かく分散された石灰的なもの[Kalkiges]が埋め込まれていました。石灰的なものからは、この卵白の凝固の影響を受けながら、動物的なものが発生しました。そして人間は、これら全ての内部に自らを感じていました。人間は、自分が太古の時代には全地球とひとつであったと感じました。人間は、イメージーションを通じて地球で植物として形成されたものなかに生きていました、人間は、地上的なものなかに動物として形成されたものなかに生きていました、これは私が今しがた描写しましたとおりです。根本においてどの人間も自分を、地球全体に広がっている、地球とひとつである、と感じていたのです。ですから人間たちは、私が『神秘的事実としてのキリスト教』という著書で、人間の理念能力に関連してプラトンの教義のために叙述しましたように、互いのなかに組合わさっていたのです。

さてよろしいですか、私がシュトゥットガルトで語り、今もまた話題にしておりますあのふたりの人物は、運命の導きで、エフェソスの秘儀に所属する者としてふたたび受肉し、私がこれまで概略をお話ししてきたことを親しく魂のなかに受け入れました。それによって彼らの魂的なものが、ある種のしかたで内的に強められました。以前は体験のなかで、とは言え大部分は無意識の体験でしたが、体験のなかでのみ接近したものを、ふたりは今や、秘儀を通じて受け取ったのです。つまりこのことにより、このふたりの人物における人間的なものの体験は、二つの別々の受肉に分けられたのです。これにより、彼らは自らのうちに、上方の霊的世界と人間が関連しているという強い意識を持つようになり、同時に、地上的なものすべてに対する強い、集中的な感受性を持つようになりました。

と申しますのも、よろしいですか、ある人にとって二つのものがいつも入り混じって流れているとしたら、二つを切り離すことができなければ、その二つは混じり溶け合ってきます。けれども二つが明確に分けられれば、双方をもう一方に照らして判断することができるのです。それでこのふたりの人物も、生かから導かれた上方の世界の霊的なものを、以前の受肉の余韻として内部に生きていたものを、一面において判断することができました。さて今や、秘儀において、女神アルテミスの影響下にあるエフェソスの秘儀

において、こういうことがふたりに伝授されたわけですが、今やふたりは、地上の事物が人間の外にどのように生じたか、人間以外のものが、人間をも包含していた原初の物質的なものから、地上でどのように徐々に形成されてきたかを、判断することができるようになりました。これにより、ほかならぬこのふたりの人物の人生、一部ヘラクレイトス（ 10）がエフェソスで生きていた最後の時代に当たりますが、その後の時代に当たるこのふたりの人物の人生は、とりわけ内的に豊かな、宇宙の秘密に貫かれて内的に強く光を放つものになったのです。そしてさらに、人間はその魂生活において、単に水平的に地上に拡がっているものだけではなく、人間がその本質を上へ伸ばすときには、上に向かって拡がるものとも関連しているのだ、という強固な意識も生じました。そしてこのふたりの人物、古エジプトーカルデア時代にふたりして働きかけ、その後、ヘラクレイトスの時代と言えるかもしれませんがそれよりは少し後の時代に、エフェソスの秘儀と関わりつつ生きたふたりの人物の内的な魂形成[Seelenkonfiguration]、この共同作用は、継続し続けることができました。お互いが育て上げた魂形成、これは死を通過し、霊的世界を通過して行って、それからある地上生を準備しました、それが原因で根本的に多くのことが問題とならざるを得なかった、むろんさまざまなかたで問題とならざるを得なかった地上生です。そして、これらふたりの人物が地球進化の歴史的経過に自らを置かざるを得なかったまさにこのやりかたを手がかりに、カルマ的に後の地上生のなかへも継続してゆく、魂の前の時代に由来する体験によって、どのようにものごとが準備されるかを見ることができず、後の時代にまったく変容して組み込まれ、地球人類進化のなかに現われるものごとが。

私がこの例を引きますのは、これらふたりの人物がその後歴史上の進化のきわめて重要な時代に登場するからなのですが、この時代については前にシュトゥットガルトでも示唆いたしました。もともとこういうことすべてを十三年前にもう特定の観点から述べているのです。エジプトーカルデア時代に、はるかに拡がった宇宙生を通過したこれらふたりの人物、その後この宇宙生を内的に深め、その結果ある意味で魂を強めたこれらの人物は、のちの受肉において、アリストテレス（ 11）とアレクサンダー大王（ 12）として再び生きました。そしてアリストテレスとアレクサンダー大王の魂のなかのこの根底に注目してはじめて、私がすでにシュトゥットガルトであの歴史の章で述べましたように、ギリシア精神の退嬰のなかローマ・ロマン民族による統治の出発点にあったこれらの人物のなかで、当時あれほど問題のあるしかたで作用し、その後これらの人物を通じて作用したものがそもそもどこにあるのか、理解することができるのです。これについてはさらに明日、次の講義で引き続きお話ししたいと思います。

編集者註（*はyuccaによる補足、主に『ギルガメシュ叙事詩』（矢島文夫訳 ちくま学芸文庫）解説を参考にしました）

1 シュトゥットガルトにおきまして[...]：『隠れた歴史 世界史の人物と出来事についてのカルマ的関連の秘教的考察』（六回の講義、1910/11 GA126）*邦訳：『世界史の秘密』（西川隆範訳 水声社）

2 五つの大文化期が相次いで：R・シュタイナー『神秘学概論』（GA13）参照のこと。さらに多数の講義録の叙述、たとえば『西洋の光の中の東洋。ルツィファーの子どもたちとキリストの兄弟』（九回の講義、ミュンヘン1909 GA113）参照。*邦訳：『西洋の光の中の東洋』（西川隆範訳 創林社）

3 あの歴史的一伝説的文献：ギルガメシュ叙事詩は、クジュンドウシュクの丘、アシュルバニパル王宮の遺跡で発見された楔形文字粘土板十二枚に刻まれている。それは、断片がいくつか発見されたさらに古いシュメール語原典に遡る。

*シュメール民族は、前第五ー四千年紀ごろからメソポタミア地方に居住し、高度な文明を発達させたとされるが、セム民族に征服されていった。セム人の王朝の首都はアッカドと呼ばれたので、この王朝はアッカド王朝と呼ばれ、その後北方のアッシリアと南方のバビロニアに分かれる。彼らは文化的にはるかに進んでいた先住民族のシュメール人から、きわめて多くの文明的諸要素を取り入れた。

シュメールの都ウルクの遺跡には、シュメールの王名を記した表が残っているが、大洪水後のウルク第一王朝第五番目の王としてギルガメシュの名が出てくる。ギルガメシュが登場するシュメール神話（英雄詩）は五つほど知られているが、そのうちの四つがのちにアッカド語（アッシリア語、バビロニア語）で『ギルガメシュ叙事詩』にまとめられたとされる。

4 エレク：この都市は、聖書で（モーゼ1、10-10）エレクと呼ばれている。楔形文字テキストではウルクと呼ばれる。

*彼の王国の初めは、バベル、エルク、アッカドで、それらはみなシナルの地にあった（創世記10-10）
「彼」はメソポタミアの神話的英雄ニムロデ。「シナル」はシュメール。

*「ギルガメッシュ」という名は19世紀末まで正しい読み方が分からず、このニムロデと同一視あるいは同系統のものとみなされて、『ニムロデ叙事詩』と題されたこともあった。

5 エアバニ：楔形文字テキストではエンキドゥ[Enkidu]あるいはエンギドゥ[Engidu]と呼ばれる。

6 ピュタゴラスや[...]と語られる：ディオゲネス・ラエルティウス『名高い哲学者たち』第二巻8冊ピュタゴラス、プラトンその他も参照。

7 クシストロス：バビロンのベルの神官ベロツソスは、紀元前280年頃、ギリシア語でバビロニアールデアの歴史を著わし、それがバビロンの寺院書庫から発見されたのだが、ベロツソスはこのように、ジウストラというシュメール語の名をギリシア語化している。この名は楔形文字テキストではウトナピシュテムとなっている。

8 エフェソスの秘儀の地：これについてシュタイナーは1923年12月2日の講義で詳しく述べている：『秘儀の形成』（十四回の講義、ドルナハ 1923 GA232）参照。

*邦訳：『秘儀の歴史』（西川隆範訳 国書刊行会）

9 地球と人類の太古の状態：シュタイナー『神秘学概論』、さらに『真実の観点から見た進化』（五回の講義、ベルリン 1911 GA132）、及び『秘儀の形成』所収の1923年12月1日の講義参照のこと。

10 ヘラクレイトス：エフェソスのヘラクレイトス、前535-475、ソクラテス以前の哲学者。シュタイナー『神秘的な事実としてのキリスト教と古代密儀』（索引）参照。

*『神秘的な事実としてのキリスト教と古代密儀』（石井良訳 人智学出版社）付録の「編者の注」よりこの人物については、ディオゲネス・ラエルティオス『著名哲学者の生活と意見』のなかの古代エビグラムに、その特徴が伝えられている。

ヘラクレイトスの書物の頁は、性急にはめくらぬこと
登らねばならない小径は、急で、けわしい。

暗黒が支配し、不可解な闇が支配しているが、

奥義を受けた者が、汝を導くならば、この書物は日光より明るく汝を照らすであろう

11 アリストテレス：前384-322 シュタイナー『哲学の謎』（GA18）参照。

12 アレクサンダー大王：前356-323、前336年よりマケドニア王、バビロンで死亡。

訳註

*1 ブルゲンラント：オーストリアの東端、ハンガリーとの境にある州。

*2 クシストロス：7のように、ギルガメッシュ叙事詩のシュメール語版の主人公ジウストラ（アッシリア語ではウトナピシュテム）がギリシア風になまったものとされています。旧約の大洪水の記述との関連も指摘されますが、ベロツソスの『バビロニア史』の第一巻に見られる大洪水の話の主人公がクシストロスです。

*3 この部分に関連する『ギルガメッシュ叙事詩』のテキストからの概略：

不死の生命を求めてやってきたギルガメッシュに対し、ウトナピシュテムは「起きて六日と六晩眠らずにいてみよ」と言うが、ギルガメッシュはたちまち眠ってしまう。彼が眠っている間、ウトナピシュテムの妻は毎日パンを焼き、七個目のパンが炭火の上にあるとき、ウトナピシュテムはギルガメッシュに触れて彼を起こす。[...]落胆して帰途につこうとするギルガメッシュに、ウトナピシュテムは水底の草を教える。その草を得れば生命を得るといふ。ギルガメッシュは水に飛び込んで草を取る。そしてこれを故郷に持ち帰ろうとするが、途中、泉で水浴をしているときに、草は近寄ってきた蛇に奪われてしまう。

『ギルガメッシュ叙事詩』（矢島文夫訳 ちくま学芸文庫 129頁以下）第十一の書板（アッシリア語テキスト）参照

なお、シュタイナー『世界史の秘密』によると；

ギルガメッシュはこの試練を受けるのですが、すぐに寝入ってしまいます。そこで、ウトナピシュテムの妻は七つの神秘的なパンを焼きます。このパンを食べることによって、六日と七夜かけて獲得されるものが得られるのです。この生命の霊薬を持って、ギルガメッシュは道を進み、若返りの泉に浴し、チグリス川とユーフラテス川のほとりの故国の岸に戻ってきました。ここで、一匹の蛇が生命の霊薬の力を奪って

しまいます。こうしてギルガメッシュは、生命の靈薬なしに国に帰ることになるのです。けれども、不死にいたる意識をギルガメッシュは持ち、少なくとも、エンキドゥの靈を見られるという憧れに満ちていました。エンキドゥの靈は現われ、ギルガメッシュと話をします。このことから、どのようにエジプトーカルデア文化期において靈的世界とのつながりが意識されるようになったのかを、私たちは知るようになります。ギルガメッシュとエンキドゥの間の、この関係が大事なのです。

『世界史の秘密』(西川隆範訳 水声社) 16頁

昨日の私の課題は、世界史上の進化がどのように起こるかということを手がかりに示すことでした。精神科学の方向で前進したいと思うなら、ひとは出来事の結果を人間のなかに反映させる、という以外には表現しようがありません。と申しますのも、よく考えてみてください、この現代だけが、この連続講義においても引き続きお話ししていく理由から、人間が自らをその他の世界から切り離された個別の存在と感ずるようになる性格づけられているのですから。以前のあらゆる時代、そして将来のすべての時代において、これははっきり強調されねばならないことですが、人間は自らを全宇宙の一部、全宇宙に組み込まれたものと感ずましたし、感ずるようになるでしょう。たびたび申しましたように、人間の一本の指はそれ自体で完結した存在ではあり得ず、人間に所属するものであるように、また他方、指が人間から切り離されればもはや指ではなく崩壊してしまってまったく別ものとなり、生体組織とは別の法則に従うようになるように、ちょうどそのように人間は、地上生という形[Form]であれ、死と新たな誕生との間の生という形であれ、何らかの形で全宇宙と関り合っている存在にすぎないのです。――けれどもこのことについての意識は、まさしく前の時代には存在し、これからまた存在するようになるでしょう、この意識が曇り、暗くなっているのは今日の時代だけです、なぜなら、私たちがこれから聞くことですが、人間が自由の体験をまったく完全に自らのうちに育成することができるように、この意識が曇り、暗くなることが人間には必要だったからです。そして時代を遡れば遡るほどますます、いかに人間が自分は宇宙の一部であるという意識を持っていたかがわかります。

さて私は皆さんに、ふたりの人物、ひとりとは名高い叙事詩においてギルガメッシュと呼ばれ、もうひとりとは同じ叙事詩でエアバニと呼ばれた人物を描写し、それから私は、このふたりの人物が古代カルデアーエジプト時代に当時の人に可能であった生き方で生き、その後エフェソスの秘儀を通じてさらなる深まり(深化)を経験したようすを皆さんに示しました。さらに昨日注意を向けていただいたことは、この同じ人間存在たちがその後アリストテレスとアレクサンダーとして世界史の進化のなかに置かれた、ということでした。けれども私が描き出しましたことがこれらの人物たちに起こったあの時代において、地球進化の歩み全般がどのようなものであったかを私たちが完全に理解することができるためには、このような魂たちがこの三つの相前後する時代において自らのうちに受け入れたものを、さらに厳密に見通さなければなりません。

私は皆さんに、ギルガメッシュという名前の背後に隠れている人物が西への道を辿り、アトランティス後の一種の西方のイニシエーションをとにかくも通過することに注意を促しましたね。さて今度は、さらに後のものを理解するために、このような後になってのイニシエーションがどのようなものであったかについて思い浮かべてみましょう。むろん私たちは、こういうイニシエーションを、古えのアトランティスのイニシエーションの余韻が長い間残っていた土地に探さなくてはなりません。そして、ここドルナハにいらっしゃる友人の皆さんにはすでに前回お話ししましたが、ヒベルニアの秘儀(1)がそれでした。けれどもここで考察することを私たちが完全に理解できるためには、お話ししたことのいくつかを繰り返さなければなりません。

アイルランドの秘儀であるヒベルニアの秘儀はほんとうに長い間存続してきました。それはキリスト教成立の時代にもなお続いていて、アトランティス民族の古えの叡智の教えをある面からもっとも忠実に保存してきた秘儀なのです。さてまずはこれから皆さんに、アトランティス後の時代にアイルランドの秘儀に参入を許された誰かの持った体験について、ひとつの像(イメージ)をさし上げたいと思います。この秘儀、このイニシエーションを受けることになった人は、当時、厳しく準備を課せられなければなりません。古代においてはそもそも秘儀参入への準備には途方もない過酷さがつきものものですが、その人は実際、内的にその魂状態、人間としての状態をまるごと造り替えられなければならなかったのです。それから、ヒベルニアの秘儀においてはその人はまず、人間を取り巻く存在のなかの虚偽のもの、人間がまず感覚知覚にのっとって自分の存在の拠り所としているあらゆる事物のなかの虚偽のものに対して、強い内的体験をしつつ注意を向ける、という準備を課せられました。そしてその人はさらに、彼が真実を、ほんとうの真実を希求するときにはたちふさがる困難と障害のすべてに注意を向けさせられます。その人は、感覚世界において私たちを取り巻くすべては根本的に幻影[illusion]なのだ、感覚は幻影的なものを与え、真

実は感覚の背後に隠れてしまう、つまり真の存在はそもそも感覚知覚を通じては人間には到達できないのだ、と気づかされたのです。

さて皆さんはこうおっしゃるでしょう、人智学に長く親しんでそれはいつももう十分確信していることだ、と。それはもうよくわかっている、と皆さんはおっしゃるでしょう。けれども、感覚的外界の幻影的性格について、そもそも現在の意識のなかで人間が持ちうるあの知識などは、当時ヒベルニアの秘儀参入のために準備を課された人々によって経験された内的な震撼、内的な悲劇に比べれば、まったく無に等しいのです。

と申しますのも、このように、全てはマヤだ、全ては幻影だ、と理論的に言うとき、そもそもそれは非常に軽く考えられているのですから。けれどもヒベルニアの秘儀入門者たちの準備は彼らが自分にこう言うところまで押し進められたのです、幻影を突き抜け実際の真実の存在にいたる可能性は人間にはないのだ、と。

入門者たちは、いわば最初は絶望の念から、内的、魂的に幻影に自足する、という準備を課されました。この幻影の本性はあまりに強圧的、圧倒的なので、ひとはそもそも幻影を越えてゆくことなどできないのだ、という絶望に満ちた気分のなかに彼らは入り込んでいきました。そしてこの入門者たちの生のなかに繰り返しこういう気分がありました、さてこれからひとは幻影のさなかに在り続けなければならない――。けれどもそれは、これからひとは足もとの基盤を失わざるを得ない、幻影に確実な足場は求められないからだ、ということでした。――そう、古えの秘儀における準備の過酷さ、これに関しては、今日のひとは根本においてほとんど想像もつかないでしょう。人々は内的な進化を真に促すものの前ではまさにひるんでしまうのです。

そして存在と存在の幻影的な性格についてと同様に、入門者たちにとっては真理を求める努力についても事情は同じでした。そして彼らは、人間が真理に至ろうとするのを、情緒のなかで、人間を打ち負かす暗い感覚と感情のなかで妨げるものを、認識の明澄な光を曇らすものすべてを知ったのです。こうして彼らはここでも、次のように言う時点に至りました、私たちが真理のなかに生きることができないのなら、私たちは錯誤のなか、虚偽のなかで生きざるを得ない！と。――これはまさしく、人生のある時期に、存在と真理に絶望するに至るなら、その人の人間性は自己自身からもぎ離される、ということなのです。

これらすべては、人間がとどのつまりに目標として到達すべきものの反対のものを体験することを通じて、この目標に正しく深い人間的感情を向けることができるために必要だったのです。と申しますのも、錯誤と幻影とともに生きる、ということがどういうことか知るに至らなかった人は、存在と真実を尊重するということなどわからないからです。それでヒベルニアの秘儀の入門者たちは、真実と存在を尊重することを学ばされねばならなかったのです。

そして入門者たちがこのようなことを為し遂げ、彼らがいわば最終的に行き着かなければならないもの対極を為し遂げると、彼らは――ここで起こったことを私は、当時実際にヒベルニアの秘儀においてリアルだったように具象的に描写しなければなりません――種の聖域に導かれました、そこには二つの立像、途方もなく強い暗示の威力を持つ立像がありました。そしてこれらの巨大な立像の一方は、内部が空っぽでした、この空洞を囲む外側の面、つまりこの立像が作られている全実質はきわめて弾力のある素材で、そのためどこを押してもこの像を内部へと押すことができましたが、押すのをやめた瞬間、形はもとどおりになりました。立像全体は、頭の部分を主として形成されていて、この像に向き合ったひとは、力が頭から巨大な体躯のほかの部分へと放射している、と感じるほどでした。と申しますのも、空洞の内部空間は見えず、知覚することもできず、押してみてもはじめてひとは内部空間に気づいたからです。頭以外の体躯全体が頭の力によって放射されている、この立像にあっては頭がすべてを為している、と感じられたのです。

散文的な生をおくっている今日の人間がこの立像の前に連れて行かれたとしても、抽象的なもの以外の何かを感じるなどほとんどないだろう、ということを知るのに私はやぶさかではありません。なるほど、内部全体で、その精神（霊）、その魂、その血、その神経をもって幻影の力と錯誤の力を体験したということは、そしてこのような巨大な姿の暗示的な猛威を体験するというのは、まさに何か別のことなのです。

この立像は男性の特徴を持っていました。この像のかたわらに、女性的特徴を持つもう一方の像が立っていました。こちらは空洞ではありませんでした。このもう一方の像は、弾力的ではないけれど可塑的な

素材から造られていました。この像を押すと――人は今度も像を押すように促されたのです――、形は壊れ、像の体には穴が開きました。

けれども、一方の立像のところで、弾力があるために形態がすべてもとにもどってしまうということを経験し、もう一方の立像のところで、押すことによって像を変形させることを経験したあとで、入門者は、私がこれからお話ししていくいくつかの別のことにしたがって、部屋を去り、それから、可塑的ではあっても弾力のない、女性的特徴を持つ立像に彼がつけた欠損と変形がすっかりもとにもどされてから、またこの部屋に連れ戻されました。入門者は、立像が無傷の状態にもどされてから連れ戻されたのです。こうして入門者が成し遂げたすべての準備を通して――私は事態を概略的に描写できるだけなのですが――、入門者は、女性的特徴を備えた立像のところで、霊、魂、体による全人間性においてある内的体験を得ました。この内的体験はすでにもう以前から準備されてきたことではありますが、立像そのものの暗示的な作用によりきわめて完全に起こったのです。入門者は自らのうちに、内的な硬直の感情を、内的に凍りつき硬直する感情をおぼえました。そしてこの硬直の感情は、彼のうちに、自分の魂がイメージーションで満たされるのを見るという作用を及ぼしました、そしてこれらのイメージーションは地球の冬の像、地球の冬を示す像でした。つまり入門者は、内部から霊のうちに冬的なものを観ることに導かれたのです。

もう一方の立像、男性的な立像の方ですが、こちらの像の場合はこのような状態でした、つまり入門者は、ふつう彼の全身のなかにある生命のすべてが血液のなかに流れ込むときのような、つまり血液が力に浸透されて皮膚を圧迫するときのような何かを感じたのです。つまり入門者は、一方の立像の前では、凍り付いた骸骨になると思わざるを得なかったのですが、他方、もう一方の立像の前では、自分の内部の全生命が暑熱を帯びて崩壊し、自分が張りつめた皮膚のなかで生きている、と思わざるを得ませんでした。そしてこの、表面を圧迫された全人間の体験が、入門者を、次のように自らに言う洞察へと導いたのです、お前は感じ取る、お前は感じ、お前は体験する、とりわけ宇宙において太陽だけがお前に作用するときになっているであろう状態のお前を、と。――そして入門者はこのようにして、宇宙的な太陽作用をその区分において知るようになりました。彼は人間の太陽への関係を知るようになったのです。さらに彼は、宇宙のほかの方角からのほかの諸力がこれらの作用を修正する、というこの理由によってのみ、実際のところ自分は、今太陽の像の暗示的な作用のもとに出現した状態の自分ではない、ということも知るようになりました。このようにして入門者は、宇宙に慣れ親しむことを学びました。そして入門者が月の像の暗示的な作用を感受したとき、つまり内的に硬化して凍りついたものを、冬の風景を体験したとき――太陽像の場合彼は夏の風景を自分自身から生み出されたように霊の中で体験したのですが――、そのとき人間は、もし月の作用のみしかなかったら人間はどのようになるだろう、ということを感じたのです。

よろしいですか、現代において人はそもそも宇宙（世界）について何を知っているでしょう。人は宇宙について、チコリは青い、薔薇は赤い、空は青い、云々といったことを知っています。けれどもこれは震撼するような印象というわけではありませんね。これらは、人間の周囲にあるきわめて日常的なことを告げているにすぎません。人間は、宇宙万有の秘密に通ずるようになりたいと思うなら、全本質をもってより集中的に感覚器官にならなければなりません。それで、まさに太陽像の暗示的な作用を通じて、彼の本質はその全血液循環に集中させられたのです。人間はこれらの暗示的な作用を自らのうちで体験することで、自らを太陽存在として知るようになりました。さらに人間は、女性的な像の暗示的な作用を体験することで、自らを月存在として知るようになりました。さらにそれから、人間はその内的な諸体験から、今日人間が自分の目の体験によって薔薇がどのように作用するかを、自分の耳の体験によって嬰ト音がどう作用するか、などを言うことができるように、そのように太陽と月がどのように人間に作用するかを言うことができたのです。

このように、この秘儀への入門者たちはアトランティス後の時代においてなお、人間が宇宙に組み込まれていることを体験していたのです。これは彼らにとって直接的な経験でした。

さて、私が皆さんにお話ししたのは、キリスト教の発展の第一世紀まで、ヒベルニアの秘儀において、太陽体験および月体験に導かれた入門者たちによって宇宙的な体験としてまったく壮大に体験されていたことの短いスケッチにすぎません。

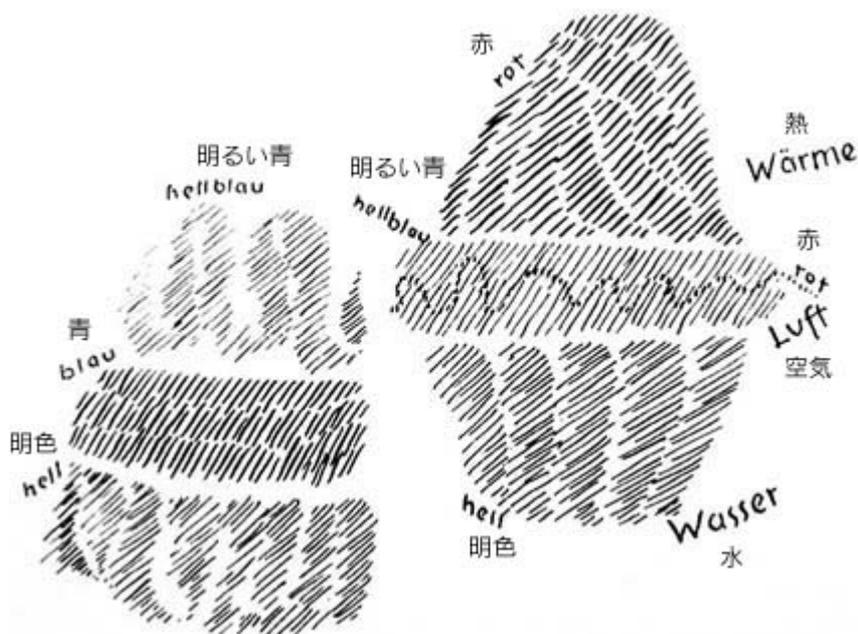
エフェソス（エペソ）の秘儀、小アジアのエフェソスの秘儀において入門者たちが成し遂げた体験はまったく別のものでした。このエフェソスの秘儀においては、のちにヨハネ福音書の冒頭の言葉、《太初に言葉[Wort]があった。そして言葉は神のもとにあった、そして言葉は神であった》に模範としての表現を見出

したものが、とくに集中的に、全人間をもって体験されました。

エフェソスでは入門者は二体の像の前に連れて行かれるのではなく、エフェソスのアルテミスとしてよく知られている像の前に連れて行かれました。そして、生命に満ち、いたるところで生命に満ち溢れているこの像と同一化することで、入門者は宇宙エーテルに深く親しみました。内なる体験と感情の全てをもって彼は単なる地上生から引き揚げられ、宇宙エーテルの体験へと引き揚げられたのです。そして彼には以下のことが明らかになりました。彼にまず伝えられたのは、人間の言葉とはそもそも何かということでした。そしてこの人間の言葉、つまり人間の写し[Abbild]、世界ロゴスにして宇宙的なロゴスの、人間における写しであるロゴス、これを手がかりに、いかに宇宙言語[Weltenwort] が創造的に宇宙（コスモス）を貫いて生き生きと動き沸き立っているかが彼に明らかにされたのです。

私はここでも概略をお話することだけできるだけです。それはこのような経過でした。入門者は、とりわけ、人間が話すとき、人間が呼吸で吐く息に言葉を刻印するときに起こることを真に体験することに注意深くさせられました。入門者は、次のような体験に導かれました、このとき彼自身の内なる行為を通じて生命に移行するものは、空気のエレメント（元素）のなかで生起すること、しかもこの空気のエレメントのなかで起こっていることに、二つの別の経過が結びついていること、これらを体験するように導かれました。

思い描いてみましょう、これが呼吸だとします（図参照、右部分、赤い[rot]線を伴う明るい青[hellblau]）この呼吸に人間が話す何らかの言葉形成物[Wortgebilde]が刻印されるとします。言葉に形成されたこの呼吸が私たちの胸から外へと流れ出る一方、リズムカルな振動が、人間の生体組織（有機体）に浸透するまったく水のような液体的エレメントのなかへと下降していきます（明色[hell]；水[Wasser]）。それで人間は話す際、その喉頭の上部、言語器官のなかに、空気のリズムを持っているのです。けれどもこの話すことと並行して、人間の内部では液体的身体[Fluessigkeitleib]が浸透し動きうねっています。言語領域の下の方にあるこの液体が振動し始め、人間のなかで共振するのです。そして私たちが話すことに感情が伴っている、これは本質的なことですね。人間のなかの水状のエレメントが共振しないとしたら、言葉が中立した状態で外へ、つまり無造作に外へと出ていくとしたら、人間は話されたことに共感することはないでしょう。けれども上に向かって、つまり頭に向かっては、熱エレメント（赤）が上昇していきます、そして私たちが呼吸に刻印した言葉は、上方に流れていく熱（暖かさ）の波を伴っています、この波が私たちの頭に浸透し、そこで私たちが言葉に思考を伴わせるように働きかけるのです。そのため、私たちが話すとき、私たちは三重のものに関わっています、つまり空気、熱、水あるいは液体と。



人間が話すときに活動し生きているものの全体像をはじめて与えるこの経過が、エフェソスの秘儀入門者の場合、最初の時点で取り入れられたのです。次いで彼に明らかになったことは、このとき人間のなかで起こっている経過は、もっと古いある時代に地球そのものに働きかけた宇宙的出来事が人間化されたも

のである、ということでした、ただしそのとき地球においてこのようにうねり動いていたのは、空気エレメントではなく、水、液体的エレメント（図の左部分、青[blau]）、昨日私が揮発的一流動的卵白としてお話ししたあの液体状エレメントだったのですが。人間が話すとき、そのとき人間のなかに呼吸のかたちで小規模に空気があるように、ちょうどそのように、かつては、大気として地球を取り巻く揮発的-液体的卵白があったのです。ここで空気状のものが熱エレメントに移行していくように、これはさらに一種の空気エレメントに移行していき（左、明るい青）、そして下の方で一種の土状エレメントに移行していきました（明色）。その結果、私たちの場合には私たちの体のなかで液体エレメントを通じて感情が生まれるように、地球においては地球形成、地球の諸力、地球において力として作用し湧き起こるものすべてが生じたのです。そして空気エレメントの上方には、地球的なものなかで創造しつつ働きかける、活動する宇宙的思考であるものが生まれました。

かつてマクロコスモス的にあったもののミクロコスモス的な余韻が自らの言葉のなかに生きていることに注意を導かれたとき、人間がエフェソスにおいて得たものは、荘厳な、圧倒的な印象でした。そしてエフェソスの秘儀入門者は、話すことで、その話すという体験のなか、宇宙言語の作用への洞察を感じたのです、かつて意味深く揮発的-液体的エレメントを動かし、上では創造する宇宙思考に、下では生まれ出る地球諸力に接していた宇宙言語の。

このように入門者は、話すと言うことを正しく理解するということを学んで、宇宙的なものに精通するようになりました。つまりこういうことが学ばれたのです、お前のなかには人間ロゴス[der menschliche Logos]がある。人間ロゴスは、お前が地球紀を過ごす間、お前から作用する、人間としてのお前は人間ロゴスなのだーと申しますのも、実際のところ、液体エレメントのなかで下へと流れ出すものを通じて、人間としての私たちは言語から形成されるのですから。上へと流れ出すものを通じては、私たちはこの地球紀の間は私たちの人間としての思考を持ちますー、しかしお前のうちでもっとも人間的なものがミクロコスモス的ロゴスであるように、ちょうどそのように、かつてロゴスが原初にあった、ロゴスは神のもとにあり、自身が神であったのだ、と。

こういうことがエフェソスでは、人間を通じ人間そのものにおいて理解されたために、徹底的に理解されました。

よろしいですか、今皆さんが、ギルガメッシュという名前の背後に隠れているような人物をごらんになるなら、皆さんはこのような感情をお持ちになるにちがいありません、この人物は秘儀から放射されたまっつき境遇、まっつき環境のなかで生きたのだ、と。と申しますのも、以前の時代においては、すべての文化、すべての文明は、秘儀からの放射だったからです。そして私が皆さんにギルガメッシュの名を挙げるなら、彼はまだ故郷のエレクにいたときはなるほどまだエレクの秘儀そのものには参入しておりませんが、こうした宇宙との関係を通して感じられ得たものに実質的に貫かれた文明のさなかにいたことは確かです。その後、西に向かう旅路において彼が体験したものは、むしろ彼を直接ヒベルニアの秘儀に通じさせはしませんでした、彼はそこまで行けなかったわけですが、いわばこのヒベルニアの秘儀のコロニーにおいて育まれたものには通じることができました、皆さんにお話ししましたように、このコロニーは今日で言うブルゲンラントにあったのです。このことがこのギルガメッシュの魂のなかに生きていました。このことは死と新たな誕生との間にさらに育て上げられ、今も継続し、そのために次の地上生の際、当のエフェソスにおいて魂の深まり（深化）が起こったのです。

今や、私が話してきましたふたりの人物のために、このような魂の深まりが起こりました。ここでいわば普遍的な文明から、これらの人物の魂に現実性をもってどよめいてきたものは、なおも強く集中的な現実性をもってどよめいてきたものは、ホメロス時代以来ギリシアにおいてはもう本質的に美しい仮象にすぎなくなったものでした。

はるかなエフェソス、かつてヘラクレイトスも生き、後のギリシア時代、紀元前六世紀から五世紀頃まで古えの真実の数々がなおも感受されていたあの地、ほかならぬこのエフェソスでは、かつて人類がそのなかで生きていた現実（リアリティ）全体をまだ追感することができました、人類がまだ神的-霊的なものと直接関わり合っていた頃、まだアジアがもっとも下位の天であった頃の現実です、このもっとも下位の天でひとはまだ、この天に接する上位の天と結びついていました、なぜならアジアにおいては自然霊たちが体験され、その上[の天]ではアンゲロイ、アルヒアンゲロイその他が、その上ではエクスシアイその他が体験されたからです。それでこう言うことができます、すでにギリシアにおいてさえ、かつて現実であ

ったものを手がかりにその余韻が形成されるだけとなった、現実であったものが、根源の事実を示唆していることが明白に見て取れる英雄伝説の像へと変化していった、つまりギリシアにおいては、根源の事実の劇的要素がアイスキュロスにおいて生命を得た、他方、エフェソスにおいては、あいかわらず人は秘儀の深い闇のなかに沈潜し、人間が神的一靈的世界と直接関わり合って生きていたかの古えの現実の余韻を感じ取っていた、と。そしてギリシア精神にとって本質的なことは、ギリシア人は、人間にとってより身近な神話や人間にとってより身近な美と芸術のなかに、つまり模像のなかに、かつて宇宙との関わりのなかでまさに人間によって体験され得たものを潜ませたのだということです。

さて、一方においてこのギリシア文明が今やすでにその絶頂に達し、ペルシア戦争におけるように古代アジアの現実性の側からなおも反撃しようとしたものすら誇らかに退けたとき、つまり一方でギリシア文明がその絶頂に達し、しかし他方ではすでに崩壊に瀕していたとき、かつて人間の霊、魂、体のなかの神的一靈的な地上的現実であったものの余韻を魂のなかにはっきりと担っていた人物たちがどのような体験をしたのか、私たちは今思い描いてみなければなりません。

私たちはこう思い描かざるを得ません、そもそもアレクサンダー大王とアリストテレスは、何と云っても彼らにまったく合致しない世界、本来彼らにとっては悲惨な世界に生きていたのだ、と。奇妙なことに、アレクサンダーとアリストテレスのなかに生きていたのは、靈的なものに対して彼らの環境とは別の関係を持っていた人間たちでした、彼らはサモトラケの秘儀をさして気に留めていなかったにもかかわらず、その魂においては、サモトラケの秘儀においてカペイロスとともに起こったことに多大な親和性を有していたのです。このことは長い間感じ取られていました、中世においてはまだ感じ取られていました。そしてこう言わざるを得ません――このことについて今日の人間はまったくまちがって思い描いているのですが――、中世においてはまだ、十三、十四世紀頃までは、あらゆる階級の何人かの人々には、少なくともかつて古えのオリエントでアジアと呼ばれた領域において、はっきりとして靈的観照があった、と。そして中世にある司祭によって著わされた『アレクサンダーリート』(アレクサンダーの歌)(2)は、何と云ってもものちの中世の非常に重要な文献です。アレクサンダーとアリストテレスを通じて起こったことについて、今日歴史のなかにゆがめられて生きているものに対して、ラムプレヒト司祭が十二世紀頃にアレクサンダーリートとして著わしたものはなおも、アレクサンダー大王を通じて起こったことについての古えの把握に近い雄大な把握のように思われます。

皆さんは以下のことを魂の前に据えてくださりさえすればよいのです。ラムプレヒト司祭のアレクサンダーリートのなかにには実際すばらしい叙述があります、たとえば次のようなすばらしい叙述です。毎年、春がやってくるとひとは森に出かけていき、森の縁まで行く、森の縁には花々が育ち、同時に太陽は、森の木々から影が森の縁に育つ花々の上に落ちる位置にある、そしてひとは、春に森の木々の影のなかで、花々のうてなから靈的な花の子どもたちが出てきて、森の縁で輪になって舞い踊るのを見る、というような。――そして、ラムプレヒト司祭のこのような叙述において、真の経験、当時の人々がまだ得ることのできた経験のいくばくかがほのかに輝いているのがはっきりと認められます。その経験は、人々が森に出かけていって、散文的に、ここに草がある、ここに花がある、ここで木が始まる、などと言うような経験ではありません、そうではなく、人々が森に近づくと、太陽が森の背後になって影が花々の上に落ちるとき、この森の影のなかで、花々から被造物である花の世界全体が彼らを迎えたのです、彼らが森に入る前からその世界は彼らのためにそこにあったのですが、森のなかで彼らはまたほかの元素霊(エレメンタルガイスト)たちも知覚しました。この花々の輪舞、これはラムプレヒト司祭にとってとりわけ描写したい好ましいものに思われたのです。そして、何と云っても重要なのは、ラムプレヒト司祭がアレクサンダー遠征を描写しようとしたとき、この描写に――まだ十二世紀、十二世紀の初頭です――、自然の描写を浸透させ、流れ込ませたことです、いたるところに元素界(エレメンタル界)の顕現を内包している自然の描写を。全体が意識によって支えられているのです、アジアへのアレクサンダー遠征が始まり、アレクサンダーがアリストテレスに教えを受けたとき、かつてマケドニアで何が起こったのかを描写しようとするなら、それを描写しようとするなら、人は周囲の散文的地球を描写することでそれを描写することはできない、散文的地球にエレメンタル存在たちの領域を付け加えてのみそれを描写することができるのだという意識に。

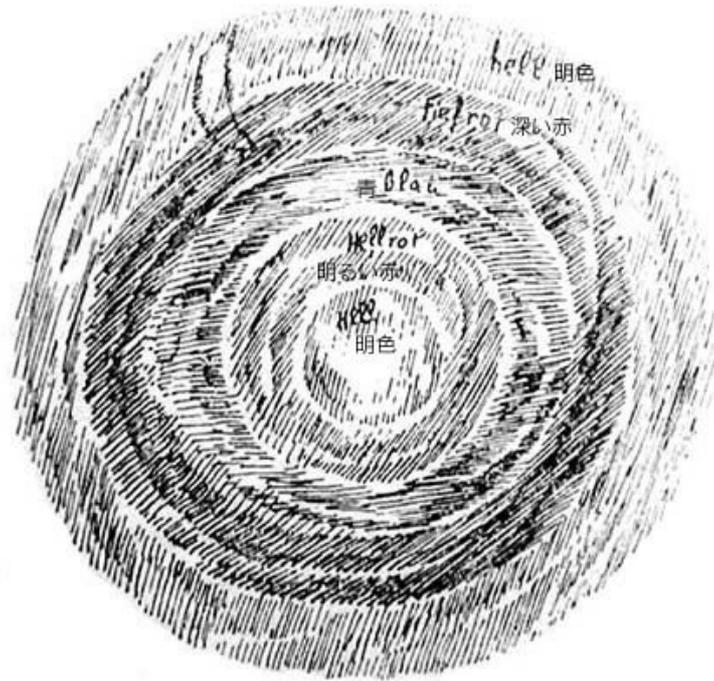
けれどもよろしいですか、今日皆さんが歴史書を読まれるとき――今日の時代にはそれはまったく当然のことです――、そう、そのとき皆さんはこう読むでしょう、アレクサンダーは師のアリストテレスに

不従順で師の序言に逆らって、次のような使命があると思い込んだ、異邦人たち（バルバーレン）を文明化された人々と宥和させ、文明的ギリシア人つまりヘレーネン、マケドニア人、異邦人から成る平均的文化といったようなものを生じさせなければならない、と。これはなるほど今日の時代にとっては正しいことですが、真実、ほんとうの真実にとってはまさしく愚かしいことです。アレクサンダー遠征を描写するラムプレヒト司祭がこのアレクサンダー遠征にまったく別の目的を置いているのを見ると、雄大な印象が得られます。そしてあたかも、私がたった今、自然－エレメンタル界つまり自然のなかの霊的なものが自然のなかの物質的なものに入り込んでいることとお話ししましたこと、このこともまさに導入部にすぎないかのように思われるのです。ラムプレヒト司祭のアレクサンダーリートにおけるアレクサンダー遠征の目的とは、いったい何なのでしょう。

アレクサンダーはパラダイスの門まで行くのです！なるほど当時のキリスト教的なものに置き換えられてはおりますが、これから詳述していきますように、これは本来かなりな程度真実に合っているのです。と申しますのも、アレクサンダーの遠征は単に侵略をするためになされたのではなく、あるいはアリストテレスの助言にそむいて異邦人をギリシア人と宥和させるためになされたわけでもないからです、そうではなくアレクサンダーの遠征は真の高い霊的な目的に貫かれていました、それは霊から発動されたのです。そして私たちがさらにラムプレヒト司祭、彼はつまりアレクサンダーの生きていた時代から十五世紀後に、非常に献身的に彼のやりかたでこのアレクサンダー遠征を描写したわけですが、彼の書物から私たちが読み取るのは、アレクサンダーはパラダイスの門まで行くけれども、パラダイスそのものには入らなかった、ということです、なぜなら、ラムプレヒト司祭の言うように、パラダイスに入ることができるのは真の謙譲[Demut]を有する人だけだからです。けれども前キリスト教時代におけるアレクサンダーはまだ真の謙譲を持つことはできませんでした、と申しますのも、キリスト教[Christentum]がはじめて真の謙譲を人類のなかにもたらすことができたからです。ともかくも、狭量な感覚ではなく、心広い感覚でこのようなことを把握するなら、キリスト教司祭ラムプレヒトが、アレクサンダー遠征の悲劇的なもののいくばくかを感じているようすが私たちに見えるのです。

さて、このアレクサンダーリートの叙述によって私がただ皆さんの注意を喚起したかったのは、西洋の人類史における先行するものと後続のものを東洋に付加された状態で描写するために、まさにこのアレクサンダー遠征の例で始めても、驚く必要はないということです。と申しますのも、この場合感情として根底にあるものは、皆さんもご存じのように、中世の比較的後期に至るまで、単に普遍的な感情としてのみ存在していたのではなく、このアレクサンダーリート、皆さんに特徴をお話したふたつの魂を通じて起こったことを、実際真に、大いに劇的に描き出すこのアレクサンダーリートが生み出されるほどに、具体的に存在していたのです。まったくもってマケドニア史のこの時点は、一方においてはるかな過去を、他方においてはるかな未来を示唆しています。その際とりわけ考慮しなければならないのは、アリストテレスとアレクサンダーのもとにあったすべての上に、世界史上の悲劇が漂っている、ということです。この世界史上の悲劇はすでに外的に現われています。実際、特殊な関連によって、特殊な世界史上の運命の関連によって、アリストテレスの著作のほんのわずかな部分しかヨーロッパ西洋に伝わっておらず、その後教会によって保管されたということによって、その悲劇は露呈しているのです。実際それらは、論理学の著作と、論理的なものをまとわされた著作のみでした。けれども今日なお、アリストテレスの自然科学的な著作に含まれているわずかなものに沈潜する人には、宇宙と人間との連関においてアリストテレスの洞察がいかなお強力なものであったかが見えるでしょう。ここでひとつのことにだけ注意していただきたいと思います。

私たちは今日、土状のエレメント（元素）、水状のエレメント、空気状のエレメント、火状のあるいは熱エレメントについて、そしてさらにほかのもの、エーテルについても話しますね。アリストテレスはどのように記述するでしょう？彼は地球を記述します、固体状地球（図参照、明色の核）、液体状地球、水（明るい赤）、空気（青）、全体は火に貫かれ火に取り巻かれている（深い赤）、けれどもアリストテレスにとって地球は月まで達しています。そして宇宙から、星々から、月へと一つまりもはや地上領域のなかにはなく、月まで、ここまでののですが一、獣帯から、星々から、空間的－宇宙的エーテル（外側の明色）が入り込んでくるのです。このエーテルは月まで下降してきます。



学者たちは今日なおこのことを、アリストテレスについて書かれた書物のなかに読むことができます。けれどもアリストテレス自身が弟子のアレクサンダーに常に繰り返し言ったのは、こういうことでした。この地上的一熱的なものの外側にあるあのエーテル、つまり光エーテル、化学エーテル、生命エーテルは、かつて地球と結びついていた。これらすべては地球まで達していた。ところが古い進化において月が退いたとき、そのときエーテルも地球から退いた。そして—アリストテレスは弟子のアレクサンダーにこう言ったのです—、外的空間的に死んだ世界であるものは、このように地上で最初にエーテルに浸透されていないのだ。けれどもたとえば春が近づくと、元素霊たちは、生まれてくる存在たち—植物、動物、人間—のために、月からエーテルを、月領域からまたこの存在たちのなかへともたらすのだ、それで月は形成するものなのだ、と。

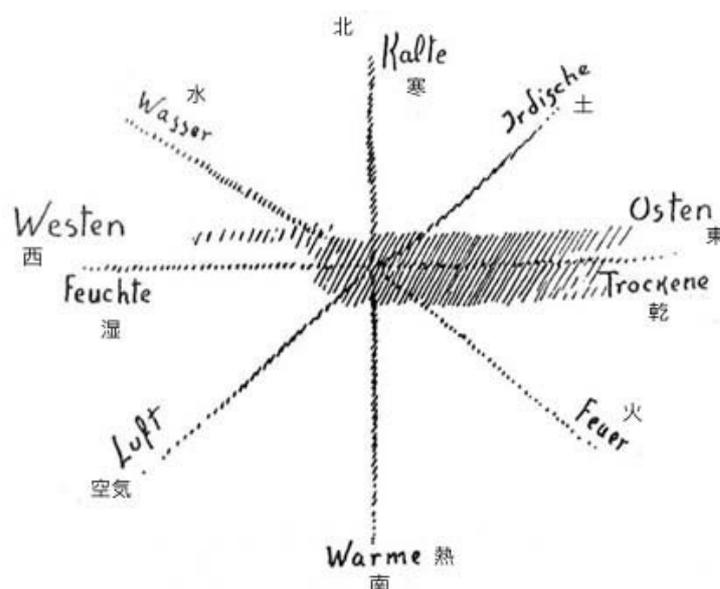
ヒベルニアにおいて一方の女性的な形姿の前に立つと、ひとはこれをまったく生き生きと感じました、エーテルは本来地球に属するものではなく、存在が生まれるのに必要な限り、年ごとに元素霊たちによって地上へともたらされるということを。

アリストテレスにおいても人間と宇宙との連関についての深い洞察がありました。それについて扱われている著作を、弟子のテオフラストス(3)は西方にはもたらしませんでした。これらの書物のいくつかは、このような事柄への理解がまだあったオリेंटへともどっていきました。そしてその後、北アフリカとスペインを経て、ユダヤ人とアラビア人を通じて、それはヨーロッパ西部へとやってきて、私がさらに述べていきたいと思いますしかたで、放射、つまりヒベルニアの秘儀からの文明放射とぶつかったのです。

けれども、私が皆さんに今まで特徴づけてきましたものは、アリストテレスがアレクサンダーに与えた教えにとってはまったく出発点にすぎないものでした。これらはまったくもって内的体験に関わっていました。そして私が事態をいわばいくらかざっと素描してみますなら、次のように言わなければならないでしょう。アレクサンダーはアリストテレスを通じてよく知るようになった、外部宇宙(世界)に土、水、空気、火のエレメントとして生きているものは、人間の内部にも生きているということ、人間はこの関連で真にミクロコスモスだということ、人間のなかには、人間の骨のなかには土のエレメントが生きているということ、人間の血液循環と人間のなかで液体、生きた液体であるものすべてのなかには、水のエレメントが生きている、ということ、人間のなかでは空気エレメントが呼吸と呼吸刺激という状態で作用し、言葉のなかには作用しているということ、火のエレメントは思考のなかには生きている、ということ。アレクサンダーはまだ宇宙のエレメント(諸元素)のなかには自分が生きているのを知っていました。宇宙のエレメントのなかには生きている自分を感じることで、人はまだ地球との密接な親和性をも感じたのです。今

日人間は、東へ、西へ、北へ、南へ、と旅行しますが、彼はそこでそもそも自分に押し寄せてくるすべてが何なのかを感じることはありません、彼は外的な感覚が知覚するものしか見ないからです、彼は地上的な物質は彼のなかで知覚するもののみを見て、エレメントが彼のなかで知覚するものを見ないからです。けれどもアリストテレスは、アレクサンダーに教えることができました。地上を東へ向かえば、あなたはますますいっそうあなたを乾燥させるエレメントのなかへと入っていくでしょう、あなたは乾いたものの中に入っていくのです、と（図参照）

このことを、アジアへと向かうと、人はまったく干からびてしまう、などと想像なさってははいけません。これらが精妙な作用であることはもちろんです、これらの作用をアリストテレスの導きによってアレクサンダーが自らのうちに受け取ったのです。アレクサンダーはマケドニアで自らにこう言うことができました、私のなかにはある程度湿ったものがある、私が東へ向かうと、それは湿ったものを減少させる、と。このように彼は、地上を遍歴しながら地球の構成を感じたのです、ちょうどそうですね、ある人の体のどこかある部分を撫でていくと、鼻と目と口がどう違うのが感じられるように。描写されたこの人物はこのように、乾いたものの中に入りますますますいっそう入り込んでいくときに体験することと、もう一方へつまり西へ、湿ったものの中に入り込んでいくときに体験することにはどういう違いがあるかを、なおも感じ取っていたのです。



おおざっぱにはあっても、今日なお人々はまた別の違いを体験しています。北へ向かって人々は冷たさを南に向かつては熱、火的なものを体験しますね。けれども北西へと出かけていっても、あの湿-冷の共演を人々はもはや感じないのです。アリストテレスはアレクサンダーのなかに、ギルガメッシュが西への道を辿ったときに体験したものを喚起しました。そしてその帰結として、弟子は直接的な内的体験において、今やまさに湿と冷の間の中間地帯で北西に向かつて体験されるもの、つまり水を知覚することができるようになりました。それでアレクサンダーのような人間にとって、北西へと進軍する、と言わずに、水のエレメントが統治しているところへと進軍する、と言ったのは、まったくもって単に可能な言い方ではなく、非常に現実的な言い方だったわけです。湿と暖の間の中間地帯には、空気が統治しているエレメントがありました。古代ギリシアの大地の秘儀で教えられたこと、古えのサモトラケの秘儀（ 4 ）で教えられたこと、アリストテレスによって直弟子に教えられたことはそのようなことでした。そして、冷と乾の中間地帯、つまりマケドニアからシベリアへの方向では、地そのもの、地上的なものが統治していた地球領域が体験されました、地（土）のエレメント、固体的なものです。暖と乾の中間地帯、つまりインドに向かつては、火のエレメントが支配的であったあの地球領域が体験されました。それはこういう具合でした、アリストテレスの弟子は北西を指して、私はそこで水の霊たちが地上へと働きかけているのを感じる、と言ったのです。 - - また彼は南西を指して、ここでは空気の霊たちを感じる、と言いました。 - - 彼は北東を指して、そしてそこで主として地（土）の霊たちが漂ってくるのを見ました。 - - 彼は南東、インドの方向を指して、火の霊たちが漂ってくるのをあるいは火のエレメントのなかに見たので

す。

さて最後に私が、アレクサンダーのなかにこういう言い方が生じた、と申しましたら、皆さんも自然のものや道徳的なものに対するあの深い親和性をお感じになるでしょう、つまり、私は冷たく湿ったエレメントから火へと突入しなければならない、インドへの進軍を行なわなければならない！というアレクサンダーの言い方です。これは、道徳的なものと同様、自然のものにも結びついている言い方です、これについては明日さらにお話ししてきたいと思います。私は当時生きていたものがありありと見えるように皆さんをそのなかに導き入れたいと思いました。と申しますのも、当時アレクサンダーとアリストテレスの間で話されたことのなかに、皆さんは同時に世界史上の進化における激変そのものが反映しているのをごらんになるでしょうから。当時においてはなお、過ぎ去った時代の大秘儀について内輪の授業で語られることもありました。その後人類は論理的なもの、抽象的なもの、カテゴリーのみをいっそう取り入れ、そのほかのものは突き返すようになりました。したがって、このことをもって同時に私たちは、人類の世界史上の進化における途方もない激変を示唆するのです、オリエントとの関係におけるヨーロッパ文明の全経過のなかでもっとも重要な時点を。これについてはまた明日にいたしましょう。

編註

1 ヒベルニアの秘儀：シュタイナーはすでにこの直前、1923年12月7、8、9日にこれについて詳しく述べている（『秘儀の形成』GA232 *邦訳『秘儀の歴史』西川隆範訳、国書刊行会）。両方の描写を比較すると、同じ事柄についてのふたつの両立しない説明なのかどうかという問題に通じる。『秘儀の形成』に記述されている経過――太陽像の作用による冬のイマジネーションの体験、月像の作用による夏のイマジネーションの体験――は、この12月27日の説明、つまり月像に直面して冬のイメージが、太陽像の前で夏のイメージが出現する、という説明によって解消されるように思われる。けれどもふたつの描写を厳密に比較すると、ふたつの異なる体験の局面があることがわかる。当面の講義では、ふたつの立像に直面しての体験で、入門者は立像を通して自らを太陽存在あるいは月存在として知るようになるのだが、それに対して12月8日の講義では、特定の像の前での体験、外から近づいてくる太陽及び月の宇宙作用を入門者に開示する体験の、徐々に生じてくる余韻を扱っている。――詳細は『ルドルフ・シュタイナー全集に寄せる論文集』Nr.69

2 『アレクサンダーリート』：フランケンの聖職者、司祭ラムプレヒトにより1125年頃に著わされた。ドイツ語の最初の世界的叙事詩。花のエピソードについては、母及びアリストテレス宛のアレクサンダーの手紙（5001-5205節）を参照のこと。

3 テオフラストス：紀元前390-305（*） アリストテレスの弟子、アリストテレスは彼をアテネのペリパトス学派の指導者として後継者に任命した。

（*紀元前372頃-286頃とも）

4 ギリシアの大地の秘儀[...]サモトラケの秘儀：1923年12月4日と21日の講義参照のこと。『秘儀の形成』（GA232）所収。

古代の秘儀のうちでもエフェソスの秘儀はまったく特殊な位置を占めています。私は西洋の歴史において、アレクサンダーという名に結びつくあの進化因子とともに、このエフェソスの秘儀のことをも考えざるを得ませんでした。かつてのあらゆる古代文明の源は秘儀の本質であったわけですが、これがオリエント(東方)からこちらのオクツィデント(西方)、つまりまずギリシアへと経てきた急激な変化のなかに入っていくときにのみ、新旧の歴史の意味を理解できます。そしてこの急激な変化とは以下のようなものです。

よろしいですか、東洋のかつての秘儀をのぞき込んでみますと、秘儀の祭司たちは、彼らの観たものから偉大な意味深い真実を弟子たちに啓示することができたのだ、という印象をいたるところで受けます。そう、時代を遡れば遡るほど、これらの祭司賢者たちは、神々そのものを、惑星界あるいは地上の現象を導く霊的諸存在を、秘儀において直接現前させることができました、神々は実際にそこに現われたのです。

人間とマクロコスモスとの関連、それは実際さまざま秘儀において明かされました、ヒベルニアの秘儀やアリストテレスがまだアレクサンダーに語るることができたものについて昨日皆さんにお話ししましたが、あのようになかなか明かされたのです。けれどもどの古オリエントの秘儀においても、とりわけ、道徳的なもの、道徳的な衝動が、自然の衝動と厳密に分かれていなかった、ということが言えます。アリストテレスがアレクサンダーに水のエレメントの霊たちが支配していた北西を指し示すことで北西からやってきたものは、今日のように風やその他純粋に物質的なものがやってくるといった単に物質的な衝動だけではありませんでした、物質的な衝動とともに道徳的な衝動もやってきたのです。物質的なものと道徳的なものはひとつでした。それが可能だったのは、そもそもこれらの秘儀において与えられたあの認識を通して、人間は自らを全自然とー人間は自然の霊を知覚していたわけですからー一体のものと感じていたからです。たとえば、ギルガメッシュの生涯と、次の受肉でエフェソスの秘儀に近づいた個体の生涯の間に流れ去ったちょうどその時期に、人間の自然に対する関係において、あるひとつのことがあります。ちょうどその時期には、人間と霊自然[Geistnatur]との関連についての直観がまだ生き生きと見出されます。この関連はこのようなものでした。自然のなかの元素霊たちの作用や、惑星の経過のなかの知性的存在たちの作用について、当時知っていたことすべてを通じて、人間はこう確信するに至っていました。外ではいたるところに植物界が広がっているのが見える、新緑に芽吹き、生長し、実を結ぶ植物界が。春に生え出し秋には枯れてゆく一年生植物が、草原に、野原に見える、そこには何百年も成長し続ける木々も見える、樹皮と木質部を外側に持ち地中深く根を伸ばした木々だ。この外界で一年生草本や花として根を降ろしているものすべて、硬い衝動とともに地中へと伸びてゆくものすべてを、人間としての私はかつて私のなかに担っていた。こういう確信です。

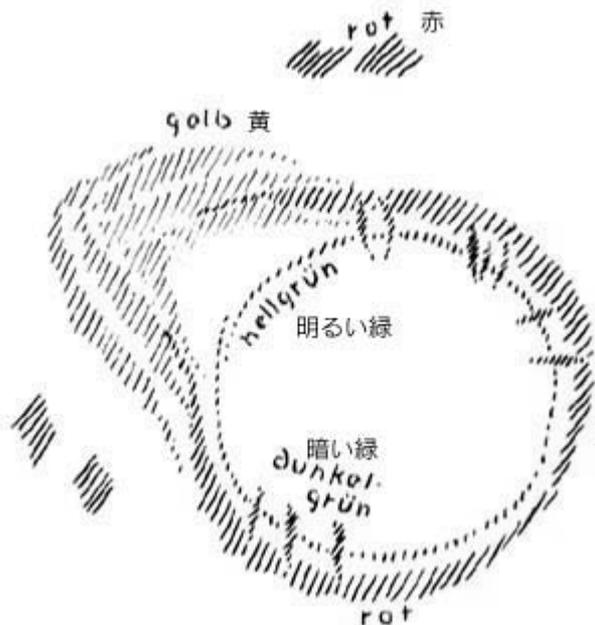
よろしいですか、今日人間は、どこかある部屋に人間の呼吸によってできた炭酸があるとすると、私はこの炭酸を吐き出した、と感じます。人間は、自分は炭酸をこの部屋のなかに吐き出した、と感じるので。人間は今日、まだわずかしが宇宙と関わり合っていないと言ってよいかもしれません。人間存在の空気の部分において、生体組織のなかで起こっている呼吸及びその他の空気プロセスの根底にある空気において、人間は大なる宇宙と、マクロコスモスと、まったく生き生きと関わり合っています。人間は吐き出された呼吸を、つまり最初内にある炭酸を眺めることができます。人間が今日ー実際そうしないにしても、そうすることは可能でしょうー吐き出された炭酸を眺めるように、ちょうどそのように、オリエントの秘儀に参入したか、あるいはオリエントの秘儀から外に流れ出た叡智を受け入れた人は、植物界全体を眺めていたのです。その人は、こう言いました。私は宇宙進化において古い太陽紀を振り返って見る。そのとき私はまだ内部に植物を担っていた。その後私は植物を地球存在のあたり一面に流出させた。けれども、私がまだこの植物を私のなかに担っていたとき、私がまだ、植物界とともに全宇宙を包含していたあのアダム・カドモンであったとき、そのときこの全植物界はまだ水(液体)的一空気(気体)的な何かであった、と。

人間はこの植物界を自身から分離(分泌)したのです。もし皆さんがこの地球の大きさになって、それから植物的なものを、今や水の元素のなかで変容し、生じ、枯れ、成長し、別様に変化し、まさしくさまざまな姿をとるこの植物的なものを、内に向かって分泌する、と思いつかべてごらんになれば、皆さんは当時の心情を皆さんのなかに呼び起こすことができるでしょう。そしてかつてはこのようであったという

こと、これを、ギルガメッシュの時代に彼方のオリエントで教育を受けたひとたちは語ったのです。彼らは草原の植物の成長を見るとこう言いました、私たちは、私たちの進化の前段階で植物を分離したが、地球が植物を受け取った、と。そのうち根のようなものは、木質のもの、植物のうち木の性質のものすべてと同様に、最初地球にはありませんでした。――けれども、植物性のもの全般を人間は自分から切り離し、それは地球に受け取られました。人間は植物性のものすべてと密接な親和性を感じていました。

高等動物に対して人間は[植物に対するのと]同じ親和性を感じておりませんでした、と申しますのも、動物的形成を克服し、進化の途上で動物たちを置き去りにしたことによってのみ人間は地上に到達することができた、ということを知っていたからです。人間は植物を地球まで携えてきて、それから植物を地球に委ねました、地球は植物を自らの懐に受け入れたのです。地球上で人間は、植物にとって神々の仲介者、神々と地球との間の仲介者となったのです。

したがって、今やあの大いなる体験、これはごく単純化してこのようにスケッチできますが（図参照）あの体験を現実に有したひとたちは、人間は宇宙（黄）から地球にやってきた、と感じたのです。数は問題になりませんよ、昨日すでに申しましたように、人間たちは互いに合体していた[ineinanderstaken]のですから。人間は植物的なものをすべて分離し、そして地球は植物的なものを受け取って、それに根のようなものを与えたのです（暗緑色の線）。――このように人間は、自分が植物の成長とともに地球を包み込むように（赤い覆い）また地球がこうして包み込まれることに感謝しつつ、人間が液体―気体的植物エレメントのかたちで地球に吹きかけることのできたものを受け入れたように感じました。そしてこのようなことを感じたひとたちは、このように地球に植物をもたらすことに関連して、自らを神、つまり水星の主神 [Hauptgott des Merkur]と密接な親和性のあるものと感じました。自分が地球に植物をもたらしたのだというこの感情を通して、人は水星神と特別な関わりを持つに至ったのです。



これに対して、動物についてはひとはこう感じました、動物を地球にもたらすことはできなかった、動物を切り離し、動物から自分を解放しなければならなかった、さもないと正しいしかたで人間の形姿を発達させることはできなかつたらう、と。いわばひとは動物を自らから押し出し、その結果動物は人間からまさに押し出され（外側の赤い線）、人間のそれよりは低次の段階で動物自身の進化を遂げざるを得なくなったのです。このように一方において、まさにギルガメッシュ時代およびそれに続く時代の古代人は、自分が動物界と植物界の間に据えられていると感じたのです。植物界に対して人間は自らを、神々の代理としていわば地球に授精する担い手と感じました。動物界に対しては、動物という重荷を下ろし、そのため動物は退化するのですが、重荷を脱して人間となるためにあたかも動物界を自分から突き放したかのように感じました。ところで、エジプトの動物礼拝全体はこの直観と関連しています。アジアに見られる動物に対するあの深い同情の多くもこれと関連しているのです。そしてそれは、一方において植物界との、他方において動物界との人間の親和性を感じていた偉大な自然観でした。動物界に対しては解放を、植物

界に対しては植物界との緊密な親和性をにひとは感じていたのです。人間としてひとは、植物界を自分自身的一部分と感じ、親密な愛のなかで地球を感じていました、なぜなら地球は、植物というこの人間性の一部を、自らのうちに受け入れ、自らのうちに根づかせ、しかも木々においては自分の素材を樹皮として植物を覆うことさえしてくれたからです。物質的な外界の判断のなかにはあらゆるところに道徳的なものがありました。ひとは草原の植物に近づいていき、この植物のなかに単に自然の成長を感じ取るのみならず、人間とこの成長との道徳的關係をも感じ取っていたのです。動物に対してもやはり道徳的な關係を感じ取っていました、ひとは動物を超え出ていったのだ、と感じたのです。

つまりあちらのオリエントでは、こうした秘儀から大いなる靈自然觀[Geistnatur-Anschauung]が流れ出していたのです。ギリシアにおいては当時秘儀は存在していましたものの、真の靈自然觀をとまなうことはずっとまれでした。ギリシアの秘儀はなるほど壮大なものでしたが、まさにその本質からしてオリエントの秘儀とは区別されました。オリエントの秘儀においてはすべてが、地球上で人間はそもそもこの地球を通して自らを感じるのではなく、自分を宇宙、宇宙万有に組み込まれたものと感じていた、という具合でした。ギリシアにおいては、秘儀の本質は最初、人間が自分を地球と結びいたものと感じるという段階に至ります。したがって、オリエントにおいて秘儀のなかで現われたもの、あるいは感じられたものは、本質的に靈的世界そのものだったのです。古えのオリエントの秘儀においては、供犠を捧げ祈りを唱える祭司たちのもとに神々自身が出現した、と言われるとき、絶対的な真実が描写されているのにほかなりません。――秘儀の神殿は同時に、神々を地上に迎える場所でした、そこで神々は天の宝として人間たちに贈るべきものを、祭司賢者たちを通じて人間たちに贈ったのです。一方ギリシアの秘儀においては、神々の像（映像、イメージ[Bild]）、写し（模像[Abbild]）、何か影像[Schattenbilder]のようなもののみが現われました、真の、純粋な像ではありましたが、影像のようなもので、もはや神的存在たちそのもの、現実の存在ではなく、影像のみが現れたのです。そのためギリシア人は、古えのオリエントの秘儀の一員であった人とはまったく異なった感情を持っていました。ギリシア人はこう感じたのです、神々は存在する、けれども人間にできることは、これらの神々の像[Bild]を得ることだけだ、ちょうど記憶においては体験の像が得られるだけで、もはや体験そのものではないように、と。

それはギリシアの秘儀から発してきた深い根本感情でした、自分たちは宇宙の記憶のような何かは有しているが、宇宙の現象そのものではなく宇宙の像だ、神々の像は持っているが神々そのものではない、土星、太陽、月上での経過についての像[Bild]は有しているが、土星、太陽、月上で現実（リアル）であったことと、たとえば人間が子ども時代とリアルに結びついてるようなそれほどの生きた結びつきはもはやない、と人間たちは感じたのです。そしてこの、土星、太陽、月とのリアルな結びつきを、オリエント文明の人々の方はその秘儀から得ていました。このように、ギリシアの秘儀の本質には何か像のようなもの[etwas Bildhaftes]がありました。神的一靈的現実の影のような靈たち[Schattengeister]が現われたのです。けれどもこのことは別の重要なことをもたらしました。と申しますのも、よろしいですか、オリエントの秘儀とギリシアの秘儀の間には、もうひとつ違いがあったのです。

オリエントの秘儀においては、そこで経験できる大いなるもの巨大なものうちいくらかかなりと知ろうとするなら、ひとはまず時が熟すまで待たなければならない、ということが常でした。それに付随する供犠を、つまりいわば超感覚的な試み[Experimente]を、秋に行なう、あるいは別の試みを春に、また別のそれを真夏に、また真冬に行なう、するとそのときにのみ何かを経験することができる、と言う具合だったのです。そしてまた、月がある特定の位相をとることによって正しい時期と知ることのできた時期に、何らかの神々に供犠が捧げられる、ということもありました。神々はそのとき秘儀のなかに姿を現わしました。神々が顕現したのです。さらにまた、何らかの神的存在が秘儀においてまた顕現する機会がやってくるまで、そうですね、三十年ほど待たなければなりません。たとえば土星に関わるすべてのものは、何らかのかたちで三十年ごとに秘儀の領域に入ってくるのみでしたし、月に関わるすべては常におよそ十八年ごと、等々でした。ですから、オリエントの秘儀の秘儀祭司たちは、彼らが得た壮大巨大な認識と觀照を、時間と空間とあらゆる可能なものに左右されるかたちでのみ獲得することができたのです。たとえば、洞窟の奥深くではまったく違う啓示が得られましたし、山の頂上では別の啓示が得られました。どうかしてあちらのアジアの奥深くにいたりあるいはまた海岸その他にいるときには、違った啓示が得られたのです。つまり、地上の空間と時間への依存、これがまさにオリエントの秘儀において特徴的なことでした。

ギリシアにおいては、大いなる現実（リアリティ）は消え去っていました。像[Bilder]だけが残っていたのです。けれども、今やひとは季節や世紀の流れや場所に依存することなく像を得ることができました、人間として正しいしかたで準備をすれば、あれこれの黙想をし、あれこれの人格上の[personlich]供犠を捧げれば、この像を得ることができたのです。供犠と人格的成熟のある段階に到達すれば、ひとは人間としてそれに到達したがゆえに、大いなる宇宙の出来事と宇宙存在たちの影を近くようになったのです。

これは古（いにしえ）のオリエントからギリシアへの秘儀の本質における大きな変化です、古オリエントの秘儀は地上の場所と地上の空間の諸条件に従属していて、一方ギリシアの秘儀においては、人間は自分が神々にもたらしたものにに関わり合ったのです。神がスペクトルム[Spektrum]の姿で自分のところにやってくるようにと行なった準備を通して人間が評価されたときに、神々はいわば、影像の姿、スペクトルムの姿でやってきたのです。このことによってギリシアの秘儀は、新たな人類を真に準備するものとなりました。

さて、古のオリエントの秘儀とギリシアの秘儀との中間の位置にエフェソスの秘儀がありました。それはまさに特殊な位置を占めていました。と申しますのも、エフェソスにおいては、そこで秘儀に参入したひとたちは、古オリエントの巨大で壮麗な真実のいくばくかをまだ経験することができたからです。人間と大宇宙（マクロコスモス）の関連、大宇宙の神的一霊的存在たちと人間との関連についての内なる感受と感覚によって、まだそれらの真実に触れることができました。おお、エフェソスにおいては、地上を超えたものについてまだ多くのことが感じ取られていたのです。そしてエフェソスの秘儀の女神アルテミスとひとつになることによって、あのまだ生き生きとした関係がもたらされました。植物界はお前の世界である、地球はただ植物界を受け取ったのだ。お前は動物界を克服した、お前は動物界を置き去らなければならなかった。お前が人間となることができるために置き去りにせねばならなかった動物たちを、お前はありったけの同情をもって眺めなければならない。――このように大宇宙と自分がひとつであると感じること、この感情が、エフェソスの秘儀参入者たちにはまだ直接の体験から、現実（リアリティ）から、伝えられたのです。

けれどもエフェソスにおいては、西洋に向けられた最初の秘儀として、季節あるいは世紀の流れ、要するに地上の時と場所からの独立というものがありませんでした。エフェソスにおいてはすでに、人間が行なう黙想、そして神々への供犠と帰依を通じてどのように自分を成熟させるかというそのやり方に注目されていました。その結果、実際のところエフェソスの秘儀は、一方で秘儀の真実の内容を通してまだ古オリエントを指し、他方、人間進化へと、人間性へとすでに押しやられたことによって、エフェソスの秘儀はすでにギリシア精神への傾向を有していたのです。それはいわば、古の大いなる真実が人間に近づいていた、近づくことができたあの東方における最後の秘儀でした。と申しますのも、東方においては秘儀がすでにもう頹廢[Dekadenz]に至っていたからです。

古の真実がもっとも長く維持されていたところ、それは西方の秘儀のなかでした。キリスト教成立後数世紀になおもひとはヒベルニアについて語るすることができました。けれども、ヒベルニアの秘密は根本的に言って二重に秘密に満ちている、と申し上げたいのです。と申しますのも、よろしいですか、昨日私が皆さんにこれら二つの立像についてお話ししたこと、そのひとつは太陽像でもうひとつは月像、ひとつは男性像でもうひとつは女性像だったのですが、この立像の秘密というのは、今日、その秘密自体をいわゆるアーカーシャ年代記から探究することがまだ困難な状況なのです。こうした物事において修練された人々たちにとっては、オリエントの秘儀の像に近づいて、これらの像をアストラル光のなかから取り出してくることは、比較的困難ではありません。ところが、ヒベルニアの秘儀に近づこうとすると、アストラル光のなかで近づこうとすると、ひとは最初何か麻痺（眩惑）のようなものに見舞われます。それはひとはね返します。このアイルランドの秘儀、ヒベルニアの秘儀は、もともとの純粹さを最も長く保っているにもかかわらず、今日もはやアーカーシャ年代記のなかに自分の姿を見せようとはしないのです。

さてよく考えてみてください、アレクサンダー大王のなかに入り込んだ個体（個人）は、ギルガメッシュ時代、今日で言うブルゲンラント地方に至る西への旅のときに、ヒベルニアの秘儀によって触れられました。それはこの人間個体のなかで生きました、この西方に依然としてアトランティス時代の強い余韻があった時代に、非常に古いしかたで生きたのです。それは、死と新たな誕生との間に経過する魂的状态を通じて担われていきました。それからふたりの友、エアバニとギルガメッシュは、今度はまさにエフェソスにいました、そしてそこで、以前のギルガメッシュ時代に、神的一霊的世界との関連で多かれ少なかれま

だ下意識的に体験されたことを、非常に意識的に体験したのです。このエフェソス時代は、その前のもっとも活動的な時代に魂のなかに引き入れられたものを消化し、加工する比較的静かな人生でした。

さて、よく考えてみなければなりません。この兩個体がギリシアの類廃期、マケドニアの全盛期に再び出現する前に、このギリシアを通過していったものは何だったのでしょうか！この古代ギリシア、海を越えて拡がりエフェソスをも包含し、小アジアの奥にまで入り込んでいたこの古代ギリシアは、古の神々の時代の余韻をなおすべて影像のなかに有していました。人間と靈的世界との関連は影のなかでまだ体験されていたのです。けれどもギリシア精神はこの影のなかから徐々に抜け出します、そして私たちは、ギリシア文明がいわゆる神的な文明から純粋に地上的な文明へと入り込んでいくさまを、段階を追って見ることができるのです。

おお、今日の唯物論的に外面的な歴史なるものにおいては、歴史的生成のうちでももっとも重要な事柄が、まったく触れられてもいないのです！ギリシア精神の理解全体にとっても重要なのは、ギリシア文明のなかには、人間が超感覚的世界と関わっていた古の神性の影像のみがあったために、人間が徐々に神々の世界から出て人間自身の、完全にひとりひとり個人的な靈的能力を用いるようになったということです。このことは段階的に起こりました。古の神々の時代についてなおも感じられていたことが、今度は芸術的な像のなかに現われてくるさまを、私たちはアイスキュロスのドラマのなかにまだ見ることができます。ところがソフォクレスに至るやいなや、人間はいわばこの、神的一靈的存在と自分をひとつと感ずることから引き離されます。そしてそれから、ある観点からすればあまり評判の良くないのもっともな、ある名前と結びつくものが登場します、世のなかにはさまざまな観点があるものですが、

よろしいですか、実際ギリシア古代においては、歴史を記述する、ということは必要ありませんでした。いったい何のために歴史がいるのでしょうか？当時は重要な過去の出来事の生きたシルエット[Abschattung]がありました。歴史は、秘儀において示されるもののなかに読みとられました。影像が、生き生きとした影像があったのです。いったい歴史として何を書き留めると言うのでしょうか。それから、これらの影像が下の世界に沈んでしまう時代がやってきました、人間の意識はもはや影像を受け取ることができなくなりました。ここではじめて、さあ歴史を書こうという衝動が生まれたのです。ここで最初の歴史の散文家ヘロドトス(1)が登場しました。そしてこの時から多くの名を挙げることができるでしょう、いわば人類を神的一靈的なものから引き離し、純粋に地上的なものなかに据えることが常に目指されるようになったのです。けれどもギリシア精神がこうしてまったく地上的になっていく、その上には、いつもひとつの輝きがありました、明日私たちはこれについて聞かされるでしょうが、これはローマ精神にも中世にも受け継がれませんでした。けれどもひとつの輝きがあったのです。影像から、ギリシア文明の黄昏のなかで光を失ってゆく影像から、それらは神的な起源を持っていたということをひとはなおも感じ取り、感受していました。

そして、あらゆるもののさなかに、文化の断片とでも申し上げたいかたちでそのギリシアに存在していたすべてについて解き明かされる隠れ家のようなあらゆるもののさなかに、エフェソスはありました。ヘラクレイトス、最も偉大な哲学者たちの数々、プラトンも、ピュタゴラスも、彼らは皆まだエフェソスから学んでいました。エフェソスとは真に、ある時点まで古えのオリエントの叡智を維持してきたものだったのです。そして、アリストテレスとアレクサンダーであったあの個人たちもまた、ヘラクレイトスよりも少し後になってから、その叡智を経験することができました、オリエントの秘儀のなかにまだ古(いにしえ)の智としてあったものは、エフェソスの秘儀のなかに遺産として残されていたのです。エフェソスで秘儀の本質として生きていたものは、とりわけアレクサンダーの魂と密接に結びつきました。さて今や、あの歴史的な出来事が起こります、凡俗な人はこれを表面的な偶然とみなしますが、これはまさしく、人類進化の内なる連関に深い深い根拠を持つ出来事なのです。

この歴史的な出来事の意味を見通すことができるように、ひとつ以下のことを魂の前に呼び起こしてみましょう。考えてみてください、のちにアリストテレスとなった人の魂と、アレクサンダー大王となった人の魂、この両者の魂のなかで、太古の時代に由来して内的に加工されたものがまず生き、次いで、エフェソスにおいて彼らにとって途方もなく価値あるものとなったものが生きました。アジアがまるごと、とでも申し上げたいのですが、ただしエフェソスでギリシア的になった形をとって、この両者の魂のなかに、とりわけのちにアレクサンダー大王となった魂のなかに生きたのです。さて、この人物の性格――私はこれをギルガメッシュ時代から述べました――を思い浮かべ、さらによく考えていただきたいのです、さて

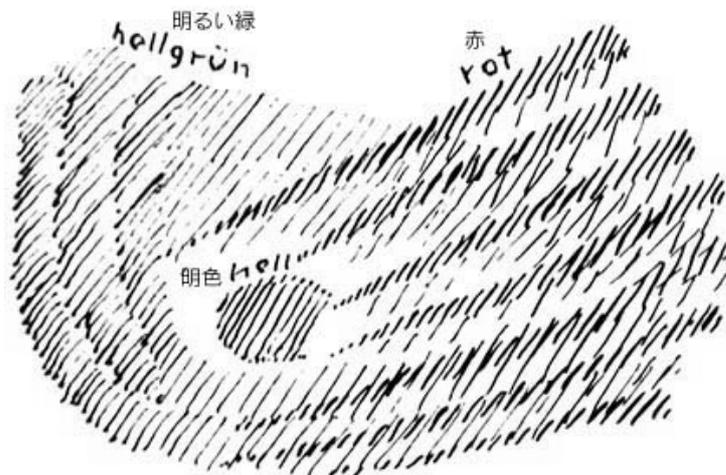
今やアレクサンダーとアリストテレスの生き生きとした交流のなかで、古オリエントとエフェソスに結びついていた智が繰り返されました、新たな形をとって繰り返されたわけです。このことをひとえに思い浮かべていただきたいのです。もともとこの両者の魂のなかで途方もない強度をもって生きた巨大な記録、この巨大な記録であるエフェソスの秘儀が存在していたなら、つまりアレクサンダーとしての受肉においてもアレクサンダーがエフェソスの秘儀に出会ったとしたら、どういうことにならざるを得なかったでしょうか！このことを思い描いていただきたいのです、そしてさらに事実を正しく評価していただきたいのです、アレクサンダーが生まれた日に、ヘロストラトス[Herostrat]がエフェソスの聖域に燃える松明を投げ込み、そのためエフェソスのディアナ神殿は、アレクサンダーの生まれた日に、冒涇者の手によって燃え尽きた、という事実(*1)を。アレクサンダーの記念碑的記録と結びついていたものはもはや失われました。それはもうなくなり、結局今はただ歴史的使命として、アレクサンダーの魂とその師アリストテレスの魂のなかにあるのみとなったのです。

さてここで、彼らのなかで魂的なものとして生きたものを、私が昨日、地の配置から読みとれるもののように、アレクサンダー大王の使命のなかに示したものと結びつけてみてください。すると今や皆さんも理解なさるでしょう、オリエントにおいて現実に、神的一霊的なもののリアルな顕現であったものは、エフェソスとともに消し去られたようになったのです。ほかの秘儀は根本において、伝統を保持し続けているのみの衰退した秘儀[Dekadenzmysterien]にすぎませんでした、たとえそれが非常に生き生きとした伝統であったにしても、またとりわけ素質のある性質のなかに当然ながら霊視的な力を呼び起こすような伝統であったとしても。古の時代の偉大さ、巨大さはもうありませんでした。アジアからやってきたものは、エフェソスとともに消し去られたのです。今や皆さんは、アレクサンダー大王の魂のなかの決心を正しく評価なさるでしょう。かつて有していたものを失ったこのオリエントに、ギリシアにおいて影像のなかに自らを保管してきた形で、せめてそれがもたらされねばならない！という決心です。――それとともに、移動できうる限りアジアへ移動しようというアレクサンダー大王の思いが生じたのです、オリエントが失ったものを、ギリシア文化の影像のかたちでオリエントにふたたびもたらすために。

そして今や私たちは、このアレクサンダー大王の遠征とともに、実際まったく驚くべきしかたで行われたのは文化征服ではない、ということがわかります、いかなるかたちであれアレクサンダー大王はヘレネントゥム(ギリシア文化[Hellenentum])を外的なしかたでオリエントにもたらそうとするものではありません、いたるところで土地の風習を受け入れるばかりでなく、いたるところで彼は、人々の心、心情から考えることができます。彼がエジプトのメンフィスに行くと、彼は、それまで支配していた霊的なあらゆる奴隷拘束具からの解放者とみなされます。彼はペルシア帝国に、ペルシアには不可能であったある文化、文明を浸透させます。彼はインドまで押し進みます。彼はヘレニズム文明とオリエント文明との間に宥和を、調和を生み出すというプランを立てます。いたるところに彼は学院(アカデミア[Akademien])を創設します。後世にとって最も重要な意味を持つのは、彼がエジプト北部、アレクサンドリアに創設した学院ですね。けれども最も重要なことは、彼がアジアのいたるところに大小の学院を設立し、そこでその後の時代に、アリストテレスの諸著作と、アリストテレスの伝統が培われた、ということです。そしてこれは数世紀を通じて西南アジアにまで作用し続けました、アレクサンダーが開始したものが相変わらず弱々しい残像のように繰り返される、とでも申し上げたいしかたで作用し続けたのです。アレクサンダーはまず、力強い一撃で、自然智をかなたのアジアに、インドの中へと植え付けました――早く訪れた死のために、彼はアラビアまで行くことはできませんでした、アラビアに行くことが彼の主要目的だったのですが。インドの中へ、エジプトの中へ、いたるところへと、アレクサンダーは自然霊の智[Naturgaeist-Wissen]としてアリストテレスから受け取ったものを移植しました。そして彼はそれをいたるところに据えました、それを受け取るべき人々が、それを自分たちに押しつけられたなじみのないヘレニズム的なものと感じるのではなく、自分たち自身のもので感じ、それによって、実り豊かなものとなるように据えていったのです。実際のところ、そこで引き起こされたようなことを起こすことができたのは、このアレクサンダー大王のような火を吹くような性質の人だけでした。常に後援軍がやってきたからです。後の時代の多くの学者もまたギリシアを出て行きました、とりわけ学院のうちあるものは――エデッサ郊外にゴンディシャプールの学院がありました――数世紀にわたって繰り返しギリシアからの移住を経験したのです。

ここで、途方もないことが成し遂げられました、オリエントからやってきたもの(描かれる、両方が重ね合わせられる；黒板原画8参照、右から左への赤、明色の斑点)、ヘロストラトスの松明によってエフェ

ソスで止められたもの、これが、ギリシアにあったその影像によって、また照らし出されたのです（左から右への明るい緑）それは、東ローマの暴虐によって（ 2 ）ギリシアの哲学者たちの学院が紀元後6世紀に閉鎖され、最後のギリシア哲学者たちがゴンディシャプールの学院へと逃れていった最後の幕まで続きました。



それは、先に進んだものと、残存されてきたものが相互に働きかけあうというものでした。このことによって、多かれ少なかれ無意識的であったにせよ、実際のところこの使命のなかにあったものは、ある意味でギリシアにおいてはルツィファー的なしかたで文明生活の波が到達し、かなたのアジアにおいてはそれがアーリマン的なしかたで残されていた、エフェソスに[両者の]調停があった、ということなのです。そしてアレクサンダーは、エフェソスが物質的には彼の誕生した日に崩壊してしまったために、霊的なエフェソスを、その太陽光がオリエントとオクツィデントを照らすべく建設しようとしたのです。深い意味でアレクサンダーの意図の根底にあったものは、西南アジアを通してインドの内部まで、アフリカのエジプトを通して、ヨーロッパ東方を通して霊的なエフェソスを建設するということでした。

この背景を知らないと、西洋の人類の歴史上の進化を理解することはできません。と申しますのも、このことが起こった直後に、つまりここで太古の由緒あるエフェソスを広範囲に拡げようとするのが試みられた後、結局エジプトのアレクサンドリアにおいて、くすんだ写字の形ではあっても、エフェソスにおいてかつて輝く広い文字のなかにあったものが保存されたからです。そして、このエフェソスの遅咲きの花が咲き誇った後、かなたの西方では今やまったく別世界であるローマ精神が勃興していました、もはやギリシアの影像とは関わりなく、人間の本質のなかにはこの古の時代への追憶のみしか残されていないローマ精神が。したがって、歴史において研究される最も重要な区切りは、エフェソスの火災の後アレクサンダーによって霊的なエフェソスが建設されたときの区切りなのです、この霊的なエフェソスはその後、最初はローマ精神として、次いでキリスト教その他としてさらに西方で勃興していくものによって押し戻されるのですが。そして、人類の進化は次のように言うときのみ理解されます。つまり、知性で理解し、意志から働きかける私たちのやりかた、心情気分を持った私たちそのままに、私たちは古代ローマを振り返ってみることができる。そのすべてを理解できる。ところがギリシアを、オリエントを振り返ってみることはできない。その場合イマジネーションのなかで見なければならぬ、そのためには、霊的に観ること[geistiges Schauen]が不可欠である、と。

そう、南に向かっては、通常の素っ気ない散文的な知性をともなった歴史的生成のなかで見ていくことも許されるでしょう、けれども東方に向かってはそれは許されません。と申しますのも、東方を見るとき、私たちはイマジネーションのなかで見なければならぬからです、背景にあるアトランティス後の太古アジアの力強い秘儀の神殿を。そこでは、祭司賢者たちが弟子のひとりひとりに、宇宙の神の一霊的なものとの連関を明らかにし、私が皆さんに描写しましたようなギルガメッシュ時代に受け入れられることができたような文明が存在していたのです。さらに私たちは、この驚くべき神殿がアジア中に拡散されたのを

観るとともに、いかにエフェソスが中心になっているかを見なければなりません、アジア中に拡散された神殿のなかで色褪せてしまったものの多くをまだ維持しながら、すでにギリシア精神のなかに移行していたエフェソスが。人間はもはや、エフェソスで神々の啓示を受け取るために、星位や季節の到来を待つ必要はありません、人間は、黙想をすれば、人間が成熟に至ったときに供犠に捧げるものによって、神々に近づくことができるのです、神々が恩寵豊かに人間のところにやってくるわけです。そして今や私たちは、この像（光景[Bild]）によって再現される世界に、ヘラクレイトスの時代に、皆さんにお話した人物たちが準備されているのを見ます、今や私たちは、[紀元前]356年、アレクサンダー大王の誕生した日に、エフェソスの神殿から火災が燃え上がるのを見ます。アレクサンダーは生まれ落ち、師アリストテレスを見出します。そして、この天へと昇っていくエフェソスの火災から、理解できる人々にとって、このように響いてくるかのようです、古の物質的なエフェソスとその中心中核として記憶のなかに存在することのできる場所に果てしなく、霊的なエフェソスを建設する、と。

このように私たちは秘儀の地のあったこの古のアジアの像（光景）を見ます、前景に燃え上がるエフェソス、その弟子たち、そしてほぼ同時期、少し後に、ギリシアが人類の進化のなかで与えることのできたものをあちらにもたらしたアレクサンダーの遠征、そしてその結果アジアがその内実をなくしてしまっていたものが像としてアジアにやってくるのです。

そしてはるかに見晴るかし、そこに巨大なものとして起こるものによって私たちのイマジネーションに翼が与えられて、私たちはイマジネーション的に捉えなければならない歴史の真の古い断絶を振り返ります。そしてそのときはじめて私たちは、ローマ世界が、中世世界が、現代の私たちにまで続いてきている世界が、前面に上昇してくるのを見るのです。その他のあらゆる区切り—古代、中世、近世、その他私たちが区分と称しているようなもの—は、根本において誤った観念しか呼び起こしません。私が今皆さんの前にお見せしましたこの像（光景）だけが、皆さんがそれをますます深く追求していられるなら、今日に至るまでヨーロッパの歴史の生成のなかに生じている秘密についても真の展望を皆さんに与えてくれるのです。これについては明日さらに続けましょう。

編註

1 ヘロドトス：Herodotos von Halikarnassos 前5世紀、最古のギリシアの歴史家、ペルシア戦争史の記述者。

2 東ローマの暴虐によって：ユスティニアヌス[Justinian]（東ローマ皇帝（527-565）、農民の息子）は、529年にアテネに対して、当地では哲学を教えるはならないという勅令を発した。そのため、アテネの最後の哲学者7人がローマ帝国を去り、ペルシアに移住した。

Ernst von Lasaulx 『ヘレニズムの没落とキリスト教会による神殿財宝の吸収』（1854）を参照のこと。H. E. Lauer 編『埋もれたドイツの著作』（1923 シュトゥットガルト）に再出、とくに196頁以下。

訳註

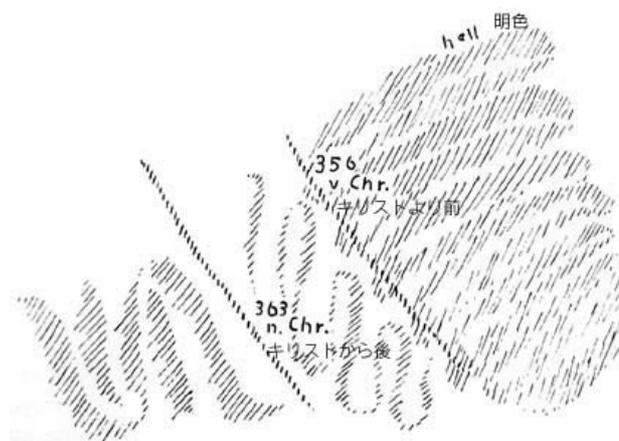
* 1 アレクサンダーの生まれた日に：歴史に名を残そうと、前356年、ギリシアの王ヘロストラトス [Herostratos]は、エフェソスのアルテミス神殿を焼き払った。Herostrat「売名的犯罪人」の意味の由来。

ゴルゴタの秘蹟前の三世紀から四世紀までと、ゴルゴタの秘蹟後の三世紀から四世紀まで、この間六百年から八百年にわたりますが、この時代は、東洋との関連という点で西洋の歴史を理解するためにとくに重要です。私がここ数日お話ししてきました出来事、これはアリストテレス主義（アリストテリスムス）の登場とマケドニアからアジアへのアレクサンダーの遠征において頂点に達しましたが、この出来事の本質とは、これらの出来事が、まだ秘儀の本質への衝動のなかにまったく浸りきっていたオリエントの文明にとって、ある種完了させるものとなる、ということです。

このまぎれもなく純粋なオリエントの秘儀衝動のいわば終焉は、あの冒瀆的なエフェソスの火災でした。そこにはいわばヨーロッパにとって、ギリシアにとって、神に浸透された古（いにしえ）の文明が秘儀の伝統のかたちで、いわば影像のかたちで残されていたものがあったのです。そしてゴルゴタの秘蹟後の四世紀、私たちは別の出来事を通して、いわば秘儀本質の廃墟のうちになおも残存していたものを見ることができます。私たちはこれを背教者ユリアヌス（ユリアヌス・アポスタータ[Julianus Apostata]）（ 1 ）に見ることができるのです。ローマ皇帝、背教者ユリアヌスは、四世紀に、エレウシス秘儀の導師の最後のひとりによって、まさにひとが参入させられることのできたものに参入させられました。つまり、背教者ユリアヌスは、オリエントの古代の神々の秘密であったもののうち、紀元後四世紀にエレウシスでまだ体験することができた分だけを体験したわけです。

こうして私たちは、ある時点に、ある時代の出発点に、エフェソスの火災を置きます。エフェソスの火災の日はアレクサンダー大王の誕生日にあたります。この時代の終わり、つまり363年には、命日がありません、かなたのアジアでの、背教者ユリアヌスの非業の死があります。こう言ってよいかもしれませんが、この時代の真ん中にゴルゴタの秘蹟がある、と。ここで、私がつた今区切りましたこの時代は、人類の全進化史のなかでそもそもどう見えるか、ということをもう一度見ておきましょう。私たちはまさに今、奇妙な事実を前にしているのです、人類の進化をこの時代の向こうまで遡って見通したいと思うなら、私たちはその観るということにおいて、何か別のものに似たことをしなければならない、という事実をです。ただ、私たちは通常このふたつのことを関連づけることはありませんが。

思い出してください、私は『神智学』（ 2 ）において、私たちが考慮すべき諸世界を示す必要がありました、つまり、物質界、それに境を接する中継的世界つまり魂界、そして人間の最高の部分だけが入っていくことのできる世界としての霊界（ガイスターラント、霊の国[Geisterland]）です。そして、この霊界、つまり現在人間が死と新たな誕生との間に経験するこの霊界の独自の特性を度外視し、このように霊界の普遍的な特性に目を向けるなら、こういうことになります、つまり、この霊界を理解するためには私たちが私たちの魂状態を方向づけしなすなければならないのと同じように、この時点の向こう側にあるものを理解するためには、私たちの魂状態を方向づけしなすなければならないのです。今日の世界に適用できる概念と表象をもって、エフェソスの火災の背後にあるものを理解できるなどと思ってはなりません。ここでは別の概念と表象を育成しなければならないのです、人間が呼吸プロセスにおいて外部の空気と関わり合っているのと同様に、自分たちは魂を通じて絶えず神々と関わり合っているのだ、とまだ知っていた人たちを見晴らすことをも許すような概念と表象を。



すると今や私たちは、いわば地上のデヴァカン[Devachan]、地上にある霊界（霊の国）であるこの世界を見ます、物質的世界はこの世界には何の役にも立たないからです。次いで、キリストより前の356年からキリストから後の363年までのあの中間の期間[Zwischenzeit]が来ます。さてそれではこの中間の期間の向こうには何があるのでしょうか？その向こうにはアジアの方向へも、ヨーロッパに向かって、まさに概念において現代の人類がそこから発してきた世界があります、ちょうど古代人類がオリエント世界からギリシア世界を経てローマ帝国へと入って行ったように（図参照）、と申しますのも、中世の数世紀を通じて現代に至るまで文明として発達してきたもの、これは、秘儀の本質の本来の内容を度外視すれば、人間がその概念と表象をもって育成しうるものを基礎として形成され、展開されてきた文明だからです。ギリシアではすでにヘロドトス以来、それが準備されてきました、ヘロドトスは歴史の事実を外的なしかたで記述し、霊的なものにはもはや近づかないか、せいぜいのところきわめて不十分に近づいただけでした。この文明はますますいっそう形作られていきます。けれどもギリシアには、霊的な生活を思い出させたというあの影像の息吹のいくばくかがあいかわらず残っているのです。それに対してローマにおいては、現代の人類に親和性のあるあの時代が始まります、ギリシアの魂状態であったものとさえまったく違うしかたで、ある魂状態を得るあの時代が。背教者ユリアヌスのような人物のみが、古（いにしえ）の世界への抑えがたい憧れのように何かを感じ取り、そして彼はある種の敬虔さをもってエレウシスの秘儀へと参入することを受け入れます。けれども彼がそこで得るものには、もはや何の認識力もありません。何はさておき、彼は、オリエントの秘儀の本質の伝統としてあったものをもはや魂の内部をもってしては完全に理解することはできない世界の出身なのです。

もしアジアの後にギリシア、ローマが続かなかったとしたら、今日の人類は決して発生しなかったでしょう。今日の人類というのは、個人性（パーソナリティ[Personlichkeit]）に、ひとりひとり別個の[individuell]個人性に基づくあの人類です。オリエントの個人性、オリエントの人類は、ひとりひとり別個の個人性に基づくものではありませんでした。ひとりひとは、自らを、絶えざる神秘的なプロセスの一分岐と感じていたのです。神々は地球進化に対して意図を有し、神々はあれこれと意志しました、それでこの地上であれこれのことが起こったのです。神々は人間の意志のなかにインスピレーションを与えつつ働きかけました。皆さんに示唆しました力強い人物たちがオリエントで行ったことはすべて、神々のインスピレーションだったのです。神々が意志し、人間が行為しました。そして古代世界にあって秘儀とはまさに、この神々の意志と人間性とを正しい軌道へと導くことに適していたのです。

エフェソスにおいてはじめて事態は変化しました。皆さんに申しましたように、エフェソスでは、秘儀の入門者たちはもはや季節の経過ではなく、彼ら自身の成熟を頼りにせざるを得ませんでした。ここではじめて個人性の最初の痕跡が現れてきたのです。その前の受肉でのアリストテレスとアレクサンダー大王も、当地で個人性の衝動を受け取りました。しかし今、オリエントの秘儀の本質たる人間でありたいという最後の憧れを背教者ユリアヌスが持った時がその黎明となる時代がやってきました。今や、人間の魂において、ギリシアにおいてさえそうであったものとはまったく別の状態になる時代が到来するのです。

エフェソスの秘儀においてたとえば行を達成したというような人間を思い浮かべてみてください。エフェソスの秘儀によってではなく、その人があの時代に生きたということによって、その人の魂においてはこういう状態だったのです。よろしいですか、今日、普通言われるようにある人が思い出すということをするとき、彼は何を思い出すことができるでしょうか？彼は誕生以来個人的に体験した何らかのことを思い出すことができます。ある年齢のひとがいます、彼は二十年前、三十年前に体験したことを思い出します。内的な記憶想起は個人的な人生を越えていくことはありません。たとえばまだエフェソスの文明に加わっていた人々の場合にはそうではありませんでした。エフェソスにおいて達成されるべきあの行のほんの痕跡を得ただけで、彼らは思い出し、今日個人的な人生の記憶が浮かび上がってくるように、地上以前の生存や出来事が彼らの魂のなかに浮かび上がってきました、自然の個々の領域における地球進化に先立つ月進化、太陽進化、といった出来事が。このとき人は自らの内をのぞき込むことができたのです、そして宇宙的なものを、人間と宇宙的なものとの結びつきを、いわば人間の宇宙的なものへの依存を見たのです。人間の魂のなかに生きていたものは、自己記憶（自己想起[Selbsterinnerung]）でした。

つまり私たちはこう言うことができます、私たちはここにひとつの時代を持つ、エフェソスで宇宙の秘密を体験することのできたあの時代だ、と。当時は、人間の魂が宇宙における太古を思い起こすということがありました。この想起（記憶）より前には、太古の時代の内部に実際に生きるということがありまし

た。そのなかで、単に太古の時代をのぞき込むということだけが残ったのです。ギルガメッシュ叙事詩が語っている時代においては、私たちは、宇宙における太古についての人間の魂の記憶、とすることはできません。そこでは、現在における太古の体験、と言わなければならないのです。――今や、アレクサンダーから背教者ユリアヌスに至るあの時代がやってきます。さしあたってはこの時代を飛ばしましょう。次いで私たちは、中世と近代の西欧文明がそこから育ってきた時代に至ります。そこにはもはや、宇宙における太古についての人間魂の記憶も、現在における太古の体験もなく、残されているのは伝統だけでした。

第一に：現在における太古の体験

第二に：宇宙における太古についての人間の魂の記憶

第三に：伝統

ひとは起こったことを記録することができました。歴史が生じたのです。この歴史というものはローマ時代に始まります。この圧倒的な違いを考えてみてください！以前のエフェソスの入門者たちが加わった時代のことをよく考えてください。彼らには歴史の書物は必要ありませんでした。起こったことを書き留めるなどということは、彼らにとってはこっけいに思われたことでしょう。と申しますのも、じっくりと、じゅうぶんに深く考えざるを得なかったからです、そうすれば、意識の底から、起こったことが浮かび上がってきたのです。そして、これを心理分析として描写する現代の医者などはおらず、生き生きとした記憶からかつて存在したものをこのように取り出してくるのは、まさしく人間の魂の歓喜だったのです。

それから、人類がこのようなことを忘れてしまい、起こったことをかろうじて記録せざるを得なくなった時代になりました。けれども、以前人間の魂のなかで宇宙的な記憶力であったものを人類が退化させて行かざるを得なかった期間に、つまり、世界の出来事を記録する、歴史を書く云々ということを人類が不器用に始めざるを得なかった期間、この期間に、人間の内部では、個人的記憶力[*das persönliche Gedächtnis*]、個人的記憶（想起）というものが発達したのです。――どの時代にもそれぞれ独自の使命が、独自の課題があります。――ここで皆さんは、私が最初の講義で、時間記憶が登場した、と説明いたしましたことの別の面をごらんになるわけです。この時間記憶の最初の揺籃の地はギリシアでしたが、その後他ならぬローマ・ロマン文化を経て、近代にまで至る中世へと発展してきました。そしてすでにもう背教者ユリアヌスの時代に、この個人文化へのきっかけが芽生えたのですが、このことを証明しているのが、背教者ユリアヌスはエレウシスの秘儀への参入を受け入れたけれども、それが彼にはもはや何の役にも立たなかったということです。

さて今や、西洋の人間は紀元前三、四世紀から現代に至るまで、地上生活の間霊的世界のまったく外部で生きるという時代となります、単なる概念と理念、抽象のなかで人間が生きる時代です。ローマにおいては神々でさえ抽象となります。人類がもはや霊的世界との生き生きとした関係について何もわからない時代がやってくるのです。地球はもはや、諸天の一番下の領域であるアジアではなく、地球はそれ自体ひとつの世界となり、諸天は遠く、人間の観照のなかで薄れていきました。そしてこう言うことができます、ローマ文化として西洋に到来したものの影響のもとに、人間は個人性を発達させる、と。

霊界[*Geisteswelt*]に、上方の霊の国[*Geisterland*]に接して下に魂界[*Seelenwelt*]があるように、ちょうどそのように、今や時代にしたがって、西洋の文明であるものつまり一種の魂界も、この霊的なオリент世界に接しています。そしてこの魂界がそもそも直接現代の日々にまで入り込んでいることが明かです。けれども今日人類は大多数においてまだ、大きな飛躍が実際に進行中なのだ、ということに気づいておりません。私の話をしばしば聴かれた何人かの友人の皆さんは、ある時代が過渡期であるということについて私が話すことを好まないのはご存じでしょう、なぜならまさにどの時代もが過渡期であり、つまり以前のものから後のものへと移行しているからです。問題はただ、何から何への移行が起こっているのかということです。けれどもまさに私が皆さんにお話ししたことによって示唆したのは、この移行が、ひとが霊の国から魂界へ、そしてそこからはじめて物質界へ至る、というようなものであるということです。おお、今まで発展してきた文明のなかには、いつもある種の霊的な響き[*Anklaenge*]がありました！唯物主義（マテリアリズム）のなかにすらある種の霊的な響きが漏れ出ていたのです。あらゆる分野における本来の唯物主義というのは、十九世紀半ばになってはじめて出てきたもので、まだきわめてわずかのひとにしか唯物主義の完全な意味は理解されておりません。しかし唯物主義は巨大な力をもって存在しています、そして今日の時代は、第三の世界への過渡期に当ります、前のローマ世界がオリент世界と違っていたように、このローマ世界ともまったく違う第三の世界への過渡期です。

さて、申し上げたいのですが、アレクサンダーとユリアヌスの間のある時代にいわば触れずにおきました、この時代の真ん中にゴルゴタの秘蹟が起こるのです。このゴルゴタの秘蹟はもはや、人々が秘儀を理解していた時代のように受け取られませんでした、そういう時代であれば、ナザレのイエスという人間のなかに生きたキリストについて、人はまったく別の表象を得たことでしょう。ゴルゴタの秘蹟の同時代人で秘儀に参入したわずかのひとのみが、まだそういう表象を有していました。ヨーロッパの人類の大多数は、ゴルゴタの秘蹟をスピリチュアルに理解するためのどんな表象も持っていませんでした。したがって、ゴルゴタの秘蹟が地上に根付くしかたはまず、外的な伝統を通じて、外的な伝承を通じて、というものでした。最初の数世紀における秘儀参入者のグループ内においてのみ、ゴルゴタの秘蹟と同時に起こったことをがスピリチュアルに理解されることができたのです。

けれども、また別のこともありました、これについてはつい先日の講義で(3)すでに何人かの方々にはお話ししましたが。彼方のヒベルニア、アイルランドには、古アトランティスの叡智の余韻が残っていました。一昨日皆さんに概略をお話ししたヒベルニアの秘儀においては、入門者には、二つの暗示的な姿をとって、古アトランティス人たちが見ていたように鋭く世界を見る機会がありました。そしてこのヒベルニアの秘儀は、自らのうちに厳しく閉ざされた、とほうもなく厳粛な雰囲気覆われたものでした。ヒベルニアの秘儀はゴルゴタの秘蹟の数世紀前にあり、ゴルゴタの秘蹟の当時にもありました。彼方のアジアでゴルゴタの秘蹟が起こり、その後伝統的歴史的に福音書のなかに伝えられることがエルサレムで起こりました。けれども、人間のだれかれの口が情報をもたらしたわけでもなく、何らかのそれ以外の結びつきがあったわけでもないのに、ゴルゴタの秘蹟が悲劇的に成就した瞬間、ヒベルニアの秘儀においては、パレスティナにおいて真のゴルゴタの秘蹟が起こったということが霊視的に知られたのです。ヒベルニアの秘儀の地において、同時に、象徴的な光景が実現したのです。その地でひとは伝統を通して学んだのではありません、そこではゴルゴタの秘蹟がスピリチュアルな方法で知られたのです。そして偉大な壮麗な出来事がパレスティナで外的物質的事実のなかにもたらされる一方で、ヒベルニアの秘儀においては、そのアストラル光のなかにゴルゴタの秘蹟の生き生きとした光景を生じさせるあの祭式がとりおこなわれていたのです。

ものごとがいかに連鎖しているか、おわかりですね、神々との古(いにしえ)の関わりが消えるとともに、一種の世界の谷間とも申し上げたいものが事実生じるのです。

東洋では、エフェソスの火災の後、神々についてのこの古い観照は墮落していきます。ヒベルニアにおいてはこの観照は存在し続けますが、これもやはり消えていきます、と言ってもそれは紀元後になってからですが。そして、ゴルゴタの秘蹟から放射するものすべてが、伝統を通じて、口承によって、展開されます。西洋で発達するのは全般に、口承のみに頼るか、あるいは後になっては外的な自然研究、純粹に感覚的な自然研究を頼りとする世界なのです、つまり、自然の分野においては単なる伝承に、歴史の分野においては文字に記録されたかあるいは口伝えによる伝承に対応しているのです。

ですから、ここに個人性の文明[*die Zivilisation der Persoenlichkeit*]がある、とすることができるのです。心霊的なもの(スピリチュアリスティッシュなもの[*das Spiritualistische*])、ゴルゴタの秘蹟は、歴史的に伝承されはしますが、もはや観られることはありません(次の図を参照)ただ生き生きと思い描いてほしいのです、背教者ユリアヌスの時代以後、スピリチュアルなものを排除した文明がいかに広がっていくか、思い描いてほしいのです。十九世紀末になってはじめて、七十年代の終わりから、いわば霊的な高みからの新たな呼びかけが人類に近づいてきました。私がしばしばミカエルの時代として特徴づけましたあの時代が始まったのです。今日はこのことを、こういう観点から特徴づけたいと思います、つまり私が言うのは、人間が古い唯物主義(マテリアリスムス)にとどまりたいと思うなら—人類の大部分は最初これにとどまりたいと思うでしょう—人間は恐ろしい奈落へと入り込んでいこう、ということです。人間は、古い唯物主義にとどまりたいと思うなら、必ず人間以下のもの[*das Untermenschliche*]に陥り、人間的な高みにとどまることはできないのです。人間的な高みにとどまるためには、人間は感覚を開かなくてはなりません。これから先得られるべきスピリチュアルな啓示に向かって人間が感覚を開くことは、十九世紀末以降、どうしても必要なことなのです。

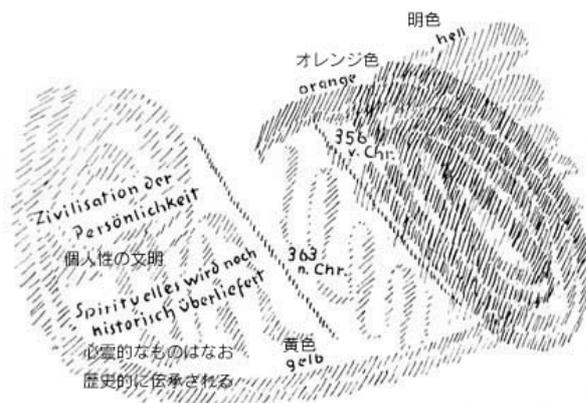
ある種の霊的な力存在たち[*geistige Maechte*]が活動していて、それらはヘロストラトスという人物のなかに、いわば外的な顕現のみを見出していました。ヘロストラトスとはいわば、ある種の霊的な力存在たちがアジアから突き出した最後の剣だったのです。そしてヘロストラトスがエフェソス神殿に松明を投げ込

んだとき、いわば彼を単なる剣か松明の延長としてかざしながら彼の背後にいたのは、魔的な存在たち [daemonische Wesenheiten] でした、要するにこのヨーロッパ文明にスピリチュアルなものをもたらすまいともくろんでいた存在たちです。

よろしいですか、これに抵抗するのがアリストテレスとアレクサンダー大王なのです。そもそもいったい何が起こったのでしょうか？アレクサンダーの遠征によってアジアへもたらされたものは、アリストテレスの自然智であったものでした、そしていたるところに、根本的な自然智が広まりました。アレクサンダーは、アレクサンドリアだけでなく、エジプトだけでなく、かなたのアジアにもいたるところにアカデミアを設立していましたが、そこに彼は古代の叡智を定着させ、その結果この叡智はそこにあって長い間保存されたのです。ギリシアの賢人たちはいつでもそこに行くことができ、そこに自分たちの安住の地を見出しました。自然智はアレクサンダーによってアジアへもたらされたのです。

ヨーロッパは正直のところ、最初この深い自然智に耐えられませんでした。単に外的な知、外的な文化、外的な文明のみを欲していたのです。そのため弟子のテオフラストスは、アリストテレス主義のなかにあったもののうち、西洋にゆだねることができたもののみを取ったのです。けれどもこのなかにはなお、とほうもなく多くのものが潜んでいます。西洋は、アリストテレスの論理的傾向の強い著作を得ました。けれどもまさにこれがアリストテレスの独特なところなのですが、アリストテレスが抽象的で論理的であるところすら、アリストテレスは他の著作者とは別様に読めるのです。内的な、スピリチュアルな、瞑想に基づいた経験とともに、ひとつプラトンを読むのとアリストテレスを読むのとの違いを見出そうと試みてほしいものです。真正の霊的な感覚を備えた現代人が一定の瞑想に基づいてプラトンを読むと、その人はしばらくして、自分の頭が物質的な頭より少し上にあるかのように、物質的な体組織から少し抜け出したように感じます。単に大ざっぱにプラトンを読むのでない人の場合、必ずそうなのです。

アリストテレスの場合はそれは別のもです。アリストテレスの場合、アリストテレスを読むことによって体の外に出るなどという感覚は決して得られません。けれども、一定の瞑想的な準備という基礎を整えてアリストテレスを読むと、まさに物質的な人間のなかで活動している、という感情が得られるでしょう。まさにアリストテレスによって、物質的な人間が前に出てきます。これが活動するのです。それは単に観察される論理学ではなく、内的に活動する論理学です。アリストテレスはそれでもなお、後からやってきてアリストテレスから論理学を形成した小物たちよりも一段上なのです。アリストテレスの論理学の著作は、ある関連においては、それが瞑想の本として理解されるときにのみ正しく理解されます。こうして、奇妙なことが起こります。ひとつ考えてみてください、マケドニアから西に向かって、中部ヨーロッパ、南ヨーロッパへと、西洋へと、アリストテレスの自然学の諸著作が単に移動したとしたら、それらは、災いに満ちたものになったであろうしかたで受容されたことでしょうか。なるほど、人々に受け入れられるものもあったでしょう、しかしそれは災いに満ちたものとなったでしょう。と申しますのも、アリストテレスがたとえばアレクサンダーに自然学的に――私はこれについての見本をお見せしました――伝えることのできたものは、エフェソス神殿の火災以前のエフェソス時代の秘儀の本質にまだ触れられることのできた魂をもって理解されなければならなかったからです。そういう魂は、かなたのアジアか、エジプトのアフリカにのみ見出されました。ですから、アレクサンダーの遠征を通じて、アジアへと、自然存在認識と自然存在洞察（黒板にさらに描かれる；右へのオレンジ色）が移動させられたのです、それはのちに弱められた姿で、あらゆる可能な道筋を通してスペイン経由でヨーロッパに到来しましたが、篩（ふるい）にかけられ、弱められた状態になっていました（右から左への黄色）。



けれども直接もたらされたのは、アリストテレスの論理学の諸著作でした、アリストテレスの思想的なものでした。そしてこれは生き続けました、中世のスコラ学のなかに生き続けたのです。

そうです、今、この二つの潮流が得られたわけです。中部ヨーロッパ的洞察に基づき、細々とではあれ、いくぶん素朴な[primitiv]人々の間にさえ広汎に流布している、とでも申し上げたいものがつねにあったのです。ひとつごらんになってください、かつてアレクサンダーがアジアへともたらした種子が、あらゆる可能な道筋を通して最初アラビアその他を越えて行き、けれどもその後十字軍参加者たちによって陸路でヨーロッパへとやってきた種子が、細々と、秘密の地においてはありますが、いたるところで生きていることを。この秘密の地に、ヤーコブ・ベームやパラケルススといった人々、その他数多くの人々が赴き、このような迂回路を通してヨーロッパの素朴な人々の間に広く入り込んだものを受け取ったのです。ここに、通常考えられているよりはるかに多く、民衆的叡智[eine volkstuemliche Weisheit]が伝えられています。民衆的叡智が生きているのです。そしてこれは、ヴァレンティン・ヴァイゲル、パラケルスス、ヤーコブ・ベーム（ 4 ）その他ほとんど名前を知られていない人々、といったような蓄えのなかに流れ込んでいることもあります。ヨーロッパに後になってはじめて到来したアレクサンドリア学派（アレクサンドリニスムス）、つまりバシリウス・ヴァレンティヌス（ 5 ）その他のなかにあったあるいは現にあるものが、豊かに輝きを発するのです。修道院においては、真の錬金術的叡智が生きていました、これは単に物質のいくつかの変化について解明するようなものではなく、宇宙万有における人間の变化そのものの最も内奥の特性について解明する叡智でした。定評ある学者たちが扱っているのは、むろん歪曲され、ふるいにかかけられ、論理化されたアリストテレスです、けれどもこのアリストテレス、スコラ学及び後には科学が哲学として扱ったこのアリストテレスは、それでもやはり西洋にとって恵みとなるのです。

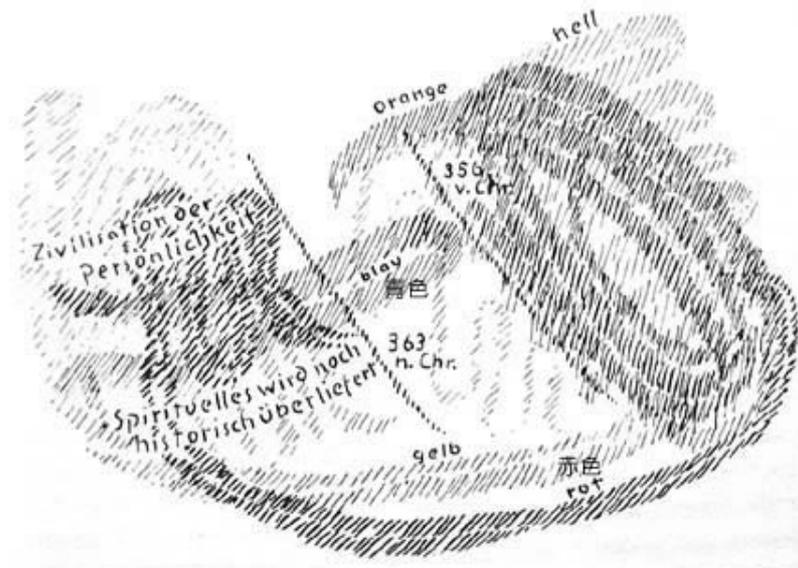
と申しますのも、十九世紀になってはじめて、アリストテレスについて何も理解されなくなり、あたかも、アリストテレスを行ずるべし、ではなくアリストテレスを読むべし、というふうに、つまりあたかもアリストテレスは瞑想の本ではないかのように、そのようにのみアリストテレスが研究されるようになったのですが、そういう十九世紀になってはじめて、人々はアリストテレスから何も得られない、という状態になったからです、なぜなら、アリストテレスは人々のなかで生き生きと作用することはなく、それは行の本ではなく研究対象であるために、単に研究されるだけだからです。十九世紀まで、アリストテレスは行の本でした。けれどもよろしいですか、十九世紀においては実際すべてにおいて、前には行であったもの、能力であったものが、抽象的な知へと変化していく、という状況なのです。

ギリシアにおいては――このもうひとつの線によってもこのことを特徴づけられます――、ギリシアにおいては、人間が洞察として有しているものは、まるごとの人間[der ganze Mensch]から出て来るのだという信頼があります。教師はギムナスト（体操家[Gymnast]）なのです。肉体的な動きのなかに神々が働き、その動いているまるごとの人間から、いわばそのとき到来して人間の洞察となるものが現れ出るので。ギムナストは教師です。ローマにおいては、のちにギムナストの代わりにレートル（雄弁家[Rhetor]）が現れます。これはすでに、まるごとの人間からはいくらか抽象化されたものですが、それでも少なくともまだ、生体の一部における人間の動きと関連しているものがありました。私たちが語るとき、何が動き始めるでしょうか！私たちの心臓、私たちの肺のなかで、私たちの横隔膜、そしてさらに下へ向かって、なんと語りが生きていることでしょうか！それはもはや、ギムナストが行っていたものほどの強度をもってまるごとの人間のなかで生きてはいませんが、それでも人間の大部分のなかでいつも生きています。そして、考えというのは、語ることのなかに生きているものの単なるエッセンスなのです。レートルがギムナストたちに代わって現れます。ギムナストはまるごとの人間に関わります。レートルがまだ関わっているのは、いわばもう四肢を閉め出した、つまり人間の一部から頭へと洞察であるものを上昇させるもののみです。そして、第三の段階は、近代になってようやく現れます、これがドクトルです、ドクトルは頭以外のものは何も訓練せず、おもに考えのみを見るようになります。いわば十九世紀においてはまだ、いくつかの大学では弁論の教授が任命されておりましたが、語ることに何かを与えるということがもはや一般的でなくなったために、万事ただ考えるということのみが欲されたために、これらの教授たちはもはや弁論を行うことができなくなってしまったのです。レートルたちは死に絶えてしまいました。[まるごとの]人間のうち、きわめて小部分のみを代表するドクトルたちが教育の指導者となったのです（ 6 ）

そして、ほんとうのアリストテレスが生きていた頃は、実際にアリストテレスから帰結として出てくるものは、行、節制[Askesis]、黙想でした。そしてこれら二つの潮流が依然として残っていました。あまり若

くはなく、十九世紀の半ばから最後の数十年までに起こったことに意識的に加わったひとは、たとえばパラケルススが地方の人々のところを遍歴したようなしかたでいくらか歩き回れば、中世の民の智慧 [Volkswissen]の最後の名残が、ヤーコプ・ベーム、パラケルススから汲み出されて、結局十九世紀の七十年代、八十年代にまで現存していたことがわかるでしょう。そして結局のところこれもまた正しいのです、つまり、とりわけ特定の結社の内部や特定の親密なグループの生活のなかで、十九世紀の最後の数十年にいたるまで、一種の実践の、内的な魂実践のアリストテリス主義が維持されていたことも。それで、こう言ってよいでしょう、一方においては、アレクサンダーによってアリストテレスからアジアへともたらされたもの、他方においては、西南アジア、アフリカを通してスペイン経由で入ってきて、バシリウス・ヴァレンティヌスといった人々やその後の人々のなかに民衆の叢智として生き返り、ヤーコプ・ベーム、パラケルスス、その他多数の人たちをも生み出したもの、これらの最後の末裔たちと、まだ知り合うことができたのだ、と。それはまた十字軍を通じて別の道筋でももどってきました。それは広く民衆のなかに入り、まだそれを見出すことができたのです。十九世紀の最後の数十年にはひとはまだこう言うことができました、ありがたいことだ、ほとんど見分けがつかず、腐敗したかたちであるとはいえ、アレクサンダーの遠征によって古代の自然智としてアジアへともたらされたものの最後の末裔たちがまだここに生きていたのだ、と。古の錬金術によって、古の認識および、自然の実質と自然の諸力との連関によって、素朴な民のなかに不思議なおも生きていたもの、それは最後の余韻でした。今日、それは死に絶えました、今日もはやそれは存在しません、もはやそれを見出すことはできず、もはやそのなかに何も認識することはできないのです。

同様に、知り合うことのできた特定の少数の人々においては、アリストテレス的な霊修行がありました。今日それはもはや存在していません。当時東方へともたらされたもの（黒板に続けて描かれる；右から左への赤色）と、アリストテレスの弟子テオフラストスという回り道を通して西方へともたらされたもの（中央から左への青色）が保存されていたのです。けれども、東方へともたらされたものは、またもどってきました。そしてこう言うことができます、十九世紀の七十年代、八十年代には、皆さんに描写しましたあの出来事を最後の末裔たちのなかに受け継いでいたものに、新たな、直接的なスピリチュアルな認識をもって結びつけられることができた、と。これは驚くべき関係です、と申しますのも、そこから見て取れるのは、アレクサンダーの遠征とアリストテレス主義は、古のスピリチュアルなものをつなげる糸を保持するためであった、唯物的な文化となっていこうとするもののなかに、効果を、新たなスピリチュアルな啓示がやってくるはずのときまで続く効果を与えるためにあったのだ、ということだからです。



よろしいですか、こうした観点のもとでは、実際にこのように思えますし、また、一見不毛に思えることも、人類の歴史的生成のなかで極めて意味深いことが明らかになる、ということは正しいのです。アジアとエジプトへのアレクサンダーの遠征は退潮して[verfluten]しただろうに、と安易に言うことはできません。それは退潮してはおりません。アリストテレスは十九世紀に途絶えた、と言うこともできます。それは途絶えておりません。二つの流れは、新たなスピリチュアルな生が始まる可能性のある時まで、続い

てきたのです。

実にさまざまな場所で皆さんにしばしばお話ししたのですが、この新たなスピリチュアルな生は、十九世紀の七十年代の終わりに最初の示唆として開始され、さらに世紀末とともにますますさかんになりました。今日私たちには、高みから私たちのもとに来ると申し上げたい完全な霊的生を開始するという課題があります。私たちがこの奇妙な関連と以前のものとこの結びつきを意識しないなら、私たちの周囲の霊的生のなかで起こっているきわめて重要な出来事に対して実際眠り込んでいることになります。今日、きわめて重要な出来事に対してほんとうになんと眠り込んでいることが多いことでしょう！けれども人智学によって人々を目覚めさせなければなりません。

今このクリスマス会議にお集まりのすべての皆さんにとっては、目覚めを引き起こしうる衝動があると思います。よろしいですか、私たちは、まさにこの日を目の当りにしております、この会議において、この悲しい出来事の一周年を見通していくことをせねばならないでしょう、私たちは、ゲーテアヌムを焼き尽くした恐ろしい火柱が燃え上がったあの日を前にしているのです。さてこのゲーテアヌムの消失について、世間が、この火災は人智学運動の発展においてとほもなく重い意味を持つ、と考えたがるならそうさせておけばよいのです。けれども、一方において、不可思議に――これについては明日以降もお話しします――オルガンのパイプやその他の金属製のものから、金属が焦げながら炎となって燃え上がり、そしてこの炎に不思議な色彩が生じたとき、このときこの物質的な炎がどのように燃え上がったかを見ていないなら、このことをやはりその完全な深さにおいて判断することはできません。記憶を昨年へと携えていかなければならないでしょう。けれどもこの記憶のなかに、物質的なものはマーヤであるという事実が生きていなければなりません、私たちは今や、心のなかに、魂のなかに霊的な火をかき立て、その炎のなかから真実を探し出さなければならないのだ、という事実が。物質的に燃えるゲーテアヌムのなかに、霊的に作用するゲーテアヌムを、私たちはぜひとも生み出さねばなりません。

私たちにかけがえのないものとなったゲーテアヌムが恐ろしい巨大な炎に包まれて燃え上がるのを一方において見、また背景に、魔的な力存在たちに導かれてヘロストラトスが松明を投げ込んだ冒瀆的なエフェソスの火災を見る、ということをしないうら、これが完全な歴史的意味において起こることができると思っはおりません。前景にあるものと、背景にあるものを、ともに感じ取ることのなかで、私たちが一年前に失い、全力で再建しなければならぬものを、私たちの心のなかにじゅうぶん深く刻み込むことのできるひとつのイメージを得ることができるかもしれません。

編註

1 背教者ユリアヌス：フラヴィウス・クラウディウス・ユリアヌス Flavius Claudius Julianus、361年から363年までローマ皇帝、キリスト教に対する背教者[von den Christen Apostata, der Abtruerninige]と呼ばれた。1917年4月19日ベルリンでの講義（『ゴルゴタの秘蹟の認識のための礎石』GA175所収）を参照のこと。

2 私は『神智学』において：『神智学――超感覚的な世界認識と人間規定への導き』（1904、GA9）「三つの世界」の章を参照のこと。

3 つい先日の講義で：第四講の 1 参照のこと。

4 ヤーコブ・ベーメ：Jakob Boeme, 1575-1624

テオフラストス・パラケルスス：Theophrastus Paracelsus, 1493-1541

ヴァレンティン・ヴァイゲル：Valentin Weigel, 1533-1588

シュタイナー『近代の精神生活の黎明のなかでの神秘主義と近代の世界観』（GA7）参照のこと。

5 バシリウス・ヴァレンティヌス：Basilius Valentinus 十五世紀の錬金術師、おそらくエルフルトのベネディクト会士。

彼の名で、1600年頃、一連の錬金術的著作が出版された。1924年4月26日のシュタイナーの講義（『カルマ的関連の秘教的考察』第2巻 GA236）参照のこと。

6 ギムナスト、レートル、ドクトル：シュタイナーはこれについてたとえば1923年8月6日の講義（『現代の精神生活と教育』GA307所収）で詳細に語っている。1924年7月24日の講義（『教育という文化世界における人間認識の教育的価値』GA310所収）も同様。

人類の歴史的進化における最後の大きな転換点（区切り）は、しばしば言及しました十五世紀の最初の三分の一の頃、悟性魂あるいは心情魂と呼ばれるものから意識魂への移行が起こった頃です。私たちは、人類にもっぱら意識魂の発達が起こっている時代に生きているわけですが、この時代には、自然のより深い衝動や力、すなわち自然における霊の衝動や力と人間を関係づける真の洞察は失われてしまいました。私たちは今日、人間と人間の物質的な成り立ちについて語るとき、たとえば化学者が今日いわゆる元素（エレメント[Element]）と定めている化学物質について語ることにさえします。けれども、何らかの食物が、炭素、窒素云々を含むことを知ったところで、それはもはや人間認識にとって、この時計がガラスとあるいは銀とその他いくつか別の素材からできていると知ることが時計のメカニズムにとって持つ以上の価値はありません。このように、実質的なものを、水素、酸素云々といったこのきわめて外的な抽象に還元することはすべて、結局真の人間認識はもたらしません。時計のメカニズムがカシステムの連関から知られなければならないのとまったく同様に、人間の本質も、自然の諸領域に分割され宇宙のなかで別様に作用している宇宙のさまざまな衝動が、人間のなかで今まさにどのように発現しているか、その発現のしかたから知られなければならないのです。すでに退化したとはいえ、生まれつき良い本能に恵まれた人物たちによって十四、十五世紀まではいくらかのことが可能であったのですが、このようにそれでもまだ比較的残っていたもの、人間と宇宙との連関を真に見通すものは、パラケルススやヤーコブ・ベームなどの少数の例外を除いて、少しずつ、完全に消え去ってしまいました。

十五世紀以来徐々に形成された近代科学は、たとえば、そうですね、植物界、動物界と人間との関係について何を知っているでしょう！科学はまさに植物の化学的成分を調べ、それから何とかしてこの化学的成分の人間にとっての意味を研究しようとします、そして場合によっては、健康な人間と病気の人間への物質的作用について表象を形成しよう——これもたいがい放棄されます——とするのです。けれども結局これらすべては人間をめぐる認識の間をもたらすだけです。歴史的な洞察に基づいて人間認識において前進したいと思うなら、今日まったくもって重要なのは、人間の外にある自然と人間との関係についてまた知ることになるということです。

十五世紀の最後の大きな飛躍までは、人間は明確な感情を持っていました、外部の自然のなかの金属と、人間の実質的なもの、人間の物質的なものに目を向けるとき何らかのしかたで現れてくる金属、そうですね、たとえば人体組織のなかにさまざまな結合して現れる鉄、あるいはマグネシア（苦土[Magnesia]）などといった金属との間にどれほど大きな違いがあるか、ということについて、明確な感情があったのです。人体組織そのものを調べれば見出せるような金属と、人体組織を調べてもまずは見つからない金属が存在する、ということ、地上の金属に見られるこの違いについて、十五世紀までは、深い、根本的な感覚がありました。と申しますのも、人間はミクロコスモスである、と言われていたからです。マクロコスモスである外部世界に見出せるものはすべて、何らかのしかたで人間のなかに見出せるのです。——これは何か普遍的抽象的な原理などではなく、かつて何らかの方法で秘儀参入に近づいたひとにとってそれは、人間の本質と宇宙の本質に必然的に結びつけられたものとして続いていきます。と申しますのも、全自然をその衝動と物質的な内容のすべてと関係づけるときにのみ、人間をほんとうに認識できるようになるからです。そのとき人間の本質についての像が、イマジネーションが得られます。そしてもし人間そのもののなかに見出すことのできない何か外部の自然のなかにあるとしたら、この像、このイマジネーションは、損なわれるだろう——そうですね、まだ九、十、十一世紀の初頭に自然研究者であった人物は、こう考えたのです。けれども、人間が物質的な食物を通じて取り入れるものは、人間の物質的な生体組織を、生体の組織全般を維持しているものの一部にすぎない、おそらくは最も重要なものではない、ということも当時はよく知られていました。

さて、呼吸というのもやはり新陳代謝なのですが、物質的な栄養から呼吸へと上昇するということには容易に思い当たりますね。ところが今日の人間は、さらに上昇していく、ということには思い至らないのです。十五世紀の自然研究者は、知覚というものに目を向ければ、単に目によって見ているというだけではなく、知覚プロセスが続く間、限りなく微細に分割された物質的なものが宇宙万有から目を通じて取り入れられるのだ、ということをはっきりと理解していました。このように目を通して、耳を通して、それ

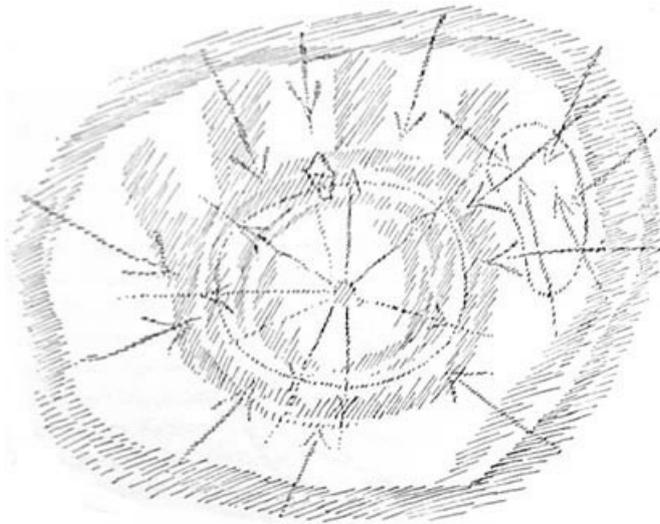
は起こるのですが、人間の生体組織のほかの部分を通してこれは起こりました。そして最も重要なことと見なされたのは、人間が粗雑な状態では自らのうちに有していないもの、そうですね、例えば鉛ですが、人間はこれを、まず予想できないほど限りなく微細に分割された状態から摂取する、ということです。鉛はさしあたり体内には検出されない金属です。けれども鉛は、拡散した金属、人間の思慮の及ぶ全宇宙にまで非常に希薄な状態で拡散した金属なのです。そして人間は鉛を、呼吸プロセスよりもずっと精妙なプロセスを通じて宇宙から取り入れます。人間は絶えず、周辺の[peripherisch]方向に自分から物質を分泌しています。皆さんは単に爪を切るというだけでなく、絶えず皮膚から物質を分泌しているのです。けれどもこれは単に退去するというだけでなく、物質が去っていく一方でほかの物質が摂取されるのです。

よろしいですか、このように中世の九、十、十一、十二世紀の自然研究者はまだこうした思考の道筋のなかに生きていました。彼にとってはまだ、諸々の物質が、力が、どのように作用しているかを定めるのは、秤などではありませんでした、無骨な測定器でもありませんでした、そうではなく、自然の内なる特質[Qualitaeten]のなかに入り込んでいくこと、自然の内なる衝動と、自然と人間の関係のなかに入り込んでいくことでした。そうすることによって、この十五世紀までは多くのことが知られていました、それらをまた知ることが始められなければなりません、今日人間についてはまったく何もわからなくなっているからです。

人間の成り立ちを探究して、一種の分類、一種の一般的なプランとでも申し上げたいものを与えるために、私たちはまず、人間は物質体、エーテル体、アストラル体、自我あるいは自我組織[Ich-Organisation]から成る、と言っていますね。――そう、これらはとりもなおさず言葉です。こういう言葉をもって始める、というのは良いのです、これらの言葉で誰も何か少しは思い浮かべることができるでしょうから。けれどもこれらを生の実践において用いようとするなら、つまり人間の認識から追求しうる最も重要な生の実践である治療において用いようとするなら、これらの言葉にとどまっているわけにはいきません、言葉を真の内容で満たすものの中に入れていかなければなりません。まず最初に問いましょう、物質体です、私たちはどのようにして物質体の表象に辿り着くでしょう？――私がなぜこの概念を展開するのか、皆さんはのちほどすぐおわかりになるでしょう。私たちはどのようにして物質体の表象に辿り着くか？さて、地上において人間の外部に何かある対象が、そうですね、石があるとしますと、石は地面に落ちます。石は重い、石は地球に引き寄せられる、石には重さがある、と私たちは言います。私たちはそのほかにも作用している力を見出します。石が結晶へと形成されるとき、石のなかには形(フォルム)を成す力が働いています。けれどもこれらの力は地上的な諸力に親和性があります。要するに、私たちが周囲の世界を見ると、地上的な本質に従っている物質があるわけです。私たちはこのことを心に留めておきましょう、私たちは地上的な本質に従っている物質を持つ、と。

こういうことにきちんと目を向けないひとがやってきて、一個の炭、黒い炭を見せるでしょう。実際これは何なのでしょう？地球の近くでのみこれは炭なのであって、この炭を比較的短い距離であっても地球から離すとその瞬間に、それはもはや炭ではなくなるでしょう。地上で炭を炭たらしめているものはすべて、地球の諸力なのです。つまり皆さんはこう言うことができます、ここに地球があるとすると、地球の諸力はこの地上的なものの中にあるのだが、この地球上で私が持つどの対象のなかにもある、と。そして、人間の物質体はなるほど{複雑に}組み合わされているけれども、根本においてこれも、地球のこれらの物質的な力、地球の中心点からやってくる力に従う対象なのです。これは人間の物質体です、これは地球の中心からやってくる諸力に従います(外向きの矢印)。――さてしかし、地上には別の諸力もあります。

これらの力は周囲からやってきます(内向きの矢印)。私がまったく定かならぬ遠方まで出かけていく、とひとつ考えてみてください。そのとき、ちょうど地球の力とは逆に、定かならぬ遠方から力がやってきます。この力は至るところから働きかけてきます。そう、いたるところから作用してくる力、宇宙のあらゆる方向から地球の中心点に向かって働きかけてくるこのような力があるのです。これらの力について、まったく確かで具体的な表象を得ることができます、それは以下のようにしてです。



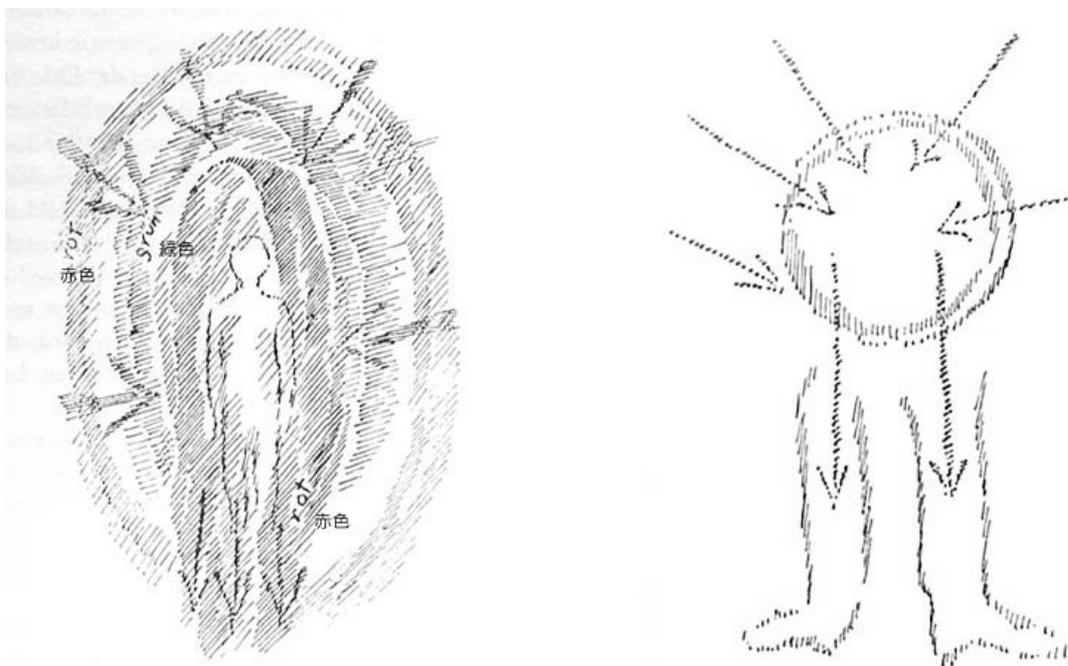
有機体の、つまり植物、動物、人間の有機体（生体組織[Organismus]）の基礎をなす最も重要な物質は、蛋白質です。けれども蛋白質はまた、植物、動物、人間の新たな生体組織の基礎でもあります。胚細胞（生殖細胞[Keimzelle]）受精した胚細胞から、植物、動物、人間の生体組織として発達するものが発生します。蛋白質は物質です。今日、ひとは真の科学を行う代わりにいたるところで空想しますので、こう思い描きます、蛋白質、これは、いわゆる炭素、酸素、水素、窒素、硫黄、いくらかの燐から複雑に組み合わせられた――まさしく複雑に組み合わせられています――物質である、と。――つまり蛋白質のなかに、原子論者が考えるような理想の組み合わせが得られるというわけです。まったく複雑に原子と分子を描き込まなければならぬでしょう。そしてそれから、動物母体あるいは植物母体のなかでこの複雑な蛋白質分子が形成されていく、あるいは好まれる言い方によれば、これがさらに発達していった、純粋な遺伝によって新たな動物が発生する、と。



しかしながらこういうことはすべて、靈的な眼差しの前ではまぎれもないナンセンスです。ほんとうは、動物母体の蛋白質は複雑に組み合わせられているのではなく、完全に損なわれ、カオスとなっているのです。通常身体の中にも含まれている蛋白質というものはまだいくらか秩序があるのですが、生殖のもとになる蛋白質の特徴とはまさに、内的に完全にカオス状態で入り乱れ揺り動かされているということ、物質素材が完全にカオスへと引き戻され、もはや構造がなく、内部で完全に寸断され引き裂かれ破壊されているためにもはや地球に従っていない物体の堆積にすぎない、ということなのです。蛋白質は、なんとかまだ内的にまとまっている限りは地球の中心的な諸力に従っています。蛋白質が内的に分裂させられる瞬間、蛋白質は全宇宙領域の影響の下に移ります。力はいたるところから入り込んできます、そして生殖の元になる小さな蛋白質の塊が生じるのです、私たちにもまず最初に見渡すことのできる全宇宙万有の写しとして。どの蛋白質の塊もひとつひとつが全宇宙万有の写しです、なぜなら、蛋白質の実質は分裂させられ、破壊

され、カオスへと導かれ、それによってまさに宇宙の塵として、全宇宙に従うのにふさわしくされるからです。こういうことについて、今日何も知られておりません。

今日こう信じられています。さてここに親の鶏がいる、それはまさに複雑な蛋白質を持っている。蛋白質は卵のなかにもたらされる。それから新しい鶏が生まれる、それは継続され、さらに発達させられた蛋白質である。それからまた胚実質となり、こうして鶏から鶏へと続いていく。――けれどもそうではないのです。ある世代から次の世代へと移行が起こるたびごとに、蛋白質は全宇宙にさらされるのです。したがって私たちはこう言わなければなりません、私たちは、一方において、地上的な中心的諸力に従う地上的な物質を持つけれども、私たちはある意味ではその物質を、宇宙万有の境界からいたるところから働きかけてくる力に従うものとも考えることもできる、と。この後者の力は、人間のエーテル体のなかで働いている力です、エーテル体は宇宙の力に従うのです。――よろしいですか、今、私たちは物質体とエーテル体についてのリアルな表象を持ちます。今、皆さんが、皆さんの物質体とは何か？と問いかけるなら、物質体とは、地球の中心点からやってくる諸力に従うものです。皆さんのエーテル体とは何か、と問うなら、それは皆さんにおいて、周辺のいたるところからやってくる諸力に従うものです。これも描いてみることができます。ひとつ考えてみてください。ここに人間がいるとします。人間の物質体は、これが地球の中心点へと向かうなら（赤）地球の中心点へと向かう諸力に従うものです。人間のエーテル体は、宇宙万有の果てのいたるところから入り込んでくる諸力に従います（緑）。



こうして今、人間のなかにひとつの力組織があると考えられます、垂直に位置しているあらゆる器官のなかにもともと存在していて、下降していく力と、外からやってきて、本来このような方向性を持つ（矢印）力から成る力組織です。皆さんはこのことを、一方の性質ともう一方の性質を代表している人間の形（フォルム）から形として見て取ることができます。脚を研究するなら、皆さんはこうおっしゃるでしょう、脚は{周辺の力よりも}地球の力に適合しているのです、当然その理由からあのフォルムを有している、と。

頭は{地球の力よりも}周辺の力に適合しています。――同様に皆さんは腕を研究することもできます。これはとりわけ興味深いことです。皆さんが腕を体に押しつけると、腕は、地球の中心点に向かう諸力に従います。皆さんが腕を活発に動かすと、皆さん自身が腕を、周辺のいたるところから入り込んでくる諸力に従わせるのです。

よろしいですか、これが脚と腕の違いです。脚は一義的に地球の中心的な力に従い、腕は特定の姿勢でのある条件においてのみ、地球の中心的な力に従うのです。人間は地球の中心的な力から腕を引き上げて、周辺のいたるところからやってくる私たちがエーテル的と名づける力のなかに組み込むことができます。けれども、ひとつひとつの臓器についてもこのように、これらの臓器がどのように宇宙に組み込まれてい

るかを實際いたるところで見ることができるのです。

さて、皆さんは物質体、エーテル体を有しています。けれどもアストラル体とは何なのでしょう？空間のなかにはもはや、第三の種類力はありません。そういうものはもはや存在しないのです。アストラル体はその力を空間の外に持っています。エーテル体の力は周辺のいたるところから入り込んできますが、アストラル体はその力を空間の外部から受け取るのです。

地球の物質的な力が、あらゆる方向からやってくるエーテル的な力に組み込まれているようすを、自然の特定の場所に捜し出すことができます。ひとつ考えてみてください、蛋白質、これはまず物質的な地球に存在します。蛋白質のなかで、硫黄、炭素、酸素、窒素、水素が化学的にどうにか安定している限り、蛋白質はまさに物質的な地球の力に従います。蛋白質が生殖の領域に入ると、蛋白質は物質的な力から引き上げられるのです。周囲の宇宙万有の力が分裂した蛋白質に働きかけ始め、全宇宙万有の写しとして新たな蛋白質が生じます。

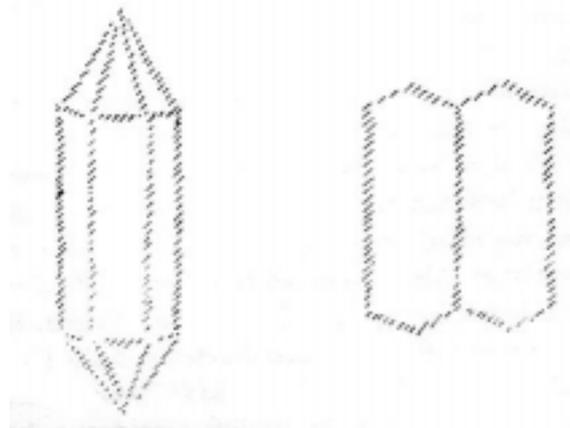
けれども、よろしいですか、こういうことが起こることもあります、つまり分裂がじゅうぶんに進行することができない、といった事態です。たとえば、何らかの動物に生殖が起こるためには、全宇宙万有の力に組み込まれることができるよう、産みつけられた卵のなかで分裂させられなければならない蛋白質もあるでしょう。こういう動物は、もっぱら全マクロコスモスのなかに組み込まれなければならないこのような蛋白質を生殖のために提供することを何らかのかたちで妨げられているのです。生殖可能な蛋白質は全マクロコスモスに組み込まれなければなりません。この動物は生殖可能な蛋白質を問題なく形成することを妨げられているわけですが、そう、たとえばタマバチ[Gallwespe]がそうですね。それではタマバチは何をするでしょう？タマバチは何らかの植物の一部に卵を産みつけるのです。タマバチが卵を産みつけた柏その他の木々にはいたるところでこれらの虫こぶ（没食子[Galle]）が見つかるでしょう。するとこうした奇妙な虫こぶがたとえば葉についているのを皆さんはごらんになるでしょう、虫こぶのなかにはタマバチの卵があります。



なぜこういうことが起こるのでしょうか？なぜタマバチの卵は、たとえば柏の葉に産みつけられ、今発育しようとする卵が内部に入ったこのような虫こぶができたのでしょうか？卵は自分だけでは発育することができないでしょう。なぜなら植物の葉は自らのうちにエーテル体を有しています。このエーテル体は全宇宙エーテルに適合していて、そしてこれがタマバチの卵の助けになるのです。タマバチの卵は自分だけではどうすることもできません。ですからタマバチは、すでにエーテル体を内部に持ち、全宇宙エーテルに組み込まれている植物の一部分に卵を産みつけるのです。つまりタマバチは、自分の蛋白質に分裂を起こすために、回りの宇宙周辺が柏の葉を、柏を通じて働きかけることができるように、柏の木に近づくのです、一方、タマバチの卵だけでは崩壊してしまわざるをえません、タマバチの卵はあまりに固く結合していて分裂できないからです。

よろしいですか、このことは、自然のなかでいかに不思議な活動が営まれているかをのぞき見る可能性さえ与えます。けれどもこの活動は通常も自然のなかにあるものです。と申しますのも、想像してみてください、この動物は単に、生殖のために宇宙エーテルにさらされうる胚実質を提供することができないのみならず、自分自身のなかで任意の物質を食物に変え、内的な栄養に用いることもできない、と。ミツバチの例（ 1 ）がすぐ思い浮かびますね。ミツバチは何でも食べるといえることはできません。ミツバチが食べることができるのは、植物によってすでに配分されたものだけです。けれどもさて今皆さんは非常に

不思議なものをごらんになるでしょう。ミツバチは植物に近づき、蜜液をさがしてそれを摂取し、体内で加工し、ミツバチについて私たちが驚かざるを得ないものを作り上げます、まるごとの蜂の巣を、巣箱のなかの巣房を作り上げるのです。私たちはこれらふたつのまったく不思議な驚くべき経過を眺めます、外で花にとまっているミツバチが花の蜜を吸い、それから、巣箱に入り込んでいって、ほかのミツバチとともに、蜂蜜で満たすための巣房を自分自身から作り上げるのです。いったいここで何が起きているのでしょうか？よろしいですか、皆さんはこれらの巣房をその形（フォルム）に従って見なければいけません。それらはこのように形成されています（図参照、右）ここにひとつ、続いてふたつめ、と続きます。



これらは小さな房で、その空洞はもちろん物質で満たされるように形作られるのですが、水晶、つまり珪酸の結晶の形成のとはいくぶん違って形成されています。皆さんが山に出かけて、水晶をごらんになれば、皆さんはそれもこのように描くことができるでしょう。水晶はいくぶん不規則なところがありますが、連続した巣房に似た図になるでしょう。ただ、巣房は蜜ろうから、水晶は珪酸から出来ています。

これを追求していくと、こういうことがわかります、普遍的なエーテル的、アストラル的なものの影響下で、地球進化の特定の時期に、珪酸の助けを借りて、山のなかに水晶が形成された、と。皆さんはここに、地球の周囲からやってくる諸力、エーテル的—アストラル的力として作用し珪酸のなかに水晶を形成する力を見るのです。皆さんは外の山地のいたるところにそれを見出します、まさに驚くべき水晶、この六角形の形成物を。この水晶であるもの、これは、空洞となれば巣箱のなかの巣房です。つまりミツバチは、かつて六角形の水晶を作り出すべく存在していたものを花から取り出します。ミツバチはこれを花から取り出し、自分自身の体を通して水晶の複製を作り出すわけです。このとき、ミツバチと花の間では、かつて外部のマクロコスモスで起こったことに似た何かが起きているのです。

私がこういうことをお話ししますのは、炭素、窒素、水素、酸素云々のなかに存在しているこのまったく嘆かわしい抽象を眺めるだけでなく、驚くべき形成（ゲシュタルトウング[Gestaltung]）プロセスを、自然と自然の経過における内的で親密な関連を見ていくことがどんなに不可欠か、皆さんにおわかりいただくためです。そしてこういうことが実際かつては本能的に科学の基礎となっていました。それは十五世紀頃から人類の歴史的進化にともなって失われてしまいました。それは再び獲得されなければなりません。私たちは再び、自然の存在とその人間への関わりとの内密な関係のなかへと入っていかなければならないのです。このような関係が再び知られるようになるときにのみ、健康な人間と病んだ人間への真の洞察が再び存在するようになるでしょう。さもなければ、どんな薬学においても、内的な関連は洞察されることなく、単に試してみるばかりという状況は変わりません。

十五世紀から今日まで人間の精神の進化において一種の不毛の時代があったのです。この不毛の時代は人類を圧迫しました。と申しますのも、植物を見ても、動物を見ても、人間を見ても、鉱物を見ても、あらゆることについてもはや何もわからなくなったこういう不毛な時代は、人間全般をあらゆる宇宙連関から引き離れたからです。そしてとどのつまり、人間はあのカオスのなかに入り込んでしまいました、そのカオスのなかで人間は今日、もはや宇宙との何らかの関連のなかで自らを知るといふことのない世界に対峙して生きているのです。このような事柄がよく考えられていた時代には、生殖が起こるたびごとにマクロコスモス全体が語りかけていることを、人間はよく知っていました。生殖可能な胚あるいは種子のなか

で、全マクロコスモスの写しが生じます。大宇宙は外にあります、きわめて小さな胚のなかには、大宇宙のいたるところからやってくる作用の結果があるのです。

さて人間のなかでは最初、地球の物質的—中心的な力が共に作用しています、それらは人間のすべての器官（臓器）のなかで作用していますが、これらの力に対して、あらゆるところからやってくるエーテル的な力が随所で作用しています。なんらかの方法で肝臓を、脾臓を、肺をごらんになってください、ここでは地球の中心点からやってくる力と周囲の宇宙のいたるところからやってくるあの力が共に作用している、ということを知るときにのみ、皆さんはまずこれらの臓器を理解なさるでしょう。—さらに、ある種の臓器はアストラル体に、また自我組織[Ich-Organisation]に浸透されていますけれども、ほかの臓器は、これら高次の構成部分にはあまり浸透されていませんし、そもそも人間は睡眠状態では自分のなかにアストラル体と自我組織は持っていないのです。ひとつ何らかの臓器を、肺を（最初の図参照、右上）考えてみてください。何らかの原因で、宇宙万有のいたるところからやってくる力（矢印）が、人間の肺にあまりに強く働きかける状態になったとします。肺は病気になってしまうでしょう、なぜなら、肺のなかで地球の中心点から作用するものと、周囲のあらゆる方向からやってくるものとの間には、一種の調和的な均衡状態が生じていなければならないからです。今、皆さんが、肺のなかであまりに強く働きかけているエーテル力の釣り合いをとる鉱物（ミネラル）実質をどのようにして見つけ出せるか首尾良く知ることができれば、皆さんは、強く作用しすぎているエーテル的諸力を除去する治療薬を得るでしょう。そして逆のことが起こる可能性もあります、つまりエーテル的諸力があまりにも弱くなって、地球の中心点から作用する物質的な諸力が強くなりすぎる、といったような。皆さんは、何らかの臓器を通じてエーテル的諸力を強めるように人間に作用することのできるものを、周囲の植物界のなかに求めるでしょう、そうすれば、皆さんはふさわしい治療薬を得るでしょう。

単に物質体を観察するだけでは、最少の治療薬をどうにか見つけ出すことも不可能です、物質的な人体そのものには、人体の成り立ちについて何かを語る根拠はまったくないからです。と申しますのも、人体のなかで起こっているいわゆる正常なプロセスは自然のプロセスですが、病気のプロセスもまた自然のプロセスだからです。皆さんがいわゆる正常な肝臓をお持ちだとすると、皆さんは自然のプロセスのみがそこで起こっている肝臓をお持ちなのです。けれども皆さんが潰瘍を起こした肝臓をお持ちとしても、皆さんはやはり自然のプロセスのみがそこで起こっている肝臓をお持ちなのです。物質体からはこの違いを見つけないことはできません。物質体からは、ある場合は別の場合とは異なって見える、という事実を確認することができるだけで、原因については何も知ることはできないのです。皆さんの肝臓に潰瘍があったとすると、こういう場合たとえばアストラル体が、そうすべき程度よりずっと強力に肝臓に介入している、ということを知っているときにのみ、皆さんは潰瘍の原因を発見するでしょう。皆さんは、肝臓の潰瘍形成の場合肝臓に強く介入しているアストラル体を、肝臓から追い出さなければなりません。そして、物質体から出て、人間本性の高次の構成部分にまで入っていかないことには、健康な人間と病気の人間についてリアルに語る可能性などそもそもないのです。ですから結局こう言うことができます、そもそも薬学というものは、人間の物質体から出ていくときにはじめてまた可能だろう、病気の本質は、物質的な人体からは理解することができないからだ、と。

今回私は、事柄を歴史的関連で叙述することだけを意図しております。けれどもまさしく、古の時代から近代へともたらされてきたものがどんどん光を失っていったとき、人間認識一般もことごとく消え去ってしまった、ということなのです。今日私たちは、再び人間認識を獲得しなければならないという急務の前に立っております。この人間認識は、人間と周囲にある自然界の関係を再び把握することができるときにのみ獲得されるでしょう。

ひとつ人間の自我組織から出発してみましょう。まず、そうですね、秘儀参入学由来のイマジネーション認識を通して人間の自我組織についての観照を得ると、自らにこう問いかけることができます、今日の人間の生体組織のなかではいったいこの自我組織はとくに何と関係しているのだろうか？と。—この自我組織は、人間のなかで鉱物的であるものととくに関係しています。ですから皆さんが鉱物質（無機質）のもの、本質上鉱物質のものを摂取すると、たとえば塩を舌の上にのせると、たちまちこの鉱物質のものに襲いかかるのは自我組織なのです。次いで鉱物質のものはさらに送られ、胃のなかに移ります。自我組織は、塩実質が胃のなかにあるときにも、そこに居残っています、自我組織はそこに居残っているのです。塩はさらに進み、むろんいろいろな変化を遂げますが、腸を通過し、さらに進みます、けれども皆さんの

塩は、決して自我組織に見捨てられることはありません。これらは、つまり自我組織と人間のなかに入ってきた塩は、対になったもののようにふるまうのです。

よろしいですか、皆さんがたとえば、蛋白質という物質とまだいくらか結合している目玉焼きを食されるときには、そうではありません。皆さんが目玉焼きの蛋白質を舌の上に運ぶときには、自我組織は少し気にかけるだけです。さらにそれが胃のなかへと入り込んでいく間も、アストラル体はそれをほとんど気にかけません。さらに進むと、エーテル体が集中的に働きかけ、次いで物質体がそうします。皆さんが目玉焼きとともに皆さんの生体組織のなかに取り入れた蛋白質を、これらが皆さん自身のなかで分解するのです。そして今、目玉焼きは皆さん自身のなかで完全に鉱物的にされます。それは分解されず。腸壁においてこれら外的に取り入れられた蛋白質は、どうにかまだ蛋白質であることもやめ、完全に鉱物化されるのです。こうして今それはまた自我組織のなかに移行していき、そして鉱物化された蛋白質は、そこから自我組織に摂取されるのです。

こうして私たちはいつもこう言うことができます、自我組織は鉱物質のものだけと関わり合う、と。けれども鉱物質のものはどれも、人間の生体組織のなかで自我組織によって、外部にあるときとは異なったものになっています。人間の生体組織のなかでは何ものも、それがこの人間の生体組織の外部にあるときのみであることは許されないのです。自我組織は非常にラディカルにそのことを気にかければなりません。単に、そうですね、食塩やそういった物質が、自我組織に捉えられて、外部にあったときとはまったく別の何かに内的に変えられるというだけではなく、人間がある特定の熱状態に囲まれているとき、外的な熱状態が人間に何らかのしかたで浸透しているときですら、それは{外的な熱がそのままであることは}許されないのです。皆さんの指が、外的な熱として広がっているものによって満たされることは許されないのです。熱は皆さんに刺激として作用することが許されるだけで、皆さんは内部に持つ熱を自分で生み出さなければなりません。皆さんが単なる対象となり、皆さんの暖かさあるいは冷たさを自分で生み出さず、皆さんのなかのどこかで熱を、たとえば何らかの対象の場合のように作用させ続けるだけであるなら、その瞬間に、皆さんは病気になります—外的な熱そのものによって、単なる物質によってではなく、外的な熱によって病気になるのです。ちょっと考えてみてください、ここに布かスポンジか何かがあり、向こうにストーブがああるとしましょう。ストーブの熱はまったく静かに広がり、布あるいはスポンジに浸透するでしょう。布あるいはスポンジは、そこにストーブの熱として広がっているものを単に継続するだけです。ストーブの熱が皮膚まで到達すると、そうすることは許されません。ストーブの熱が感覚の刺激を引き起こすと、反応が返ってこなければなりません、つまり内部の熱が内から生み出されざるを得ないのです。風邪の状態というのはまさに、内部の自分の熱を生み出すべく刺激を与えさせるだけにとどまらず、外部の熱をいくらか皮膚の下に入れてしまって、その結果、自らの作用、自らの衝動そのものに満たされた完全に活動的な人間として自身を世界のなかで据えるのではなく、ひとつの対象のように自分を置き、自分を通じて外界の作用に浸透されるままになっていることに起因するのです。—自らのうちに鉱物質のものを取り入れ、けれどもこれを内的に徹底的に変え、何か別のものに変化させること、これが自我組織の本質です。

私たちが死んでからはじめて、鉱物質のものは再び外的自然の鉱物質のものとなります。私たちが地上に生きて、鉱物質のものを私たちの皮膚の内部に有している間は、自我組織が絶えず鉱物質のものを変化させています、私たちが摂取する植物質のものは、アストラル組織によって、アストラル体によって、絶えず変化させられているのです。したがって私たちはこう言うことができます、人間の自我組織は、鉱物質（無機質）のものすべて、単に固体状のもののみならず、液体状のものも、気体状のものも、熱状のものも、徹底的に変容させるのだ、と。—おおざっぱな言い方をすれば、むろん、このあたりに水がある、私は飲む、水は今私の内部にある、と言うことはできます。—けれども私の生体組織が水を取り入れる瞬間、私の内部にあるものは、私の自我組織を通じて、もはや外部の水であるものと同じではなくなります。私がそれを汗として染み出させたりあるいはほかの方法で水に戻すとはじめて、それはもとに戻るのです。私の皮膚の内部では、水は水ではなく、生きた液体性である何かです。

このようにして常に、限りなく多くのことが考え直されなければなりません。今日は皆さんにほんの小さな示唆を与えることができただけです。けれども皆さんがこのことを考えぬき、蛋白質は全マクロコスモスの作用のなかに入るために分解させられねばならないことがおわかりになるなら、私が飲む水は内的に生きた液体であり、もはや無機的な水ではなく、自我組織に浸透された水であることがおわかりになる

なら、また、皆さんがキャベツを食べるとき、外にはキャベツがある、アストラル体がすぐさま内的にキャベツを――少なくとも現実の、物質的なキャベツを――取り入れ、それを何かまったく別のものに変化させる、とじっくりお考えになるなら、ここで私たちは、とほうもなく重要な経過の観察に至り、次のような観照へと押し進みます、つまり、私たちは私たちの新陳代謝のなかに、私たちのたとえば脳のなかにあつてそこで神経系その他を作り出している代謝プロセスと、進化のある種の段階だけ異なっている経過を有しているのだ、という観照へ。これについては明日もさらにお話するつもりです、紀元後十二世紀と二十世紀の人類のまったくラディカルな違いを際立たせるために、そしてそこからさらに、人間認識がすべて消え去ってしまい、健康な人間についても病気の間についてももはや何もわからなくなってしまうためには、さらなる進展になかで健康な人間と病気の間のために、新たな衝動がやってくることがどうしても必要であることをご理解いただくためです。

編註

1 ミツバチの例：1923年12月1日ドルナハでの講義を参照のこと。『人間と宇宙自然における霊の作用――ミツバチの本質について』（ゲーテアナム建築に携わる労働者たちのための15回の講義、第5巻 GA351）所収。

今日（きょう）この日、私たちは、苦痛に満ちた記憶の徴（しるし）のなかに立っております、そして私たちは、今日まさにこの講義の内容としなければならないものを、何としてもこの苦痛に満ちた記憶の徴のなかに据えたいと思うのです。ちょうど一年前、かつての私たちの建物のなかで私が行くことを許された講義は（ 1 ）ここにいらっしゃる皆様のご記憶にもあると思いますが、地上の自然の諸関係から出発して、靈的世界と、この靈的世界を歩む星々からの開示（顕現）へと至る道筋を取りました。そしてその際、人間の心、人間の魂は、その本性に従って、人間の精神（靈）を次のようなものに関係づける可能性があったのです、地上的なものから出発し、単に星々の広がる世界のみならず、この星々の世界を通じて、靈的なものを宇宙の歩みのように写しているものにまで入っていくときに見出せるものに。そして、その直後に私たちから奪い去られたあの部屋で、私が黒板に描き出すことを許された最後のものは、まったくもって人間の魂を、靈的な高みにまで上昇させてゆくことを目的としていました。それによってまさにあの晩、私たちのゲーテアヌム建築がまさにその本質のすべてを通して捧げられるはずであったものに直接結びつけられたのです。ですから、あのとき結びつけられたものについて、今日はまず、ちょうど一年前にここで行われた講義の続きのように語らせていただきたいと思います。

エフェソスの火災より前の時代において秘儀のことが話題になるとき、心情において秘儀についていくらか理解していた人たちの話はすべて、ほぼ次のように響きました、人間の智慧、人間の叡智は、秘儀のなかに場所を、居場所（安住の地）を持っている、と。――そしてあの古（いにしえ）の時代に世界の靈的指導者たちの間で秘儀のことが話題になったとき、つまり超感覚的な世界において秘儀について話されたとき――私はあえてこういう表現をしたいと思います、この表現はもちろん、超感覚的世界から下へと思惟され、感覚的世界へと作用が及ぼされるしかたを比喩的に示しているだけなのですが――、つまり超感覚的世界において秘儀について話されたとき、その話はほぼ次のように響いたのです、供犠を捧げる人間と我々神々が出会うことのできる場所を、人間は秘儀のなかにしつらえる、供犠のなかで人間は我々を理解するのだ、と。と申しますのも、それは実際のところ、古の世界における一般的な認識だったからです、秘儀の場において神々と人間が出会うということ、世界が支え持つものはすべて、秘儀において神々と人間たちとの間で起こることに関連しているということ、古の世界にあって知っていた人たちの一般的な認識です。

けれども、外的歴史的にも受け継がれてきたひとつの言葉があります、それはこの歴史的伝承からも実際人間の心に感慨深く語りかけることができますが、その言葉がとりわけ感慨深く語りかけるのは、青銅の、しかし靈（精神）においてほんの一瞬だけ目に見える文字で人類の歴史のなかに書き込まれるように、まったく特殊な出来事からその言葉が形作られてくるのを見るときです。そしてこれは、靈的な眼差しをヘロストラトスの行為へと、エフェソスの火災に向けるとき、このような言葉をいつも見ることができる、ということです。この火焰のなかに、神々の妬み[der Neid der Goetter]という古の言葉が見いだされます。

とは言え、古の時代から受け継がれてきて、私が今描写しましたように古の時代の生活のなかに見いだされる数々の言葉のうち、この神々の妬み、という言葉はこの物質界において最も恐ろしいもののひとつだと思います。あの古の時代にあっては、物質体を持って地上に現れる必要のない超感覚的存在として生きているものすべてが、神[Gott]という言葉で表され、きわめてさまざまな種類の神々があの古の時代には区別されていました。そして、人間の最も内的な本性にのっとり人間を生み出し、時代の推移を通過して送り出すというかたちで人間と結びついている神的―靈的存在たち、私たちが外なる自然の壮麗さそしてきわめてささやかな現象を通して感じ取り、私たちの内部に生きているものを通じて感じ取っているこの神的―靈的存在たち、こうした神的―靈的存在たちが妬み深くなることはあり得ない、というのは確かです。けれども、古の時代においては、神々の妬みということで何か非常にリアルなものが意味されました。人間という種族がエフェソスの頃まで進化した時代を追求してみますと、比較的進化した人間個体が、秘儀において良き神々が彼らに喜んで与えたものの多くを自らのものとしたことがわかります。と申しますのも、次のように言えば、私たちはまったく的を得ているからです、つまり、良き人間の心と良き神々の間には、秘儀においてますます固く結ばれた親密な関係があった、そのため、人間が良き神性へとますますいっそう近づかされた、そのことが、ある種のほかの、ルツィファー的アーリマン的の神存在たち

の魂の前に現れた、と。そして、人間に対する神々の妬みが生じた。――精神を希求する人間が悲劇的な宿命を迎えるとき、古の時代にはその悲劇的な宿命が神々の妬みと関連づけられて示されるのですが、私たちは、歴史のなかにおいてこれを何度も何度も、聞かなければならないのです。

ギリシア人たちは、この神々の妬みというものがあることを知っていました、そして人類進化における外的な出来事のうち少なからぬものについて、その由来をこの神々の妬みに求めたのです。そもそもエフェソスの火災とともに明らかになったのは、人間のさらなる進化に対して妬みを抱く神々すなわち超感覚的存在たちがいるのだ、ということ意識するようになったときにのみ、人類は霊的にある種さらに進化することができるということです。――このことは結局、エフェソスの火災に続く――アレクサンダーの誕生に続く、と言うこともできますが――すべての歴史に、特殊な色合いを添えます。そしてこのこと、つまりある種類の神々の妬みに満ちた世界を見渡す、ということとははまた、ゴルゴタの歴史の正しい理解の一部でもあるのです。そうです、魂の雰囲気は、すでにペルシア戦争直後の時代以来、ギリシアにおいてもこの神々の妬みの作用に満ちていました。そして、その後マケドニア時代になされたことは、神々の妬みが霊的な雰囲気となって地表面を覆っている、ということ完全意識して行われざるを得ませんでした。けれどもそれは、神々と人間との誤解に抗って、勇敢に、大胆に行われたのです。

そして、神々の妬みに満ちたこの雰囲気の中に、世界に実在しうる最大の愛を為すことのできた神の行為が下降していきました。他のすべてのものに、古代世界、つまりヘラス、マケドニア、前アジア、北アフリカ、南ヨーロッパにおける雲の形象[Bild]をもさらに付け加えることができるときにのみ、神々の妬みの現れであった雲の形象を付け加えることができるときにのみ、ゴルゴタの秘蹟を正しい光のなかで見ることができます。そしてこの暗雲に満ちた雰囲気の中に、奇しくも暖みを与え穏やかに光を放ちつつ、ゴルゴタの秘蹟を通じて流れ出る愛が入り込んでいくのです。

当時、こう申し上げてよろしければ、神々と人間との間に起こった事柄であったものは、この現代においては、人間的自由の時代においては、より下位の物質的な人間の生活において起こざるを得ません。それがどのように起こっているかを描写することもできます。古の時代においては、秘儀のことを考えると、ひとは地上でそれについてこう語りました、人間の認識、人間の叡智は、秘儀のなかにその居場所を持っている、と。――神々のもとにあったとき、ひとはこう語りました、私たちが秘儀のなかに沈潜していくと、私たちは人間の供犠を見いだす、そしてこの供犠の捧げる人間において私たちは理解させられる、と。

結局のところエフェソスの火災とは、秘儀の本質の古い形式が次第に消え去っていく時代の始まりでした。私はそれがあちこちで、たとえばヒベルニアの秘蹟におけるように壮麗に存続されてきたようすを物語りしました、ヒベルニアの秘儀においては、かなたのパレスティナでゴルゴタの秘蹟が物質的に起こったのと時を同じくして、祭祀においてこの秘蹟が祝われていたのです。人々はこれをパレスティナとヒベルニアとの間の霊的な中継からのみ知ったのです、物質的な中継からではありません。とは言えやはり、物質界における秘儀の本質は、ますますいっそう衰退していきました。外的な居場所、神々と人間との出会いの場所は、ますますその意味を失っていきました。それらは紀元後十三、十四世紀にはほぼ完全に失われたのです。と申しますのも、たとえば聖杯への道を求めるひとは、霊的な道を歩むすべを理解しなければならなかったからです。エフェソスの火災より前の古の時代には、物質的な道を行きました。中世には霊的な道を行かなくてはなりません。

十三、十四世紀、とりわけ十五世紀以降、真の薔薇十字の教えを授かるうということであればとくに、霊的な道を歩まなくてはなりません。と申しますのも、薔薇十字の神殿は、外的物質的な体験からは深く秘されていたからです。多くの真の薔薇十字会員は神殿の訪問者でしたが、いかなる外的物質的な人間の目もこの神殿を見いだすことはできませんでした。けれども、智慧と人間の神聖な行いの隠者のようにそこかしこで見つけ出され得たこの古の薔薇十字会員たち、穏やかな目の輝きから神々の言葉を聴くことのできるひとは見いだすことのできたこの薔薇十字会員たちのところに行った弟子たちもいたにちがいません。私は偽りを申し上げているわけではありません。私は比喻を述べたいのではなく、まったくもって真実を述べたいのです、私が示唆します時代においてほんとうに重要な真実であった真実を。物質的な穏やかな目の輝きのなかに天の言葉を聴くことのできる能力が獲得されたとき、ひとは薔薇十字の導師（マイスター）[Rosenkreuzer-Meister]を見いだしました。その後、中部ヨーロッパにおいてまさに十四、十五世紀には、きわめて質素な環境において、きわめてつつましい関係のなかで、ひとはこれらの独特な

人物たちに出会いました、内面を神に満たされ、靈的な神殿、実在はしているけれども、名高い伝説において聖杯への接近として描写されている接近が困難であるように、実際に近づくことは困難な、そういう靈的な神殿と内面において関わり合っていた人物たちです。

このような薔薇十字の導師とその弟子との間に起こったことを眺めると、近代的形式ではあっても神々の叡智を示す、地上を歩みながらのいくつかの語らいを聞き取ることができます。その教えはまったくもって深く具体的でした。孤独のなかで薔薇十字の導師は、彼を探し彼を見出すことに身を焦がした弟子によって見いだされました。このとき弟子たちのひとりが、神々の言葉を語る穏やかに見つめる目を見ると、弟子はつましくたとえれば次のような教えを受け取ったのです。

見るがいい、わが息子よ、お前自身の本質を。お前は、外的物質的な目が見ているあの肉体を担っている。地球の中心点が、肉体を可視的にする力をこの肉体に送っているのだ。それがお前の物質体だ。だが地上のお前自身の周囲を見るがいい。お前は石を見る、石はそれ自体として地上にあることを許されている。石は地上に馴染んでいる。石はある形態をとると、地球の諸力によってこの形態を維持することができる。結晶をごらん、結晶は自らのうちにその形（フォルム）を担っている、結晶は地球によって自身の本質の形を維持するのだ。お前の物質体はそうすることができない。お前の魂が物質体を去れば、地球は物質体を破壊する、地球は物質体を塵（土）にもどすのだ。地球はお前の物質体に対してはいかなる力も持たない。地球は、驚くべき形態を与えられた透明な結晶構成物を形成し維持する力を持つが、お前の物質体を維持する力は持たない、地球はそれを塵に返さねばならない。お前の物質体は高次の靈性の一部だ。セラフィム、ケルビム、トローネ、お前の物質体の形（フォルム）と形態（ゲシュタルト）であるものは、これらの一部なのだ。この物質体は地球の一部ではない、この物質体は、お前にさしあたって接近できる最高の靈的力の一部なのだ。地球は物質体を破壊できる、だが決して物質体を組み立てることはできない。

そしてお前のこの物質体の内部には、お前のエーテル体が宿っている。いつか、お前の物質体が地球に受け取られ破壊に向かう日が来るだろう。そしてお前のエーテル体は、宇宙の広がりへと消散していくだろう。宇宙の広がりにはなるほどこのエーテル体を解消することはできるが、組み立てることはできない。エーテル体を組み立てることができるのは、デュナーミス、エクスシアイ、キュリオテテスのヒエラルキアに属するあの神的一靈的存在たちのみだ。お前にエーテル体があるのはこれらの存在たちのおかげなのだ。お前は地球の物質的素材をお前の物質体と同化させる。だがお前のなかにあるものは、地球の物質的素材を変化させる、お前の内部で地球の物質的素材が、物質体の周囲に物質的にあるすべてのものと同じではなくなるように。お前のエーテル体は、お前の内部で液体であるもの、水であるものすべてを、お前の内部で動かす。内部を巡り、循環する液体、それはお前のエーテル体の影響のもとにある。だがお前の血をごらん、この血を液体としてお前の血管のなかに巡らせているのは、エクスシアイ、デュナーミス、キュリオテテス、これらの存在たちなのだ。お前は物質体としてのみ人間なのだ。お前のエーテル体のなかではお前はまだ動物だ、ただし第二ヒエラルキアによって貫かれ靈化された動物なのだ。

私がここで皆さんに、今は不十分な言葉ではあれ、要約してお話ししていることは、その穏やかな眼差しのなかに弟子が天の言葉を聴きとったあの導師の長い教えの対象でした。続いて弟子は、私たちがアストラル体と呼ぶ人間の物質の第三の部分を示されました。弟子がはっきりと理解させられたのは、このアストラル体は、呼吸のための、人間の生体組織において空気であるものすべてのための、人体組織のなかを空気として脈打っているすべてのものための衝動を含んでいる、ということです。けれども、人間が死の門を通過してから後も長期間にわたって、地上的なものが空気状のものなかでどうかしていれば騒ぎたてようとしたり、そして靈視的な眼差しには、地球の大気圏の現象のなかで数年にわたって、死者たちのアストラル体が騒ぎ立てているのが感知できるのにも関わらず、やはり地球も地球の周囲も、アストラル体の衝動に対して、それを解消するという以外に何をすることもできないのです。と申しますのも、アストラル体の衝動を形成できるのは、第三ヒエラルキア、つまり、アルヒヤイ、アルヒアングロイ、アングロイといった存在たちだけだからです。

そして、弟子の心を深くとらえながら、導師はこう言ったのです。お前がお前のなかに鉱物界を取り入れてそれを変化させる限り、お前がお前のなかに人間界 { 鉱物界の誤植? } を取り入れてそれを加工する限り、お前はお前の物質体にしたがって、セラフィム、ケルビム、トローネの一部なのだ。お前がひとつのエーテル体である限り、お前はエーテル体においては動物のようだが、お前は第二ヒエラルキア、キュリオテテス、デュナーミス、エクスシアイの靈たちと呼ばれる靈たちの一部なのだ、そしてお前が液体工

レメントのなかで活動する限り、お前は地球の一部ではなく、このヒエラルキアの一部なのだ。そしてお前が空気の形状のエレメントのなかで活動することで、お前は地球の一部ではなく、アングロイ、アルヒアングロイ、アルヒヤイというヒエラルキアの一部なのだ、と。

そしてこの教えを十分に伝授された後では、弟子はもはや自分を地球に属するものとは感じませんでした。彼はいわば、自分の物質体、エーテル体、アストラル体から出て、鉱物界を通じて彼を第一ヒエラルキアに結びつけ、地球の水状のものを通じて第二ヒエラルキアに結びつけ、大気圏を通じて第三ヒエラルキアに結びつける諸力を感じたのです。そして、熱エレメントとして自分の内部に担っているものを通じてのみ自分は地上に生きているのだ、ということが彼に明らかになりました。けれども同時にこの薔薇十字の弟子は、自分のなかに担っている熱を、自分のなかに担っている物理的（物質的）な熱を、本来の地上的にして人間的なものと感じたのです。そしてさらにいっそう、彼は魂の熱と霊の熱を、この物質的な熱と親和性のあるものと感じることを学ぶようになりました。そして自分の物質的内容、エーテル的内容、アストラル的内容が、固体的なもの、液体的なもの、気体の形状のものを通じて神的なものとどのように関連しているかについて、後の人間はますます誤解していきませんが、一方薔薇十字の弟子は、これについてまさに良く心得ていて、真に地上的一人間的なものは熱エレメントである、と知っていたのです。薔薇十字の弟子に、熱エレメントと人間的—地上的なものの関連についてのこの秘密が明かされた瞬間、この瞬間に、弟子は自分の人間的なものを霊的なものに結びつけることを知ったのです。

そしてこのような薔薇十字の導師たちが住んでいたしばしばほんとうに質素なあの住まいでは、弟子たちはそこに入る前に、しばしばわざとらしくない、不思議に思われるようなやりかたで、心構えをさせられました、彼らは気づかされたのです—ある者はこういうやりかたで、また別の者は別のやりかたで、それは表面的にはしばしば偶然のように見えました—、お前は、お前の霊的なものが宇宙的—神的なものと結びつくことのできる場所を探さなくてはならない、そう気づかされることで、心構えをさせられたのです。—そして、皆さんに今お話ししましたあの教えを弟子が受け取ったとき、そう、そのときに、弟子は導師に次のように言うことができました。私は今、地上で私に得られうる最大の慰めとともに、あなたのもとから去ります。なぜなら、あなたは私に、地上の人間はそのエレメントをほんとうに熱のなかに持っているということを示されました、それによってあなたは私に、私の物質的なものを魂的なもの霊的なものと結びつける可能性を与えてくださったからです。私は、固い骨、液体としての血液、気体の形状の呼吸のなかには、魂的なものをもたらすことができません。熱エレメントのなかに私は魂的なものをもたらすのです。

つまり、この上ない静けさとともに、あの時代において教えを受けた者たちは導師たちのもとから去っていきました。そして面差し[Antlitz]の静けさから、この静けさは大いなる慰めの成果を表していましたが、この面差しの静けさから、天の言葉を語ることのできるあの穏やかな眼差しが徐々に育っていきました。そしてこのように、十五世紀の最初の三分の一までは、深い魂的な教えが根底にあったのです、外的な歴史が伝えるあの経過にとっては隠匿されていましたが。けれども、全人間を感動させた教えの伝授が行われていたのです、人間の魂に自身の本性を宇宙的—霊的なものの領域に結びつけさせた教えが。

このまったく霊的な気分は、前世紀の経過とともに消え去っていきました。その気分はもはや、現代の文明のなかにはありません。そして外面的な、神と離れた文明が、今しがた皆さんに描写しましたようなことをかつて見た場所の上に広がったのです。今日ひとは、今皆さんに描写しましたような場面に似た場面のいくつかについての、霊のなかにのみ、アストラル光のなかにのみ作り出すことのできる記憶とともにそこにいるのです。しばしば暗黒{の時代}として描写されるあの時代を振り返り、それから現代に目を向けると、今日基調となっている気分を与えられます。けれどもこのように見ても、十九世紀の最後の三分の一の時代から人々に可能になる霊的な開示から、心のなかに、霊的なしかたで再び人間に語りかけようという深い憧れが立ちのぼってくるのです。そしてこの霊的な方法は、単に抽象的な言葉によって自らに語らせるものではありません、この霊的な方法は、包括的に語るためにさまざまに徴（しるし）を必要としています。そして、一年前に焼失した私たちのゲーテアヌムの形（フォルム[Form]）は、現代の人類に語りかける使命を持つあの霊的存在たちのために見出されるはずであった言葉、そのような言語フォルム[Sprachform]だったのです。演壇から聴衆の理念へと語りかけられていたものは、真に、このフォルムのなかで（ 2 ）語り続けられるはずでした。そして同時に、まったく新しいフォルムのなかで古のものを真に再び思い起こすことができた何かが、ある方法でゲーテアヌムとともに存在していました。

秘儀に参入しようとする者がエフェソスの神殿のなかに歩み入ったとき、彼の眼差しは、ここ数日にわたってお話ししましたあの立像、心の言語で次のような言葉を実際彼に語りかけたあの立像に向けられました、宇宙エーテルとひとつになりなさい、するとお前はエーテルの高みから地上的なものを見るだろう、という言葉。――このようにエフェソスの少なからぬ弟子が、エーテルの高みから地上的なものを見たのです。そしてある種類の神々がこれを妬むようになりました。それでも、ゴルゴタの秘蹟前の数世紀間、大胆な人々は神々の妬みに抗して、太古の聖なる人類進化の年月からエフェソスの火災まで働きかけてきたものを継続していく――弱まった状態ではありましたが、弱まりながらも作用し続けることはできたのです――可能性を見出しました。そして私たちのゲーテアヌムが完成していたら、西側に入っていくことにより、眼差しはやはりあの立像に向けられたでしょう、ルツィファアー的な力存在とアーリマン的な力存在の間に据えられ、神を担い内的に存在を調停している宇宙的な存在として自己自身を知れという要求を、人間はあの像のなかに見いだしたことでしょう。そして、列柱、台輪（アーキトレーブ[Architrav]）のフォルムに注目しますと、それはひとつの言葉を語りました、演壇から発して靈的なものの理念のなかへと翻訳するように継続してゆく言葉を。言葉はさらに、彫塑的に形成されたフォルムに沿って響きました。そして上のドームには、人類進化を靈的な眼差しに近づけることのできた場面が見られました。このゲーテアヌムにおいても、感じ取ることのできるひとにとって、エフェソス神殿の記憶を見出すことができたのです。

けれども、ゲーテアヌムをゲーテアヌムそのものによってスピリチュアルな生の改新の担い手にしていかなければならなかった進化のまさにあの時点に、かけ離れてないやりかたで、つまりかつてのやりかたと似ていなくもないやりかたで、またも松明がこのゲーテアヌムに投げ込まれたとき、この記憶は実に苦痛に満ちたものとなりました。

愛する友人の皆さん、私たちの苦しみは非常に深いものでした。私たちの苦しみは筆舌に尽くしがたいものでした。けれども私たちは、私たちを襲ったこの上ない悲惨、悲劇に妨げられることなく、靈的世界のための私たちの営みを続けていくことを決意しました。と申しますのも、心のなかで自らにこう言い聞かせることができたからです、エフェソスから燃え上がる炎を見ると、まだ人間に自由がなく、良き神々悪しき神々の意志に従わねばならなかった時代には、神々の妬み、と炎の中に書き込まれているのが見える、と。

現代においては、人間は自由に向けて組織されています。そして一年前の大晦日、私たちは焼き尽くす炎を見ました。赤い火焰は天へと燃え上がりました。暗い青の、赤みがかった黄色の炎の筋が、ゲーテアヌムに収めてあった金属の楽器から発してあまねく広がる炎の海を、内部にさまざまな色彩を帯びた炎の海を貫いて、めらめらと燃え上がったのです。そして内部の多彩な筋とともにこの炎の海を見たとき、魂の苦悩に語りかけてくるものを、人間たちの妬み[Der Neid der Menschen] {と書き込まれているのを}を、読み取らねばなりませんでした。

人類進化において時代から時代へと語りかけるものは、このように最大の災厄のなかですら、ことごとく配列されているのです。人間がまだ不自由な状態で神々を見上げていたけれども、不自由から自らを自由にしなければならなかった時代、あの時代の最大の災厄を表現する言葉から、一筋の糸がつながっています、炎のなかに、神々の妬みと書かれているのが見えた時代のあの災厄から、人間が自らのうちに自由の力を見出すべき現代、炎のなかに人間たちの妬み、と書き込まれた現代の私たちの災厄まで、靈的進化の一筋の糸がつながっているのです。エフェソスには神々の像が、ここゲーテアヌムには人間の像がありました、人類の代表者、キリスト・イエスの像です、このキリスト像において私たちは、それと一体化しつつ、きわめて謙虚に、認識において上昇しようとしたのです、かつて、エフェソスの弟子たちが、今日の人類にはもはや完全には理解しがたい当時特有のしかたで、エフェソスのディアーナにおいて上昇したように。

昨年の大晦日に私たちにもたらされたものを歴史的な光のなかに見ても、私たちの苦悩はやわらぎません。建物全体と調和するようにしつらえられた演壇上に最後に立つことを許されたとき、私はまさにあのときの聴衆の眼差しを、魂の眼差しを、地上の領域から星々の領域へと導こうとしたのです、意志と叡智、靈的宇宙の光を表している星々の領域へ。私はあのとき、皆さんに描写しましたように中世において弟子たちを教えていた精神（の持ち主）たちのうち少なからぬ人数が立ち会っていたことを知っております。そして最後の言葉が語られた一時間後、私はゲーテアヌム火災のため呼び戻されました。そして私たちは、

昨年の大晦日の夜をゲーテアヌム火災のかたわらで過ごしたのです。

こういう言葉を語るだけでも、私たち全員の心、私たち全員の魂の前に、名状しがたいものが湧き起こります。けれども、人類進化におけるひとつの聖なるもの以上のものが奪い去られたときも、物質的なものが消滅したあともなお霊（精神）のなかで、物質的なものが供犠として捧げられた霊のなかで作用し続けることを誓った幾人かが常にいました。そして、私たちのゲーテアヌムの災厄から一年目を迎えるこの瞬間に私たちはここに集いましたので、私たちはこう述べるのが許されると思います、物質的なフォルム、物質的な像、物質的な形態を通してゲーテアヌムとともに物質的な目の前にも置かれ、ヘロストラトスの行為によって物質的な目から奪い去られたものを、人類の前進する波を通して精神（霊）においてさらに担っていくことを私たち全員が誓うなら、私たちの魂は、私たちがともにあることについての正しい気分を持つのです、と。かつてのゲーテアヌムには私たちの苦悩がこびりついています。私たちが今日記憶のなかで、誰もが魂のなかに担っている神的な最良のものの中で、あのゲーテアヌムのなかに外的なフォルムとして現れた霊的な衝動に忠実であり続ける、と誓うときにのみ、私たちは、このゲーテアヌムを建築することを許されたことによってともかくも私たちに課せられたものにふさわしくなるでしょう。このゲーテアヌムは私たちから取り上げられました。このゲーテアヌムの精神は、私たちが真に誠実で率直であろうとするなら、私たちから取り上げられることはあり得ません。私たちの愛したゲーテアヌムから炎が燃え上がった一年前のあの時点からまだ間もないこの真に厳粛な時間に、この瞬間に、私たちが単に苦悩を新たにのみならず、苦悩から脱し、十年間にわたってこの場所を建設することを私たちに許したあの精神に忠実であり続けようとするなら、このゲーテアヌムの精神が奪われるおそれは最も少ないでしょう。愛する友人の皆さん、今日この内なる誓いが、誠実に、率直に、心からあふれ出し、私たちが苦悩を、苦難を、行為の衝動へと変化させることができるなら、そのとき私たちは、悲しい出来事をも祝福へと転じていくことでしょう。そうすることで苦悩が和らぐことはないかもしれませんが、けれども、それは私たちに、苦悩から脱して、行為への、精神（霊）における行為への推進力を見出させずにはおかないのです。

愛する友人の皆さん、このように私たちは、私たちがあれほど言いようのない悲しみで満たしたあの恐ろしい火焰を振り返ります。けれども今日（きょう）は、私たち自身のなかの最良の神の諸力に誓って、私たちの心のなかの聖なる炎を感じましょう、私たちがこの意志を人類の前進の波を通して担い続けることにより、ゲーテアヌムとともに意志されていたものをこの炎で霊的に照らし暖めなければならないのです。この瞬間、私たちはこのように、私が一年前、ほぼ同じ時刻に語ることを許されたあの言葉を深めつつ繰り返しましょう。あのとき、私はほぼこういうことを語りました、私たちは大晦日に生きています、私たちは新たな宇宙年[Weltenjahr]を迎えて生きなければなりません、と。ーおお、ゲーテアヌムがなおも私たちのもとにあるなら、この激励を今この瞬間に新たにすることができるなら！もはやゲーテアヌムは私たちのもとにはありません。それはもはや私たちのもとにないからこそ、この奨励の言葉を、今日この大晦日の晩、何倍も力を強めて発することが許されると思います。ゲーテアヌムの魂を、新たな宇宙年へと担っていきましょう、そして、新たなゲーテアヌムのなかに、かつてのもの肉体にふさわしいモニュメントを、ふさわしい記念碑を打ち立てるべく努めようではありませんか。

愛する友人の皆さん、これが私たちの心を、私たちが諸元素へとゆだねなければならなかったかつてのゲーテアヌムに結びつけてくれますように。これが私たちの心を、このゲーテアヌムの精神（霊）に、魂に、結びつけてくれますように。そして、私たち自身のなかの最良の存在へのこの誓いととも、私たちは単に新年へと生きていくのみならず、力強く行為し、霊を担い、魂を導きつつ、新たな宇宙年へと生きていこうではありませんか。

愛する友人の皆さん、皆さんはかつてのゲーテアヌムへの追憶のなかで身を起こし、私を迎えてくださいました。皆さんはかつてのゲーテアヌムへの追憶のなかに生きておられます。さあ今こそ、立ち上がりましょう、私たち人間の本性をかたどる像のなかに見出すことのできる最良の力とともに、私たちはゲーテアヌムの精神においてさらに活動し続ける、という誓いの証（あかし）として。どうかそうあらんことを。アーメン。

そして、愛する友人の皆さん、私たち人間の魂を神々の魂に結びつける意志に従って私たちがそうできる限り、私たちはこれを持ち続けようではありませんか、私たちはこの神々の魂に精神において誠実であり続けようします、私たちがゲーテアヌムの精神科学を求めた人生のあの時、神々の魂へのこの誠実を私

たちはその精神から追求したのです。そして理解しましょう、この誠実を守るということ。

編註

1 ちょうど一年前 ... 講義は：1923年12月31日ドルナハでの講義。『人間と星界の関係 人類の霊的な聖体拝領』(十二回の講義、1922 GA219)所収。

2 この形のなかで：ルドルフ・シュタイナー『ゲーテアヌムの建築思想』(1921年6月29日、ベルンでの講義、GA290 シュトゥットガルト、1958)参照のこと。

今、私たちは、人智学運動のための力強く重要な出発点とせねばならないこの会議の最終回に集っておりますので、この講義を次のように展開させていただきたいと思ひます、つまりこの講義がその衝動にしたがって、この連続講義によって与えられたさまざまな観点に内的につながりながらも、他方においては、ある意味で、感受力に依じて、とでも申し上げたいしかたで、未来を、とりわけ人智学的努力の未来を示唆することもできるように、そのように展開させていただきたいのです。

今日世界を眺めると、なるほどもう数年来、きわめて夥しい破壊の様相が現れています。西の文明がさらにいかなる破滅の淵へと導かれるかを予感させる諸々の力が働いています。けれども、こう言ってよいかもしれません、生活のきわめてさまざまな分野においていわば外的な主導権を握っている人々を直視してみれば、これらの人々がいかに恐るべき宇宙的眠りにとらわれているかに気づくだろう、と。――彼らはほぼ次のように考えます、そしてつい最近までたいいてい人はこう考えていました、十九世紀まで、人類は理解力と観照に関しては素朴で子供じみていた、と。それからきわめてさまざまな分野に近代科学が到来した、そして今や、未永く真実として保存されねばならないものがきつとあるのだ、と。

このように考える人たちは実にとほうもない高慢のなかに生きているのですが、ただそのことをわかっておりません。これに対して、今日の人類の内部には、事態はやはり、私がたった今大多数の人々の意見として示したようなものではない、という何らかの予感が現れることもあるのです。

少し前にドイツで、ヴォルフ事務所によって企画されたあの講演（ 1 ）を行うことができ、非常に多くの聴衆を得て、実際いかに人智学（アントロポゾフィー）が求められているか、少なからぬ人が気づいたわけですが、このとき、数多くのたわいない敵対の声に混ざって、ひとつの声が発せられました、なるほどほかのものに比べて取り立てて内容的に思慮深いところはないのですが、それでも独特の予感を示している声です。それは新聞の小記事で、私がベルリンで行うことのできた講演のひとつが引き合いに出されておりました。その新聞の論評というのはこうでした、このようなこと――私があの時ベルリンでの講演で述べたようなこと――を傾聴するなら、人間たちを今までとは異なる霊性へと駆り立てる何か、単に地上のみならず――私はほぼその記事どおり引用しています――、全宇宙において起こっている、ということに気づかされるだろう、と。今、単に地上的な衝動のみならず、いわば宇宙の諸力が、人間に何かを要求している、宇宙における一種の革命を、その成果がまさに新たな霊性への努力でなければならない一種の革命を要求していることがわかる、と。

ともかくもこのような声がありました、そしてこれは実際注目すべきことです。と申しますのも、今や私たちがドルナハから始めようとするものに正しい衝動を与えなければならないもの、それは、私がここ数日間さまざまな観点から主張しましたように、地上で芽生えた衝動ではなく、霊的世界で芽生えた衝動でなければならないからです。私たちはここで、霊的世界からの衝動に従う力を発達させようとしているのです。ですから私は、このクリスマス会議の期間中夕方の方の講義で、歴史的進化のなかにあったさまざまな衝動についてお話ししました、霊的衝動を受け入れるために心を開くことができるようにです、まず地上世界へと流れ込ませなければならず、地上世界そのものにとらえられてはならない霊的衝動を。と申しますのも、今まで正しい意味で地上世界が担ったものはすべて、霊的世界に起源を有していたからです。そして私たちが地上世界のために実り多いことを成し遂げるべく定められているなら、そのための衝動は霊的世界から取ってこられねばなりません。

このことは、愛する友人の皆さん、この会議から今後の活動のなかに私たちが持ち帰るべき推進力が、いかに大きな責任と結びつかねばならないかを指摘させずにはおかないのです。

この会議を通じて私たちに大きな責任として負わせられるもののそばに、数分ばかりとどまらせてください。過去数十年間、霊的世界に対するある感覚をもつひとは、幾人もの人物のそばを通り過ぎることができたでしょう、霊的に観察し、この観察から地球の人類に到来しつつある運命に対して辛い感情を覚えながら。まさに霊において可能なあのしかたで地上の同胞のそばを通り過ぎ、そしてこうした人々を観察することができたでしょう、睡眠中に物質体とエーテル体を去り、自我とアストラル体とともに霊的世界に滞在しているときのこうした人々を。過去数十年間、人々が眠っている間の自我とアストラル体の運命の上方を逍遙するのですが、これがすでに、こういうことを知る人に対して責任の重さを指

摘する経験へのきっかけだったのです。眠りについてから目覚めるまで物質体とエーテル体を離れていたこれらの魂が、それからしばしば境域を守る者（境域の守護霊[Hueter der Schwelle]）へと近づいていくのが見られました。

この霊的世界への境域の守護者は、人類進化の経過にともない、きわめて多種多様に人間の意識の前に登場しました。少なからぬ伝説、神話—なぜならもっとも重要な事柄は、歴史的伝承という形式ではなく、こういう形で維持されるのが常なのですから—が、かつての時代において、あれこれの人物が境域の守護者と出会い、そしてこの守護者から、霊的世界へといかに参入し、物質界へとまたもどってくるべきか教えられたことを示しています。と申しますのも、霊的世界への正しい参入にはすべて、どの瞬間においても物質界へと帰還することができるという可能性がともなっていなければならないからです、夢想家ではなく、夢想的な神秘家ではなく、まったく実際的で思慮深い人間として物質界のなかに現実的にしっかりと両脚で立つ可能性が。

結局のところ、霊的世界への参入を目指す何千年にもわたる人間の努力のすべてを通じて境域の守護者に対して求められたのはこのことでした。けれどもとりわけ十九世紀の最後の三分の一の時期には、目覚めた状態で境域の守護者のところまで達する人間はほとんど見られなくなりました。何らかの形で境域の守護者のかたわらを通り抜けることが歴史的に全人類に課せられている現代においてはしかし、申しましたように、霊的世界のなかをふさわしく逍遙してみると、眠っている魂が自我およびアストラル体として境域の守護者に近づくのがますますいっそう見出されます。今日得ることのできる重要な形象（光景）とは、目覚めた状態では境域の守護者に近づく力を持たないため、睡眠中に接近してくる、眠れる人間の魂集団に取り囲まれた厳格な境域の守護者なのです。

そしてそのとき起こっている光景を見ると、不可欠の大きな責任の芽生えと名づけたいものと結びついている考えに至ります。このように眠った状態で境域の守護者に近づく魂たちは、人間が睡眠中に有している意識—目覚めた意識にとっては無意識的かあるいは下意識的な—をもって、霊的世界への参入を、境域を踏み越えることを要求します。そして数え切れないほど多くの場合、厳格な境域の守護者の声が聴こえます、お前はお前自身の救済のために境域を踏み越えることは許されない、お前は霊界への参入を許されない、お前は戻らなければならない、と。—と申しますのも、境域の守護者がこういう魂たちにあっさりとして霊的世界への参入を許すとしたら、こういう魂たちは、境域を通り抜けて、今日の学校、今日の教育、今日の文明に与えられた概念とともに、霊的世界に参入してしまうだろうからです、今日人間が六歳から結局は地上生活が終わるまでの間、それとともに成長していかざるを得ない概念や理念とともにです。

これらの概念や理念にはこういう特性があります、現代の文明や学校を通じてこれらの概念や理念とともに人はこうなったわけですが、こういう概念や理念をもって霊的世界に参入すると、人は魂的に麻痺してしまうのです。すると思考も理念も空虚な状態で物質的世界に戻ってくることになるでしょう。もし境域の守護者がこれらの魂を、現代の人間たちの多くの魂を、厳格に突き返さないなら、これらの魂を霊的世界に入らせてしまうなら、これらの魂は、目覚めて再び帰還するとき、決定的な目覚めの状態で戻ってくる時、こういう感情を持つことでしょうか、私は考えることなどできない、私の思考は私の脳をとらえない、私は考えることなく世界を歩いて行くしかない、と。—と申しますのも、今日人間があらゆるものに結びつけている抽象的な理念の世界とは、その理念とともに霊的世界に入っていくことはできても、その理念とともに出てくることはできない、というものだからです。そして、今日ふつつ思われている以上に数多くの魂が今日睡眠中に実際に体験しているこの光景を見ると、人はこう言うのです、おお、これらの魂が睡眠中に体験していることを、死においても体験しなくてすむよう、これらの魂たちを守ること成功しさえしたら！と。と申しますのも、このように境域の守護者の前で体験される状態がじゅうぶん長く続いていくとしたら、すなわち、人間の文明が、今日学校で受容され、文明を通じて受け継がれ保存されるもののもとに長くともどまるとしたら、眠りから生が生じるようになるでしょうから。人間の魂は死の門を通過して霊的世界に入っていくでしょうが、理念の力をふたたび次の地上生へともたすことはできないでしょう。今日のような思考とともに霊的世界に入っていくことはできますが、その思考とともにまた出てくることはできないからです。魂的に麻痺した状態で再び出てくることしかできません。

よろしいですか、現在の文明は、これほど長期にわたって育成されてきた霊的生活のこういう形式に基づいていますが、生はこの形式には基礎を置くことはできないのです。この文明はしばらく続いていくでしょう。魂はまさに目覚めている間は、境域の守護者について何ら予感することもなく、麻痺してしまわ

ないように睡眠中に境域の守護者に拒絶され、とどのつまり、未来において、この未来の地上生のなかで知性も、人生における理念も示すことのない種類の人間が生まれるでしょう、そして、思考は、理念のなかの生命は、地上から消えてしまうでしょう。地球は、病的な、単に本能的な人類を住まわせるしかなくなるでしょう。理念の力に導かれることのない、劣悪な感情と情動だけが人類進化のなかにはびこるでしょう。そう、悲惨な形象（光景）が靈視する者の前に現れるのは、単に描写しましたようなしかたで、靈界に参入できない境域の守護者の前にたたずんでいる魂たちを観察することによってのみではありません、別の関連においても現れるのです。

特徴をお話ししましたあの逍遙、境域の守護者の前の眠っている人間の魂を観察することのできるあの逍遙の際に、今度は西ではなく、東の文明に起源を持つ人類を見てみますと、そのような東の人類を見てみますと、彼らから、西の全文明に対する恐るべき非難のように靈の声が高まってくるのが聞こえます、見るがいい、このようなことが続けば、今日生きている人間たちが新たに地上に受肉して現れるとき、もう地球は荒れ果てているだろう、と。人間たちは理念を持たず、本能のなかでのみ生きるだろう。お前たちも落ちぶれたものだ、お前たちが東洋の古の靈性[*Spiritualitaet*]にそむいたからだ、と。

実際のところ、人間の課題であるものにとって、靈的世界への私が描写しましたこのような眼差しこそが、強い責任の所在を明白に示すことができるのです。そしてここドルナ八には、それを聴きたいと思う人たちにとって、靈的世界におけるあらゆる重要な直接的体験について語られることのできる場所がなければなりません。ここは単に、思案の限りを尽くし論理を操る経験的な現代の科学性のなかに、靈的なもののかすかな痕跡があそこあるいはここにある、ということを示唆する力が見出されるだけの場所ではなければならないというわけではありません、ドルナ八がその課題を実現しようとするなら、ここは、靈的世界において歴史的に生じるもの、靈的世界で衝動として起こり次いで自然的存在のなかに入り込んでいって自然を支配するものによって開かれていなければなりません、ドルナ八においては、真の体験について、真の力について、人間の靈的世界での真の本質について聞くことができなければなりません。ここは真の精神（靈）科学の大学でなければなりません。そして、私が描写しましたように眠っている人間を厳格な境域の守護者の前に導いていく今日の科学性の要請を前にして、私たちは今後、退却することは許されません。ドルナ八においていわば、――これは靈的な意味で申し上げたいのですが――靈的世界に真正面から真に対峙し、靈的世界について経験する力を獲得することができなければならないのです。

ですから、ここで今日の科学理論の不十分さについて論理を弄ぶ長弁舌を振りたいわけではありません、そうではなく人間が通常の学校のなかにその末端の見られる科学理論に貫かれて、どういう状態で境域の守護者の前にやってくるか、そのことに注意を喚起しなければならなかったのです。今この会議に際して、一度このことを真剣に自らの魂に対して認めたら、このクリスマス会議は力強い衝動を魂のなかに送り込むことでしょ、そしてこの衝動はこれらの魂を今日人類に必要な力強い働きへと導いていくことができるでしょう、人間たちが真に境域の守護者に会うことができ、つまり、文明そのものが、境域の守護者の前で耐えられる文明になるような次の受肉を人間たち見出すために必要な働きへと。

今日の文明を以前の文明と比べてみてごらん下さい。かつてのあらゆる文明には、まず超感覚的世界へ、神々へと上昇してゆく概念、理念、つまり産出し、創造し、生み出す世界へと上昇していく概念、理念がありました。次いで、仰ぎ見るなかでとりわけ神々に属している概念とともに、ひとは地上世界を見下ろし、今度はこの地上世界をも神々にふさわしい概念と理念で理解することができたのです。神々にふさわしく神々に値するよう育成されたこれらの理念とともに境域の守護者の前にやってくると、境域の守護者はそのひとにこう言ったのです、お前は通過することができる、地上生の間に物質体のなかですでに超感覚的世界に方向づけられたものを、お前は超感覚的世界のなかへと携えていくからだ、と。それなら、物質的―感覚的世界に帰還するときにも、超感覚的世界を見ることによって麻痺させられないための力がお前に残されるだろう、と。――今日人間は、時代の精神にしたがって単に物質的―感覚的世界にのみ適用しようとする概念と理念を発達させています。これらの概念理念は、ありとあらゆる計量できるもの、測定できるものその他を扱いますが、ただ神々を扱うことはできません。これらの概念理念は神々にふさわしくありません、神々に値しないのです。それゆえに、神々に値せず神々にふさわしくない理念の唯物主義にまったく陥ってしまった魂たちに雷のような声が轟きます、眠りながら境域の守護者のところを通りかかるとき彼らに対して雷のような声が轟くのです、境域を越えてはならぬ！と。お前はお前の理念を感覚界に対して誤って用いた。それゆえお前はお前の理念とともに感覚界にとどまらねばならない、魂的に

麻痺してしまいたくないなら、お前はその理念とともに神々の世界に入ることはできない、と。

よろしいですか、こういう事柄について語られねばなりません、それについてあれこれ考えをこね回すためにではなく、その心情が、これらの事柄によって貫かれ、浸透され、かくも厳肅な人智学協会クリスマス会議より持ち帰るべき正しい気分に至るために、語られねばならないのです。と申しますのも、私たちが持ち帰るほかのすべてにもまして重要になるのは、私たちが持ち帰る気分、ドルナ八において、霊的認識の中心が生み出されるだろう、という確信を与える気分だからです。

ですから、今日の午前、ここドルナ八において育成されるべきひとつの分野、つまり医学の分野のために、ツァイルマンズ博士（ 2 ）によって次のように語られたことは、非常に真実味をもって響きました、つまり、今日、通常の科学の方からはもはや、ここドルナ八で基礎固めをしなければならぬものへと橋を架けることはできない、ということです。私たちの地盤の上に医学的に育つものについて、私たちが、我々の論文は現代の臨床的な要求にも耐えうると自負している、というように述べるなら、私たちの本来の課題である事柄をもってしては、私たちは決して特定の目標に到達することはないでしょう、なぜなら、そうすればほかの人々はこう言うだろうからです、ああ、新薬ですね、我々ももう新薬を造りましたよ、と。

けれどもやはり重要なのは、人智学の生のなかに、医学のような生の実践の一部門が取り入れられるだろう、ということです。このことを私は今日の午前ツァイルマンズ博士（ 2 ）の切望と解しました。と申しますのも、この目標に対し彼はこう語ったからです、今日医者になった人は、私はまさしく医者になった、と言います――、けれども彼は、新たな世界の一角から衝動を与える何かを切望しているのです、と。――そしてよろしいですか、医学の分野では、将来疑問の余地なく、これをここドルナ八から実行していかなければなりません、人智学的なものの中に胚胎されていた人智学的活動の数多くの他部門がまさに活動してきたように、そして今、私の協力者であるヴェークマン博士（ 3 ）とともに、まさにあの人智学そのものから形成される医学システム、人類はこれを必要とし、まずこれが人類の前にあらわれるでしょうが、あの医学システムが作り上げられたように。同様に私が意図しているのは、あれほど祝福に満ちた活動をしているアーレスハイムの臨床医療研究所との緊密な関係を、ゲーテアヌムとこの研究所とのできるだけ密接な結びつきを、できるだけすみやかに近い将来確立することです、そうすれば実際に、そこでの成果が人智学の真の方向づけのラインに乗っていくことでしょう。これはまた、ヴェークマン博士自身の意図するところでもあります。

さて、これとともに、ツァイルマンズ博士はある分野のために、ドルナ八の理事会が人智学的活動の今やあらゆる分野において課題とするであろうことを指摘されました。したがってどういう事情なのか、今後わかってくるでしょう。ひとはこうは言わないでしょう、あそこにオイリュトミーを持っていこう、人々がまずオイリュトミーを見て、人智学について何も知らないなら、オイリュトミーは人々の気に入るだろう。それからその後、オイリュトミーが気に入ったのでひょっとしたら彼らはやってくるかもしれない、そしてオイリュトミーの背後に人智学があることを知るかもしれない、そうしたら人智学も彼らの気に入るだろう、と。――あるいは、まず最初に、人々に薬の実用を示さなければならない、そうすれば人々はこれを買うだろう。そうすれば彼らは後になっていつか、その薬の背後に人智学が潜んでいる、と知るだろう、そうすればそのときは彼らも人智学に近づくだろう、と。

私たちは、このようなやり方をとることを不誠実とみなす勇気を持たなくてはなりません。私たちがこのようなやり方を不誠実とみなす勇気を持ち、そういうことに内的な嫌悪を覚えてはじめて、人智学は世界へと通じる道を見出すことでしょう。そしてこの点において、将来ここドルナ八が、ファナティズムなしに、誠実でまっすぐな真理への愛のなかで堅持しなければならないものとは、まさに真理への努力でしょう。そうすることによってこそ、過去数年にかくも甚だしく働かれたかなりの不正を、良くしていくことができるかもしれないのです。

軽々しい思いではなく厳肅な思いをもって、私たちは一般人智学協会設立に通じたこの会議を去らねばなりません。けれども私が思いますに、クリスマスにここで起こったことから誰もベシミズムを持ち帰る必要はなくなりました。なるほど私たちは毎日、悲惨なゲーテアヌムの廃墟の前を通っております、けれども、この会議のためにこの丘を登ってきてこの廃墟のそばを通り過ぎたどの魂のなかにも、同時に、ここで行われたことを通じて、つまりありありと目に見えるように、ここで私たちの友人たちによっておそらく心のなかで理解されたであろうことを通じて、あらゆるものからやはりこういう思いが起こってきた

と思うのです、まさに再建されつつあるゲータアヌムからの真の精神生活として将来の人類の恵みのためにぜひとも生み出さねばならない霊的な炎が、私たちの勤勉を通じて、私たちの帰依を通じて生み出さねばならない霊的な炎が、きっと出てくるのだ、という思いが。そして私たちが、人智学上の事柄を行う勇気をもってここから出かけて行けば行くほど、私たちの集いによってこの会議においてともかくも希望に満ちた霊の行進のように進行したことを、私たちはいっそうよく聞き取ることになるでしょう。と申しますのも、皆さんに描写しましたあの光景、しばしば目にすることのできあの光景、境域の守護者の前で眠っている退廃した文明と学校とともにある今日の人間――、これは本来、感受性のあるアントロポゾーフたちのグループにはやはり存在しないからです。それでもやはり、状況によっては、勧告のみを要するものもあります、その勧告はこのようなものです、お前は霊の国からの声を聞くために、この声を自ら認め、発展させる強い勇気を持たなければならない、お前は目覚め始めているのだから、と。ただ勇気の欠如だけが、お前を眠りに導くことができる、と。

勇気を出すように勧める声、勇気による目覚めへと勧告する声、これが別のヴァリアンテ（変形）、現代の文明生活におけるアントロポゾーフたちのためのヴァリアンテです。アントロポゾーフでない人たちにはこのように聞こえます。霊の国の外にとどまるがいい、お前は理念を単なる地上的な対象に誤用した、お前は、神々に値するような、神々にふさわしいようなどんな理念も集めなかった。それゆえお前は、物質的・感覚的世界に再び帰還する際、麻痺せざるを得ないだろう、と。――しかしアントロポゾーフの魂であるような魂にはこう語られるでしょう、お前たちの心情の傾向により、お前たちの心の傾向により、お前たちが声として聞き取ることができるであろうものを認める勇気においてのみお前たちを試すこととしよう、と。

親愛なる友人の皆さん、私たちがかつてのゲータアヌムを焼き尽くした燃え上がる炎を見たときから昨日一年目を迎えましたが、きょう私は――私たちは一年前、外で炎が燃え上がっていたときでさえ、ここでの仕事の継続を妨げられはしませんでしたので――、こう望むことを許されるでしょう、物質的なゲータアヌムが立つときには、私たちはもう活動していて、物質的ゲータアヌムは、今世界へと出ていく私たちが共に理念として受け取りたい霊的ゲータアヌムの単なる外的な象徴（シンボル）になっていることを。

私たちはここに礎石を据えました。この礎石の上に建物を築いていかなければなりません、私たちのすべてのグループにおいて今や広い外の世界でひとりひとりによって成し遂げられる働きがそのひとつひとつの石となるような建物を。精神において今、こういう働きを眺めましょう、すると、今日お話ししました責任が私たちに意識されるでしょう、境域の守護者の前にたたずんでいる現代の人間たち、霊的世界への参入を拒まれねばならない人間たちに対する責任が。

私たちに一年前にふりかかったことについて、この上なく深い苦痛と悲しみを感じる以外、決して思い浮かばないというのはまったくたしかです。しかしながら、世界においては何事も――私たちはこれも心に刻みつけておいてよいでしょう――、世界においてある一定の偉大さに到達したものはすべて、苦しみから生まれるのです。ですから愛する友人の皆さん、皆さんの働きによって力強く輝かしい人智学協会が苦しみから生まれるように、そのように私たちの苦しみがいられますように。

これを目指して、私が最初に語りましたあの言葉のなかに私たちは沈潜しましたが、あの言葉をもって私はこのクリスマス会議を終えたいと思います、単に年の始まりのためではなく、霊的生を帰依に満ちて育むために献身しようとする宇宙紀元の始まり[Welten-Zeitenwende-Anfang]のためにも、私たちの聖夜、クリスマスとせねばならないこのクリスマス会議を（ 4 ）。

人間の魂よ！
お前は四肢のなかに生きる、
宇宙空間を貫き
霊の海のうねりのなかでお前を担っていく四肢のなかに。
魂の深みに
霊を思い出せ、
そこにしろしめす
宇宙創造存在のなかで
自身の自我は

神なる自我のうちに
ある。
かくてお前は真に生きるだろう
人間宇宙存在のなかで。
なぜなら高みの父なる神は
存在を生み出しつつ宇宙の深みでしろしめすのだから。
セラフィム、ケルビム、トローネよ、
高みより響きわたらせよ、
深みに反響（こだま）すものを。
それは語る、
エクス デオ ナスキムル（神より生まれる）、
元素霊たちがそれを聴く、
東で、西で、北で、南で。
どうか人間がこれを聴くように。

人間の魂よ！
お前は心臓と肺の鼓動のなかに生きる、
時のリズムを貫きお前を
自身の魂の本質を感じることに導く鼓動のなかに。
魂の均衡のなかに
霊を思え、
そこにうねる
宇宙生成行為は
自身の自我と
宇宙自我を
ひとつにする。
かくてお前は真に感じるだろう
人間の魂の働きのなかで。
なぜなら経巡るキリスト意志は
魂を祝福しつつ宇宙のリズムのなかでしろしめすのだから。
キュリオテテス、デュナーミス、エクスシアイよ、
東より鼓舞せよ、
西によって形作られるものを。
それは語る、
イン クリスト モリムル（キリストにおいて死ぬ）、
元素霊たちがそれを聴く、
東で、西で、北で、南で。
どうか人間がこれを聴くように。

人間の魂よ！
お前は休らう頭のなかに生きる、
永遠の奥底からお前に
宇宙思考を明かす頭のなかに。
思考の静寂のなかに
霊を観よ、
そこでは神々の永遠の目的が
宇宙存在の光を
自由な意志のために

自身の自我に
贈る。
かくてお前は真に思考するだろう、
人間の霊の奥底で。
なぜなら霊の宇宙思考は
光を懇願しつつ宇宙の本質のなかでしろしめすのだから。
アルヒヤイ、アルヒアンゲロイ、アンゲロイよ、
おお、深みより請い求めよ、
高みにおいて聴かれるものを。
それは語る、
ペル スピリトゥム サンクトゥム レヴィヴィスキムス
(聖霊により甦る)
[元素霊たちがそれを聴く、
東で、西で、北で、南で。
どうか人間がこれを聴くように。]
([]内の言葉は速記原稿によればここでは語られていない)

紀元の初めに
宇宙の霊の光が
地上存在の流れに歩み入った。
夜の闇が
蔓延（はびこ）っていたが
真昼のように明るい光が
人間の魂を照らした。
光、
それは貧しい羊飼いの心を
暖める。
光、
それは聡い王者の頭を
照らす。
神的な光よ、
キリスト太陽よ、
暖め給え、
私たちの心を。
照らし給え、
私たちの頭を。
私たちが心の底から
目的を定めて導いていこうとするものが
良くされるように。

このように、わが愛する友人の皆さん、皆さんが人智学協会のための礎石を据えたときの暖かい心を担って行ってください、この暖かい心を、世界への力ある、治癒力ある働きかけへと担って行ってください。そして、今皆さん全員が目的意識をもって導いていこうとするものが皆さんの頭を照らすことが、皆さんの助けになるでしょう。きょう私たちはこのことを全力で決心したいと思います。けれども私たちにはわかるでしょう、私たちがそれにふさわしく自己を示せば、ここから意志されたものの上に良き星がしろしめすであろうことを。従いなさい、わが愛する友人の皆さん、この良き星に。神々がこの星の光によって私たちをいずこに導いていくか、私たちは見てみたいのです（*）。

神的な光よ、
キリスト太陽よ、
暖め給え、
私たちの心を。
照らし給え、
私たちの頭を！

編集者註

1 ヴォルフ事務所によって企画されたあの講演：1921年の秋冬と1922年の新年に、当時最大のコンツェルトディレクション、ベルリンのヘルマン・ヴォルフ及びユース・ザックスが、シュタイナーとの講演旅行を企画した。ベルリン、シュトゥットガルト、フランクフルト、ケルンその他の大都市において、シュタイナーは人智学の本質、人智学と科学、人智学と霊認識といったテーマについて語った(GA80として出版予定)。1922年ミュンヘンにおける不幸な暗殺計画の後、もはや講演者の安全が保障されないことが明らかになった。この後シュタイナーはもはやそれ以上の公開講演の義務にもはや応じなかった。

2 ツァイルマンス博士：F. W. Zeylmans van Emmichoven ツァイルマンス ファン エミヒョーベン 1893-1961 医学博士、オランダの医師、著述家、オランダ地区協会事務総長。とくに『ルドルフ・シュタイナー 伝記』(シュトゥットガルト1961)を著した。

* 邦訳『ルドルフ・シュタイナー』伊藤勉・中村康二訳(人智学出版社)

3 イタ・ヴェークマン：Ita Wegman 1876-1943 医学博士、チューリヒ大学で研究、診療の後、1921年アーレスハイムに臨床医療研究所(現在イタ・ヴェークマン・クリニック)を設立。1923年クリスマスから1935年まで一般人智学協会理事会書記、自由大学医学部門の長。1924/1925年、シュタイナーの主治医及び『精神科学的認識による治療芸術拡張のための基礎』(GA27)をシュタイナーと共著。

4 以下の朗唱詩は速記原稿により、シュタイナーに語られたままがここに再現されている。旧版では、この詩はシュタイナーの最初の手書き草稿にしたがって印刷された。これについては『一般人智学協会設立のためのクリスマス会議1923/1924年』(GA260 1985年版、300頁)の巻の特註を参照のこと。

訳註

* この最後の数行でシュタイナーは、聴衆に向かって今までのSie(通常の敬称二人称)に代わって、古い形のIhr(十七世紀以前に使われた敬称二人称)によって呼びかけています。